以下については、公開対象から除いています。

五四～六三頁
Ⅵ　自然科学的分析
一　試料
二　花粉分析
三　珪藻分析
四　総合考察

図版二四

埼玉古墳群発掘調査報告書　第三集

愛宕山古墳

埼玉県教育委員会

序

埼玉県は、全国に先がけて、史跡「埼玉古墳群」の広域保存と環境整備を図る目的で、さきたま風土記の丘の建設計画を立てました。

埼玉県教育委員会では、この計画にもとづき、昭和四十三年の稲荷山古墳にはじまる継続的な発掘調査を実施し、その成果にもとづいた環境整備を促進する一方、昭和四十四年にはさきたま資料館を開館し、資料の収蔵・展示の充実に鋭意努力してまいりました。

本書で報告する愛宕山古墳は、全長約五十三㍍の前方後円墳であり、昭和五十六年度に周堀部分の発掘調査を実施いたしました。その結果、周堀の形態が稲荷山古墳や鉄砲山古墳と同様の長方形にめぐる二重堀であることが判明したほか、堀の中から貴重な埴輪が多数出土いたしました。

本書は、埼玉古墳群の稲荷山古墳、鉄砲山古墳に次ぐ、埼玉古墳群発掘調査報告書第三集でありますが、埼玉古墳群に関する基礎資料として広く御活用いただき、教育、学術、文化の振興に役立つことができれば幸いであります。

最後になりましたが、本書の刊行に至るまで多大の御指導・御協力を賜りました文化庁をはじめとする関係各機関並びに関係者各位に対して、深く感謝の意を表します。

昭和六十年三月

埼玉県教育委員会教育長

長　井　五　郎

目次

序
例言
調査の組織
Ⅰ 調査に至る経過……1
Ⅱ 調査の経過……1
一 前方部南側調査区（西半部分）……1
二 後円部東側調査区……2
三 前方部南側調査区（東半部分）……2
Ⅲ 遺跡の立地と環境……3
Ⅳ 調査の成果……6
一 遺構……6
㈠ 前方部南側調査区……8
㈡ 後円部東側調査区……12
二 遺物……15
㈠ 埴輪……15
㈡ 土師器及び須恵器……18
Ⅴ まとめ……51
Ⅵ 自然科学的分析……54
一 試料……54
二 花粉分析……54
㈠ 分析方法……54
㈡ 分析結果……54
三 珪藻分析……56
㈠ 分析方法……56
㈡ 分析結果……57
四 総合考察……59

挿図目次

第1図　愛宕山古墳の位置と周辺の遺跡……5
第2図　愛宕山古墳及び発掘調査区の位置……6
第3図　愛宕山古墳測量図及び各調査区の位置……7
第4図　前方部南側調査区全測図……9
第5図　前方部南側調査区土層断面図……10
第6図　前方部南側調査区内堀内遺物出土位置図……10
第7図　前方部南側調査区土壙（SH）及び井戸（SE）実測図……11
第8図　後円部東側調査区全測図……13
第9図　後円部東側調査区土層断面図……14
第10図　後円部東側調査区内堀内遺物出土位置図……14
第11図　前方部南側調査区出土遺物実測図1（1、2）……19
第12図　〃　2（3、4）……20
第13図　〃　3（5、6）……21
第14図　〃　4（7、8）……22
第15図　〃　5（9～11）……23
第16図　〃　6（12、13）……24
第17図　〃　7（14～16）……25
第18図　〃　8（17～23）……26
第19図　〃　9（24～40）……27
第20図　〃　10（41～48）……28
第21図　〃　11（49～64）……29
第22図　〃　12（65～76）……30
第23図　〃　13（77～88）……31
第24図　後円部東側調査区出土遺物実測図1（89、91）……32
第25図　〃　2（90、92、93）……33
第26図　〃　3（94～108）……34
第27図　〃　4（109～114）……35
第28図　〃　5（115～124）……36
第29図　〃　6（125～138）……37
第30図　〃　7（139～153）……38
第31図　〃　8（154～169）……39
第32図　〃　9（170～186）……40
第33図　形象埴輪（187～192）及び須恵器（193～200）実測図……41
第34図　主要花粉、胞子化石ダイヤグラム……64
第35図　主要珪藻化石ダイヤグラム……64

表目次

第1表　主要な円筒埴輪の計測値……18
第2表　出土遺物観察表1……42
第3表　〃　2……43
第4表　〃　3……44
第5表　〃　4……45

第6表　〃　5……46
第7表　〃　6……47
第8表　〃　7……48
第9表　〃　8……49
第10表　〃　9……50
第11表　試料表……54
第12表　花粉分析結果一覧……61
第13表　珪藻分析結果一覧……62・63

図版目次

図版一　愛宕山古墳の埼玉古墳群内の位置
図版二　1　愛宕山古墳近景
　　2　前方部南側調査区内堀及び中堤
図版三　1　前方部南側調査区内堀
　　2　〃　中堤
図版四　1　前方部南側調査区外堤
　　2　〃
図版五　1　前方部南側調査区内堀内遺物出土状況
　　2　〃
図版六　1　前方部南側調査区内堀内遺物出土状況
　　2　〃
図版七　1　〃　2　後円部東側調査区全景
図版八　1　後円部東側調査区遺物出土状況
　　2　〃
図版九　1　前方部南側調査区出土遺物1（1）
　　2　〃（2）
図版一〇　1　〃（3）
　　2　〃（4）
図版一一　1　〃（5）
　　2　〃（6）
図版一二　1　〃（7）
　　2　〃（8）
　　3　〃（9）
図版一三　1　〃（10・11）
　　2　〃（10）
　　3　〃（12）
図版一四　1　〃（13）
　　2　〃（14）
図版一五　1　〃（15～19）
　　2　〃（16・20～28）
図版一六　1　〃（17・29～44）
　　2　〃（18・45～51）
図版一七　1　〃（19・52～75）

2　〃　20（76～88）

図版一八　1　後円部東側調査区出土遺物　1（89）

2　〃　2（90）

図版一九　後円部東側調査区出土遺物　3（91～112）

図版二〇　1　後円部東側調査区出土遺物　4（113～115）

2　〃　5（116～127）

図版二一　1　〃　6（128～144）

2　〃　7（145～165）

図版二二　1　〃　8（166～186）

2　形象埴輪　1（187～189、192他）

図版二三　1　〃　2（190、191他）

2　〃　3

3　須恵器（193～200他）

〈参考〉　行田市遺跡調査会実施調査区出土人物埴輪

図版二四　1　花粉及び胞子化石顕微鏡写真

2　珪藻化石顕微鏡写真

例　言

一　本書は埼玉県行田市埼玉（さきたま）五二〇六、他に所在する愛宕山古墳周堀の発掘調査報告書である。

二　発掘調査は昭和五六年度に、整理は昭和五九年度に、文化庁国庫補助事業として実施した。

発掘調査期間　昭和五六年七月一日～昭和五六年九月三〇日

（担当者　梅沢　太久夫、今泉　泰之、中島　宏）

三　各事業の組織は別表に掲げるとおりである。

四　出土品の整理及び本書の挿図、図版作成は主に杉崎茂樹が当り、小久保徹、中島　宏の協力を得た。

五　本書の執筆は各文末に記したとおり行ったが、全体について横川好富が加除筆を行った。

六　写真撮影は、遺構については各担当者が、出土遺物については杉崎　茂樹が行った。

七　遺構の名称を、挿図中では以下のように略して表示した。

SA：内堀、SB：中堤、SC：外堀、SD：溝、SE：井戸、SH：土壙

八　花粉、胞子及び珪藻分析は（株）パリノ・サーベイに、発掘調査区内の基準点及び水準点の設定は（株）中央航業に委託したものである。

九　発掘調査から整理、報告に至るまで、左記の方々及び各機関から御指導、御協力を賜わった。

発掘調査

青代　清一　秋山　時三　岩崎　いく　太田　博之　大野　かく
大野　源一　大野　鶴枝　大野　りん　加相　なか　川崎喜久男
川崎　なつ　菊地　きん　木村　あさ　鴻野　淳　小林　計治
小林　志乃　小林　仁一　島崎しづ子　島田とし子　柴崎　まつ
関　義則　関口　よし　田島　幸枝　野口　ふみ　萩原　太郎
山崎美栄子

整理・報告

太田　博之　河辺美津江　掛川智恵子　木村　俊彦　小島　清一
坂本　和重　坂本　孝則　白井　照子　島田　益江　鈴木須美江
関口　広子　多田　健二　浜中　紀子　橋本　一江　三田あけみ
市毛　勲　井上　裕一　岩崎　卓也　大塚　初重　金子　真土
金子　正之　亀井　正道　車崎　正彦　斉藤　国夫　塩野　博
田中　一郎　田部井　功　寺社下　博　中島　利治　増田　逸朗
柳田　敏司　山崎　武　吉川　国男　若松　良一
行田市教育委員会　行田市遺跡調査会　熊谷市教育委員会
鴻巣市教育委員会

調査の組織

主体者　埼玉県教育委員会

教育長　井五郎（昭和五九年度）
教育次長　沼尻和也（昭和五六年度）
同　岩上　進（昭和五九年度）

事務局（企画・調整）　埼玉県教育局文化財保護課

課長　野村鍋一（昭和五六年度）
同　課長補佐兼民俗文化財・記念物係長　金井塚良一（昭和五九年度）
木戸一恵（昭和五六年度）
課長補佐兼庶務係長　町田勝義（昭和五六、五九年度）
課長補佐　早川智明（昭和五九年度）
庶務係　畔上敦志（昭和五六年度）
同　柚木　博（昭和五六、五九年度）
同　亀田　孝（昭和五九年度）
埋蔵文化財係長　栗原文蔵（昭和五六年度）
同　梅沢太久夫（昭和五九年度）
文化財係　井上尚明（昭和五六年度）
同　杉崎茂樹（昭和五六年度）
同　宮崎朝雄（昭和五九年度）
同　鈴木秀雄（昭和五九年度）

事務局（発掘調査・整理）　埼玉県立さきたま資料館

館長　鈴木太一（昭和五六年度）
同　坂巻正一（昭和五九年度）
副館長兼庶務課長　八木原　厳（昭和五六、五九年度）
副館長　横川好富（昭和五九年度）
庶務課長　風間克俊（昭和五九年度）
庶務係　橋本克己（昭和五六年度）
同　鈴木春美（昭和五六年度）
同　鈴木廣子（昭和五九年度）
同　川崎栄一（昭和五六、五九年度）
学芸課長　小川良祐（昭和五六年度）
同　小久保　徹（昭和五九年度）
学芸員　今泉泰之（昭和五六年度）
同　中島　宏（昭和五六、五九年度）
同　杉崎茂樹（昭和五九年度）
同　岡本一雄（昭和五六、五九年度）
嘱託　大熊達雄（〃）

Ⅰ　調査に至る経過

埼玉古墳群は昭和一三年八月八日付文部省告示をもって国の指定史跡になっているが、周辺地域を含めて発掘調査が行なわれたのは最近のことである。それまでは遺物の出土は知られているがその状況が不明なものがほとんどである。昭和四〇年に文化庁の前身である文化財保護委員会では、考古、民俗、古文書等の文化財を、その地域の特色ある風土と一体化して保存と活用をはかるための「風土記の丘」建設構想が発表され、それをうけて埼玉県では昭和四二年に埼玉古墳群を中心とした「さきたま風土記の丘」建設事業が開始された。そして同年二月に二子山古墳周堀復原のための事前調査が始まり、以後昭和四九年度までは主として周堀復原工事のためのトレンチ発掘による確認調査が実施されて、二子山、稲荷山、丸墓山、奥の山の各古墳の周堀が復原されている。稲荷山古墳については昭和四三年に主体部の調査が行なわれて報告書も刊行されている。昭和五五年度から国庫補助事業として埼玉古墳群の発掘調査および出土遺物の整理が毎年実施され現在に至っている。これは史跡整備に先行して各古墳の堀や墳丘の範囲を確認するものである。本書に報告する愛宕山古墳については周堀規模を確認するために、昭和五六年度の調査区域として後円部東側と前方部南側を選定し、昭和五六年七月一日から発掘調査を開始した。なお愛宕山古墳東側の市道改良に伴い、行田市遺跡調査会が同年一〇月一三日から一一月七日まで発掘調査を実施しており、その成果の一部についても本書に収録している。

（小久保　徹）

Ⅱ　調査の経過

一　前方部南側調査区（西半部分）

昭和五六年七月一日

前方部南側周堀の発掘調査開始。排土場所の都合で西半と東半に分け、西半から着手。客土及び表土を約二〇㌢の深さで重機で除去し、確認作業を開始。

七月六日～一〇日

ローム層上面（深さ約七〇㌢）まで掘り下げ周堀の確認作業をすすめる。調査区内をほぼ東西にのびる三本の堀を確認。墳丘側から堀Ａ（内堀）、Ｂ（ＳＤ００４）、Ｃ（外堀）と仮称。堀Ａは確認面で埴輪片が出土、コーナー部も確認し周堀と判明。堀Ｂは堀Ａを切ることを確認。堀Ｃは覆土上部から埴輪片が出土、堀Ａとほぼ平行し外堀と考えられたが、南側へ湾曲する様相が窺え、別の古墳の周堀とも考えられた。

七月一三日～一七日

遺構確認作業を終え、堀Ｂを掘り下げ、調査にかかる。堀Ａを壊しており、埴輪片の出土が目立つが、わずかに陶磁器片が混る。堀Ｃはプランがほぼ確定し、堀Ａと平行するため、外堀である様相が強まった。

七月二〇日～三一日

堀Bの調査を終了し、堀Aの調査にかかる。覆土は黒色土、黒褐色土が主体で、プランは比較的明瞭、ほぼ全域から埴輪が出土する。東辺の内側立上り部は攪乱のため不明。雷雨のある日が多く、調査区内の排水に苦慮する。

八月三日～七日

堀Aの調査継続。埴輪の出土状態の写真撮影、実測図作成。堀Cは覆土が内堀と同質のため外堀と判断。調査を進めた結果、外側の立上りは調査区内では検出できなかった。埴輪は内堀にくらべ少ない。

八月一〇日、一一日

外堀の調査を終了し、調査区全体の写真撮影を行う。

二　後円部東側調査区

八月一九日～二一日

調査区を後円部東側墳丘裾と市道の間に設定し、調査を開始した。現地はかつて宅地であったため、墳丘裾まで整地されており、一部は攪乱されている。表土を浅く重機で除去した後、内堀の確認作業にかかった。

八月二四日～二八日

遺構確認作業をすすめる。表土下七〇～八〇㌢でローム層となる。調査区の北及び南に溝を確認し、南端で内堀の外側立上りを検出。内堀の墳丘側立上りは不明のため南壁の墳丘側に一×一・五㍍のトレンチを設定。

八月三一日～九月五日

内堀の調査を継続。埴輪は前方部ほど多くないが、東の部分では中堤側から落ち込んだ状態で、多量に密集して出土。内堀の墳丘側立上りを部分的に確認。堀の底は調査区内では南から北に向い、また、東側から墳丘に向い浅くなる。埴輪の出土状態の写真撮影。実測図作成後取り上げ。

九月七日～一〇日

後円部北側に三・五×一・五㍍のトレンチを設定。しかし溝（ＳＤ０１０）の延長部分が検出され、墳丘端部は明らかにできなかった。

調査区全体写真撮影、実測図を作成し、調査を終了する。

三　前方部南側調査区（東半部分）

九月一〇日、一一日

前方部南側調査区東半の調査を開始。重機により西半調査区の排土を移し、表土、客土を除去し、周堀の確認作業にかかる。ＳＤ００４の延長部分、内堀の東辺外側ライン、外堀の一部を確認。

九月一四日～一九日

外堀、内堀、ＳＤ００４調査。ＳＤ００４の北壁に平行して走る小溝は、西半調査区より深く安定している。外堀の東壁は平行してのびる溝（ＳＤ００５）と重複する。調査区北東隅に土壙（ＳＨ００４）を検出。内堀では多量の埴輪が出土したが、湧水が激しく出土状態の記録できず。

九月二四日～二五日

内堀、外堀の調査終了。外堀の東壁はＳＤ００５の覆土中にあることが判明。外堀底は調査区内中央がやや深く、コーナー部に向いやや浅くなる。

九月二八日、二九日

全体写真撮影、実測図作成し、調査を終了する。

（中島　宏）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

愛宕山古墳は埼玉県行田市埼玉（さきたま）に所在する埼玉古墳群に属する。現存する八基の前方後円墳の中では最も小さい。古墳の名称は墳頂に愛宕社が祀られていたことに由来する。現況は全長五三・〇㍍、後円部径三〇・〇㍍、同高さ三・三八㍍、前方部幅四一・五㍍、同高さ三・三㍍、主軸の方向角は座標北―五七・〇度―東である。東側鞍部がやや削られ、西側の鞍部から前方部側面は約一㍍土取りされて崖面になっている。愛宕山古墳は標高一八・一㍍の埋没ローム台地（洪積微高地）に立地している。埋没ローム台地は、台地が沈降して沖積層に覆われたもので埼玉県では利根川中流域の右岸の行田市周辺以東に多く認められるものである。

愛宕山古墳を含む埼玉古墳群の主体は大形前方後円墳八基、大形円墳一基が集中分布する地域である（第1図参照）。周囲の微地形については、市街化や農地の転換などが進行して観察しにくい部分もあるが、参謀本部測量局が明治一七年に測量し、作成した迅速測図（迅測図）「行田町」で当時の地形状況を知ることができる。これによると埼玉古墳群の周辺は、集落、畑地、山林、灌木地として示される微高地が広がっていることがよくわかる。

第1図で示すと埼玉古墳群のある冨士山地区から白山、万願、秩父鉄道東行田駅から斉条地区にかけて微高地が連続して広がっている。ここでは武蔵水路にかかって長野神明遺跡が調査され和泉、鬼高期の集落が確認されている。(註1)また東行田駅周辺では長野中学校校庭から縄文時代前期（関山式）の多数の土器片や中期（加曽利E）の竪穴住居跡、古墳時代、平安時代の住居跡が検出されている。(註2)斉条地区には水田下に没した古墳や、(註3)とやま古墳（全長六九㍍の前方後円墳）が発掘されている。(註4)埼玉古墳群南側は渡柳、利田に続くものと百塚、下埼玉、杉原地区へ続く微高地がある。下埼玉には若王子古墳群が立地するが、地形的には埼玉古墳群と同じ平坦地である。若王子古墳群東方に小針遺跡があり、古墳時代（鬼高期）及び平安時代の集落が検出されている。ここにはローム層がある。現在は水田化している地域もあるが迅測図では下埼玉から広田地区（川里村）にかけて松林、灌木、畑地が広がっている。したがって埼玉古墳群東方約五キロメートルにわたって広大な平坦地が広がっていたことになる。埼玉古墳群西方地域は奥の山古墳南側に小円墳や前方後円墳らしい大人塚（ウシ）があったとされているが、(註5)迅測図でも確認できる。現在は水田地域であるが、当時は畑で佐間地区へ延びている。一部水田地域があり、現在の忍川と武蔵水路が接近する地域で狭い断続部があった可能性もある。佐間地区には四基の古墳があり、大日塚古墳は箱式石棺の上に二基の粘土槨が並置されている。(註6)佐間地区南側の樋上・下忍地区も微高地であり、鴻池、武良内、高畑遺跡から五領期の方形周溝墓、五領、鬼高期の住居跡、古墳跡が発見されている。(註7)

以上のように埼玉古墳群周辺は連続性の良い微高地があり、古墳や集落の分布地域になっている。若小玉古墳群、小見古墳群も同様の微高地に属する。しかし厚い沖積層下に没した古墳や集落跡も存在し、その後の沖積作用の激しさを示すが、生活面が現在よりもかなり低いこともあらわす。沖積面が低位であれば現在の微高地は相対的に高いことを示すので、当時の地形状況は現在とは大きく異なり、高低差の大きい地形であったと考えられる。

埼玉古墳群西側の低地は、南と北に微高地が続くので三方を囲まれた地形になり、北西→南東の基本傾斜をもち、そのふところが深い。佐間地区の狭

い断続部を認めても湛水地域であり、ここはかつては深度のある沼沢地であった可能性もある。埼玉古墳群北側の旧忍川は、丸墓山、稲荷山古墳の周堀を切断しているので後世の開削と考えられる。埼玉古墳群東側一帯は広大な平坦地で、標高のやや低い小針遺跡で、鬼高期全般にわたる住居跡が狭い範囲から検出され、ローム層も確認されたことを考えると、当時の沖積面との比高差はかなり大きいと考えられる。住居跡の分布密度が濃く、大集落の可能性があろう。埼玉古墳群、若王子古墳の後背集落としての関係が問題とされる。

埼玉古墳群の大形前方後円墳について、その方向が一定していること、主軸方向角、形態、規模に、いくつかのグループがあることが指摘されている。(註8) 分布の特徴は、前方部方向を一定にして、狭い範囲に密集していることである。稲荷山古墳、二子山古墳、鉄砲山古墳の規模上位三古墳が北→南へ直列的に接して並んでいる。稲荷山古墳と二子山古墳との空間地は、両者の年代に近い小円墳群が調査され、分布状況に計画性のあることが報告されている。(註9) 八〇～五〇㍍級の前方後円墳は大形古墳直列分布の南端西側に北→南方向に並んでいる。これらの分布の外側に接するように丸墓山古墳、将軍山古墳がある。将軍山古墳は最近の調査で二重の盾形周堀をもつ可能性がでてきたが、出土品、墳丘ともに新しい一群である。丸墓山古墳の占地は、地形的には低地寄りで地盤は良くない。これら二古墳は円墳であること、方向角が他の古墳と大きく異るが、他に空間地をもちながら密集しているのは、高度な計画性に基づくものであろう。このような配置の意味は明らかではないが、主軸方向角が北東―南西にそろっているのは、その側面観を重視することになろう。地形特徴は北西方向は視界の開けた沼沢地、南東方向は台地状の広大な平地であり、大集落跡の可能性が考えられる地である。対外的な要素と分布、造出しの位置等を考えれば北西方向が重視される。

（小久保　徹）

註1　塩野博　「行田市長野神明遺跡」　『考古学雑誌　第五五巻四号』　昭和四四年
註2　「長野中学校校内遺跡」　行田市文化財調査報告第一一集　行田市教育委員会　昭和五五年
註3　『斉条五号墳発掘調査報告』　行田市文化財調査報告第一集　行田市教育委員会　昭和三九年
註4　柳田敏司、他　『とやま古墳』　昭和四二年
註5　柴田常恵、他　『埼玉村古墳群調査表』　昭和一〇年
註6　『大日種子板石塔婆および古墳の調査』　行田市文化財調査報告書第四集　行田市教育委員会　昭和五三年
註7　栗原文蔵、他　『鴻池・武良内・高畑』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第一一集　昭和五二年
註8　①『埼玉稲荷山古墳』　埼玉県教育委員会　昭和五五年
　　②増田逸朗　「辛亥銘鉄剣出土古墳の概要と埼玉古墳群」　『考古学ジャーナル一〇一号』　昭和五七年
註9　「天王山・梅塚古墳他周堀調査概要」　『資料館報No.6』　県立さきたま資料館　昭和五〇年

1 埼玉古墳群	11 若王子古墳	21 毘沙門山古墳	31 長野神明遺跡
2 若王子古墳群	12 八幡山古墳	22 真名板高山古墳	32 長野中学校々庭遺跡
3 若小玉古墳群	13 愛宕山塚古墳	23 小針鎧塚古墳	33 星宮皿尾遺跡
4 小見古墳群	14 荒神山塚古墳	24 大日塚古墳	34 池守中里地区遺跡
5 斉条古墳群	15 地蔵塚古墳	25 袋・台遺跡、古墳	
6 酒巻古墳群	16 小見真観寺古墳	26 小針遺跡	
7 新郷古墳群	17 虚空蔵山古墳	27 陣場遺跡	
8 羽生古墳群	18 とやま古墳	28 鴻池遺跡	
9 佐間古墳群	19 酒巻1号墳	29 武良内遺跡	
10 愛宕山古墳	20 大稲荷1号墳	30 高畑遺跡	

第1図　愛宕山古墳及びその周辺の遺跡

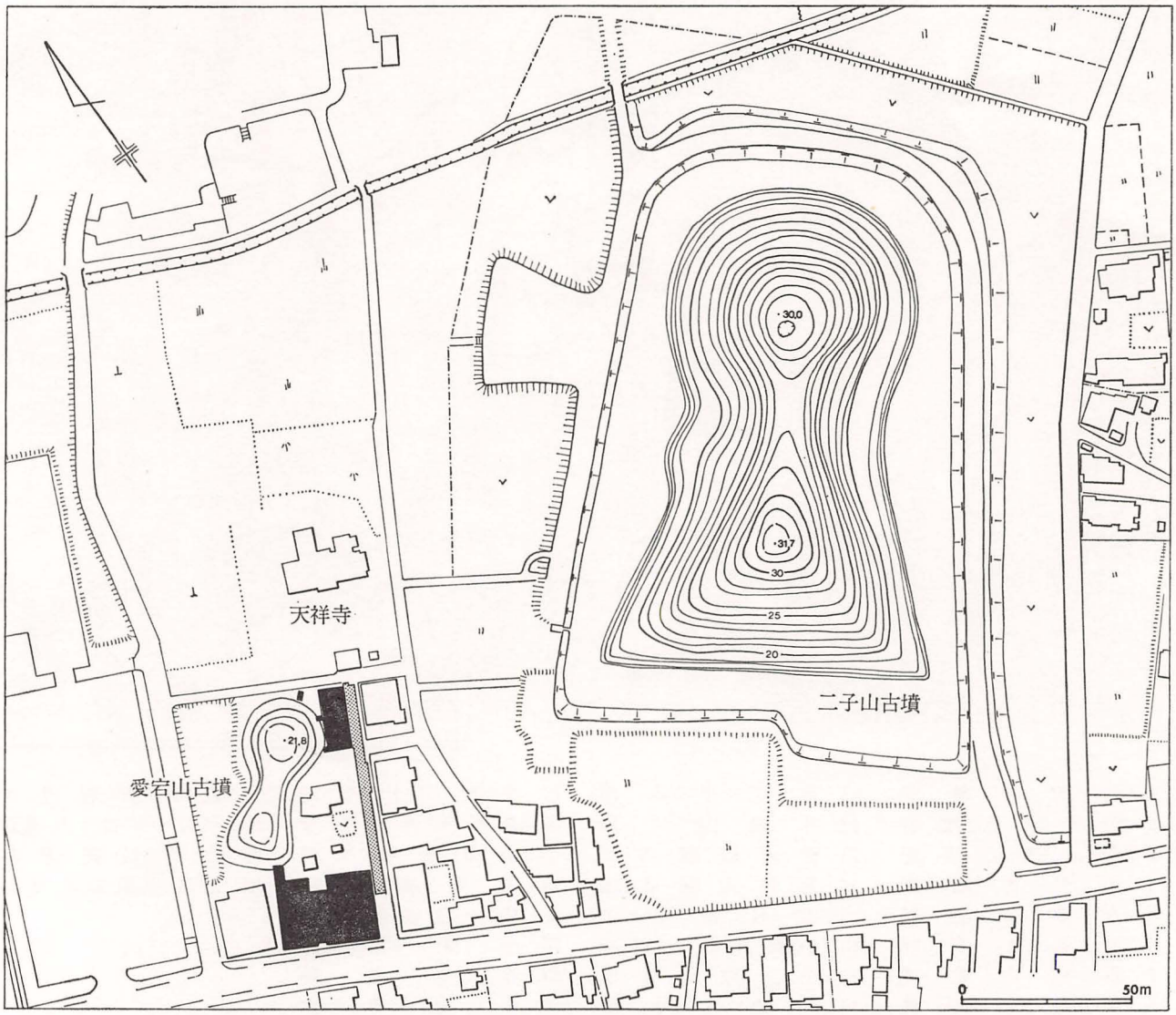
Ⅳ 調査の成果

一 遺構

愛宕山古墳の周堀範囲確認調査は前方部、後円部の二地区について実施した（第2、3図）。

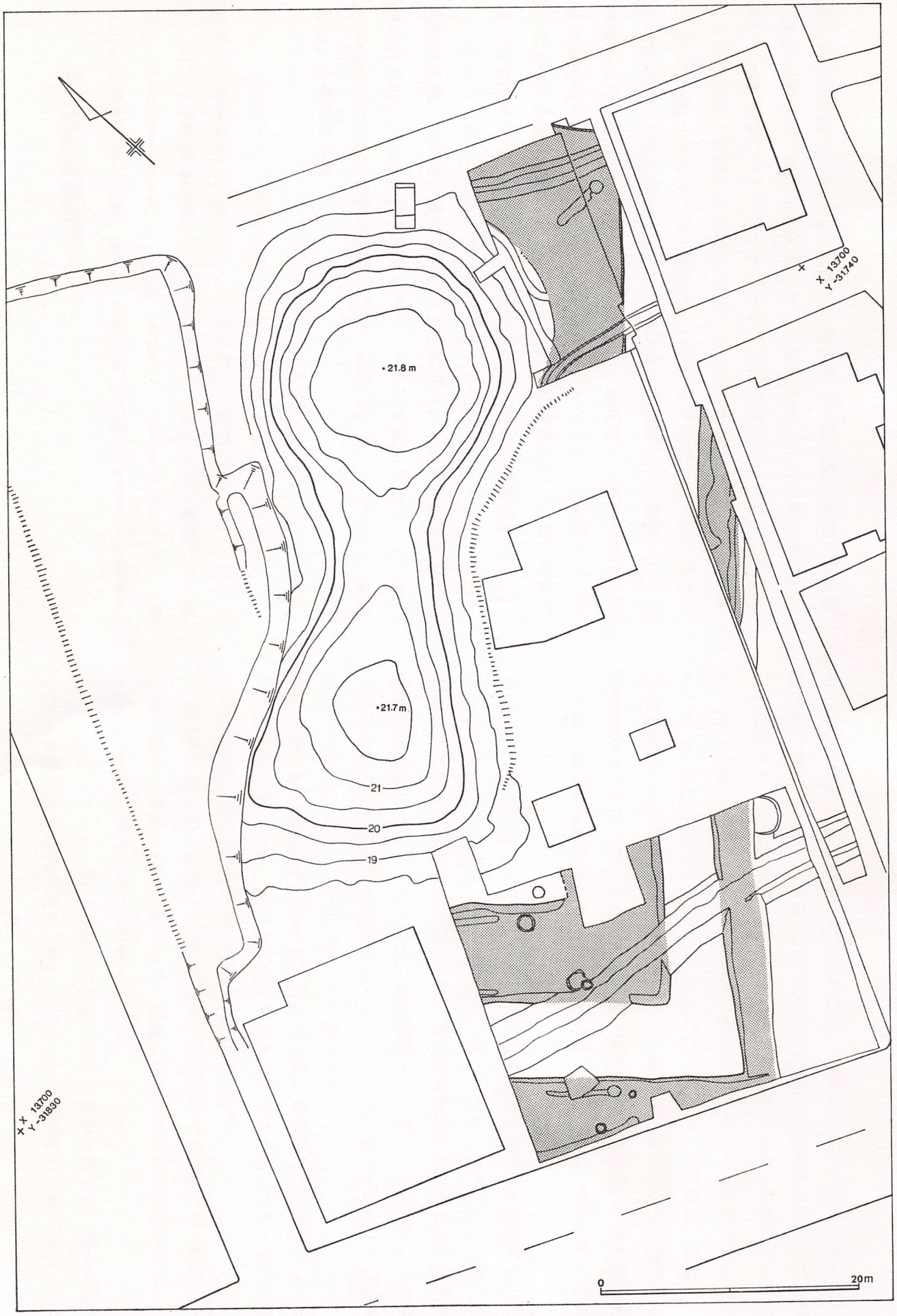
前方部調査区は周堀のコーナー部が想定される前方部南側、約五六〇平方メートル、後円部調査区は後円部の墳丘裾東側約一四〇平方メートルを対象とした。両調査区とも県有地で、かつては宅地であったが現在は整地されている。標高は一八㍍前後である。

前方部調査区では内堀、中堤、外堀を検出し、愛宕山古墳が二重の周堀をもつことが明らかになった。後円部調査区では内堀を検出した。また、昭和五六年一〇月、行田市遺跡調査会により両調査区の東側に隣接する道路敷地が改修工事に先立ち発掘調査され、内堀、中堤、外堀が検出されている（第2、3図）。この調査では後円部東側で、内堀の北辺の一部が検出され、愛宕山古墳の周堀の平面形が稲荷山古墳と同様に長方形であることが判明したほか、前方部調査区の結果とあわせて、内堀の全長がほぼ確定できるなど重要な成果が得られている。



■：埼玉県教育委員会調査区　▒：行田市遺跡調査会調査区

第2図　愛宕山古墳及び発掘調査区の位置（1/2,000）



第３図　愛宕山古墳測量図及び各調査区の位置（1/400）

(一) 前方部南側調査区

前方部南側調査区では内堀、中提、外堀のほかに溝五（SD001S005）井戸跡四（SE001～004）、土壙四（SH001～004）を検出した（第4図）、これらの遺構は重複するものを除き、ローム層上面で確認した。調査区西端での層序は客土、表土以下、暗茶褐色土、茶褐色土、ローム層となっている。地表からローム層上面までの深さは六五～七〇センチである。

内堀、中堤及び外堀

内堀は前方部前面の堀底幅が約六・二㍍、検出面で幅七・五～七・九㍍、東側側面は内側の立上がり部を攪乱されているため不明であるが、コーナー部での推定幅約七・五㍍。深さは五〇～七〇センチで、コーナー部から東辺にかけて、ゆるやかに深くなる。前方部前面部分の内側ラインは、わずかにカーブする部分があるが、外側ライン、東側側面部分はほぼ直線的である。

覆土は調査区西壁の土層断面（第5図）では第四層黒褐色土、第五層黒色土、第七層褐色土、第八層黄褐色土に分層され、さらにコーナー部ちかくの深まる部分では、堀底から二～三センチ上がって、層厚約一・五～二センチの灰白色粘土層が約二センチの間層（第五層）をはさんで二層水平に堆積していた。

この白色粘土層から採取した土層試料（C地点No.6試料、第4図）の珪藻分析では好湿地棲の珪藻が多く検出され、「この試料は池沼～湿地の環境下での堆積物と考えられる」と報告されている（58頁参照）。また、白色粘土層の上層の黒色土（C地点No.5試料）および黒褐色土（C地点No.4試料）、調査区西壁の第四層（B地点No.5試料）、第五層（B地点No.4試料）の珪藻分析もほぼ同様の結果が出ている。したがって珪藻分析の結果からは、内堀――とりわけコーナー部から東辺にかけてのやや深まる部分は、帯水状態となっていた時期があったことが考えられる。

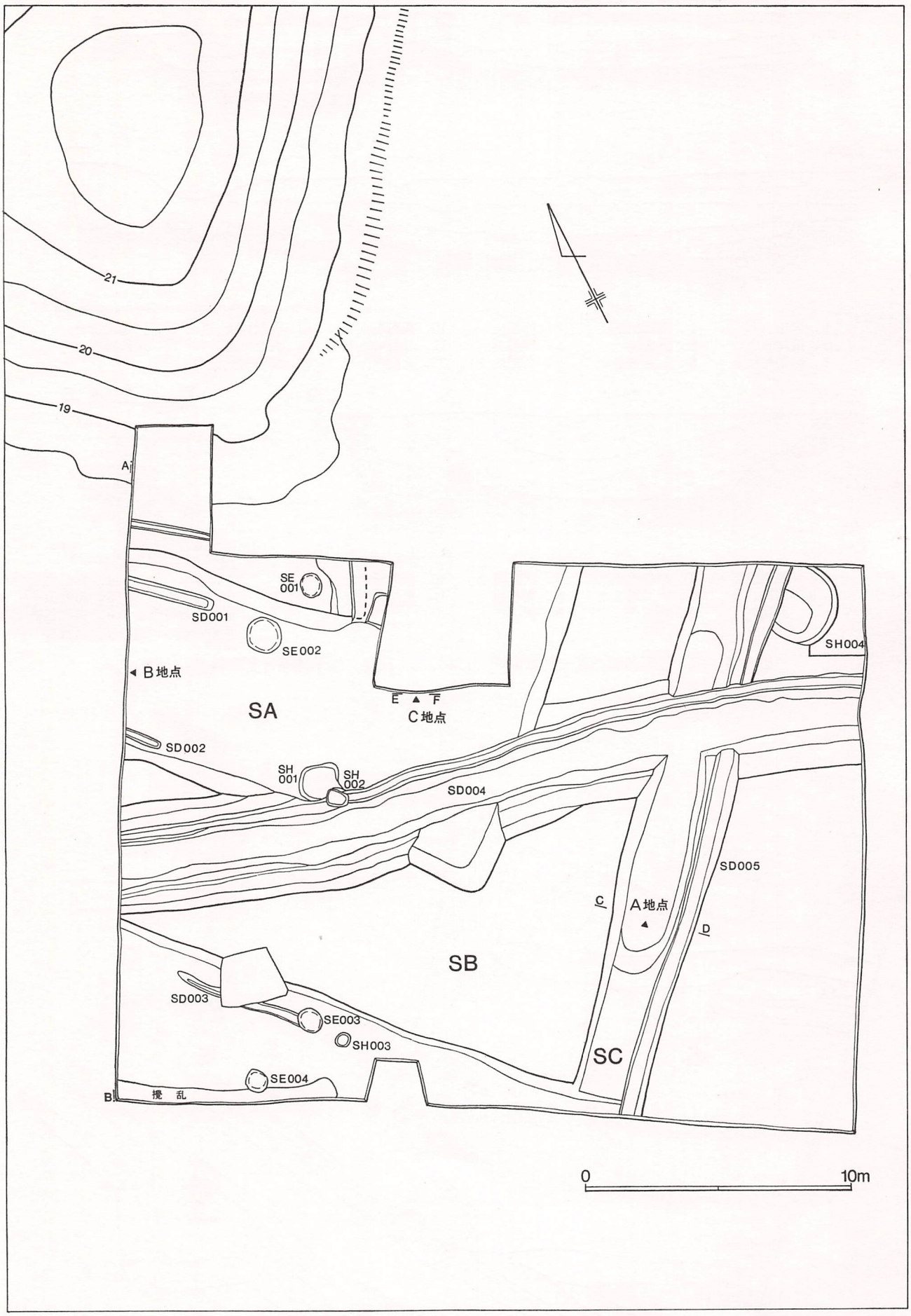
第四層中には浅間TBが認められ、内堀の最終埋没時期が推測できる。

南辺の西側で内、外側立上がり部ちかくに検出された二本の溝（SD001、002）の覆土は内堀と同じ第七層で、明らかに堀に伴う。

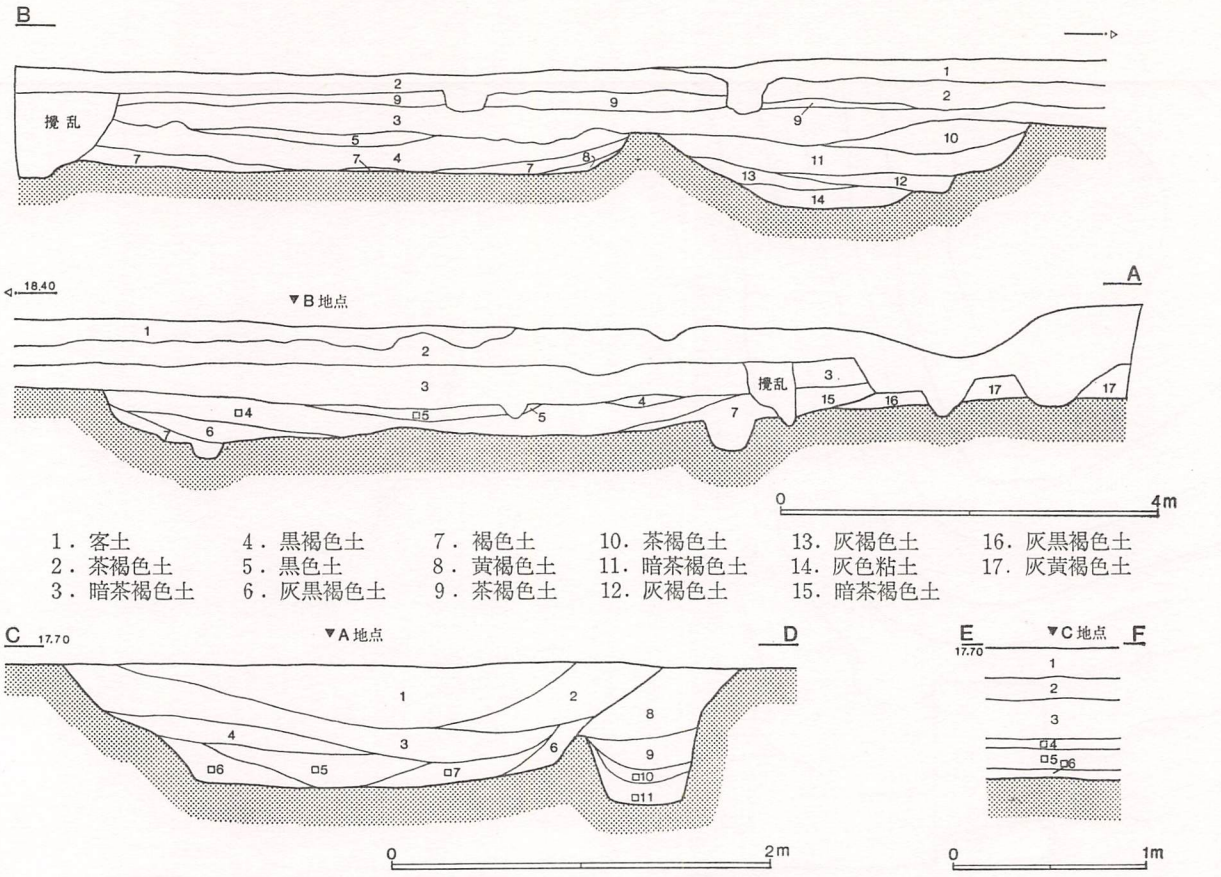
埴輪は第五層に多く、第三層下部および第四層からも出土した。覆土下層での埴輪の平面分布状況（第6図）はプラン内ほぼ全域にわたるが、コーナー部から東辺にかけて、中提よりにやや密集している。

中提の幅は前方部前面の基部で六・五～六・七㍍、検出面で六・七㍍、東側側面の基部で五・一～六・二㍍、検出面四・〇～四・八㍍である。この面に盛土された痕跡は認められなかった。検出面は平坦である。内堀の東側部分での埴輪の出土状況は、本来、中提上に樹立されていたものが、内堀へ落ち込んだことを物語っているが、中提上に埴輪の原位置を示す痕跡は認められなかった。

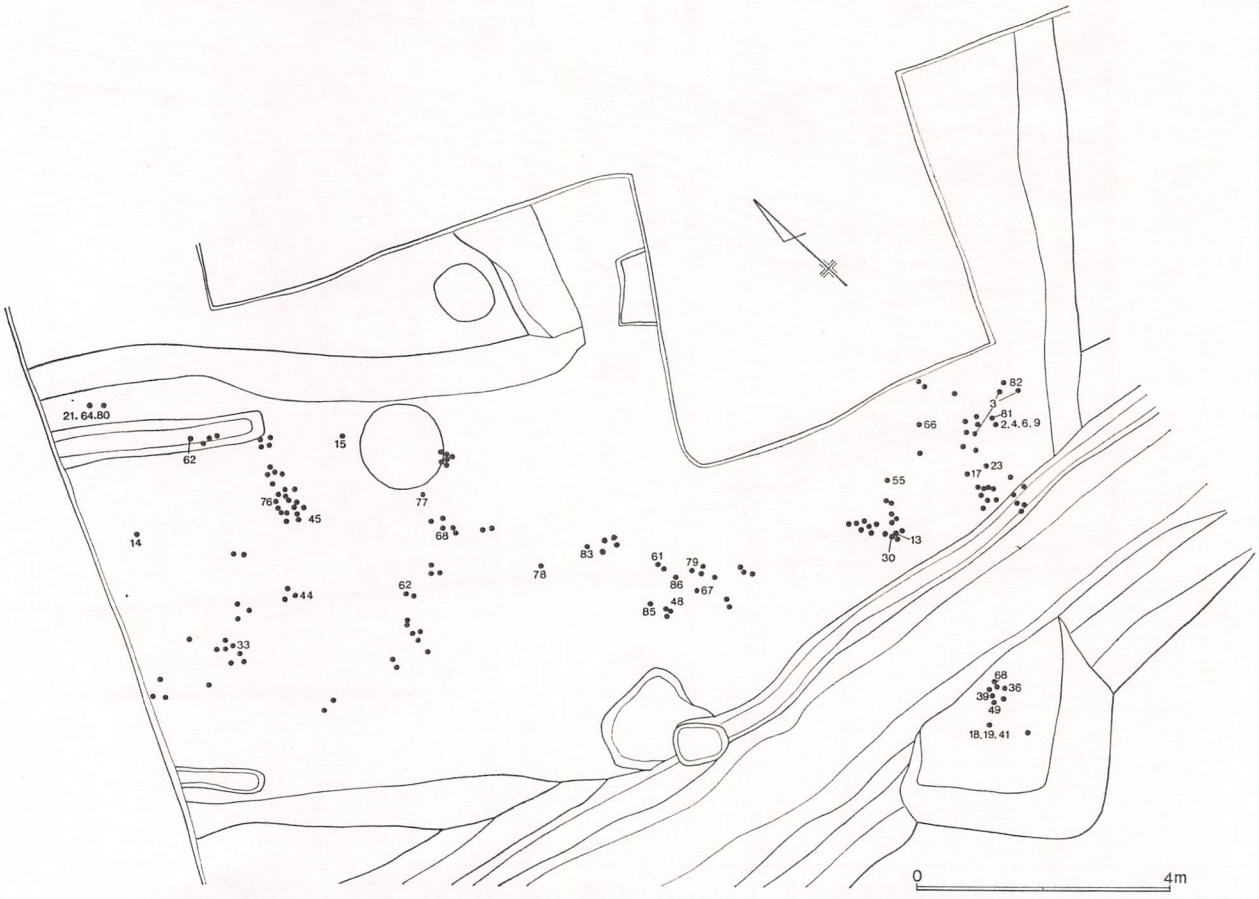
外堀は南辺の外側立上がり部が調査区内で検出されず、また、東辺は溝（SD004）に切られ、外側ラインは溝（SD005）と重複し、その覆土中にあるため、その幅を確定できなかったが、南辺は東辺に倍する幅をもつようである。南辺は幅五・六㍍以上、東辺は二・三～三・二㍍前後。南側コーナー部で南辺と東辺のなす角度は83°で、内堀外側コーナーと外堀内側コーナーを結ぶラインは方位にそろう。南辺は内堀に平行するが、東辺はわずかに墳丘側に振れている。この傾向は行田市遺跡調査会調査区の成果と合わせると一層明らかで外堀は墳丘くびれ部に向い、弓なりにカーブする（第3図）



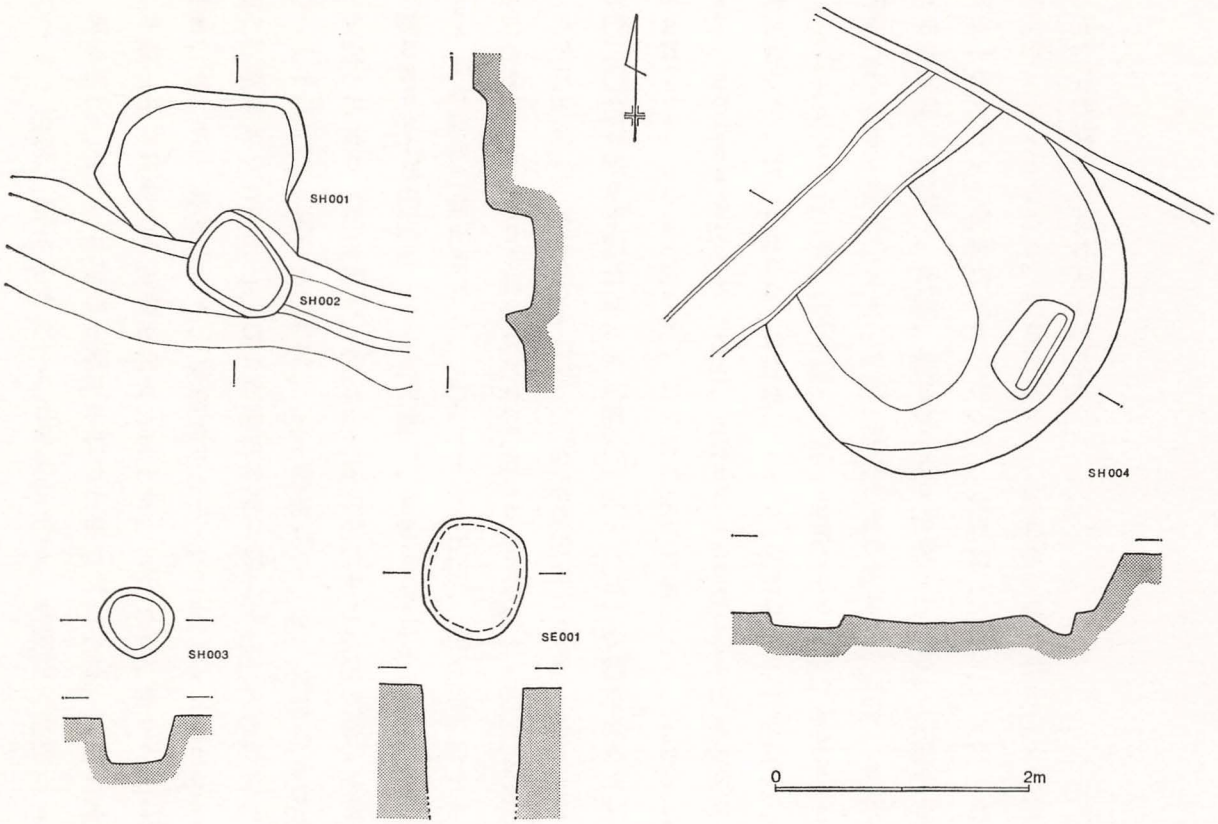
第４図　前方部南側調査区全測図（1/200、Ａ～Ｃ地点は花粉、胞子、珪藻分析試料採取地点）



第５図　前方部南側調査区土層断面図（1/40、□：花粉、胞子珪藻分析試料採取土層）



第６図　前方部南側調査区　内堀内遺物出土位置図（1/120、数字は実測図の番号）



第７図　前方部南側調査区　土壙（ＳＨ）及び井戸（ＳＥ）実測図（1/60）

堀の深さは南辺で六〇～七〇センチ、東辺では四五～七〇センチ。堀底は南辺ではほぼ平坦であるが、東辺では調査区中央が深く、その両側では浅くなり、コーナー部では南辺の底とに一〇～一五センチの段差が生じている。

覆土は南辺の西壁土層断面（第５図）では内堀と同様の埋没状態が観察されたが、東辺では第一層黒褐色土、第二層暗褐色土、第三層灰褐色土、第四層暗褐色土、第五層灰黒褐色土、第六層褐色土、第七層灰褐色土に分層された。東辺第三層は内堀第六層に、東辺第一、二層は内堀第四、五層に対比されよう。

南辺の北壁よりに検出された溝（ＳＤ００３）は内堀の溝（ＳＤ００１、００２）と同じく、外堀に伴うものである。

埴輪は内堀にくらべ少ない。

その他の遺構

溝（ＳＤ００１～００５）、井戸跡（ＳＥ００１～００４）、土壙（ＳＨ００１～００４）を検出した（第４、７図）。

ＳＤ００１、００２は内堀の南辺に検出した。調査区西壁の土層断面（第５図）の観察から内堀に伴う溝であることを確認した。外堀の南辺に検出したＳＤ００３もＳＤ００１～００２と同一の覆土（褐色土）で外堀に伴う。いずれも堀の立上がり部にちかい堀底にあり、堀のラインに平行している。ＳＤ００１は幅五〇～六〇センチ堀底からの深さ二四センチ、ＳＤ００２は幅三八センチ、深さ一二センチ。ＳＤ００３はわずかにカーブする部分があり、東端は井戸跡ＳＥ００３に切られている。幅二六～三八センチ、深さ八センチ。ＳＤ００４は調査区中央に東西方向に走り、内堀、中堤、外堀を切り、土壙ＳＨ００２に切られている。走向はＥ－14°－Ｓ、わずかに蛇行する。西端で幅四・二㍍、底幅は

〇・八～一・五㍍、深さは七六～八五㌢である。北側壁に幅四五～五六㌢、深さ約六〇～七〇㌢の小溝が平行して掘られている。周堀を壊しているため覆土中には多量の埴輪が混入していた。とりわけ内堀コーナー部付近は顕著であった。埴輪のほか、陶磁器片が出土している。ＳＤ００５は外堀東辺の東側ラインと平行し、ほぼ直線的にＮ―42°―Ｅ方向にのびている。幅七〇～一一〇㌢、深さ七〇㌢。出土遺物はないが、外堀はＳＤ００５の覆土を切っており（第５図）、愛宕山古墳に先行する時期の溝である。

井戸跡ＳＥ００１は内堀コーナー部内側に、ＳＥ００２はその西側、ＳＥ００３、００４は外堀南に検出された。四例とも平面円形、断面円筒形を示す素掘り井戸である。ＳＥ００１は径九八㌢、ＳＥ００２は径一・四㍍、ＳＥ００３は径九八×八四㌢、ＳＥ００４は径八〇㌢の規模である。ＳＥ００２は堀底から約二〇㌢掘り下げたレベル（標高一六・八㍍）で湧水をみた。

土壙ＳＨ００１、００２（第７図）は内堀の南辺に検出した。ＳＨ００２はＳＨ００１、ＳＤ００４を切っているが、ＳＨ００１とＳＤ００４の前後関係は明らかにできなかった。ＳＨ００１は長軸一・七㍍、内堀底からの深さ一〇㌢、ＳＨ００２は八五×六七㌢、深さ四六㌢。ＳＨ００３は井戸跡ＳＥ００３の南に位置している。径六〇×五〇㌢、堀底からの深さ三六㌢。ＳＨ００４は調査区の東隅に位置し、外堀、溝ＳＤ００５を切っている。重複する西側約三分の一のプランは明確にできなかった。全形は（三・二）×二・九㍍前後の楕円形プランとなろう。深さ五六㌢。壙底の東側には八四×四二㌢、深さ六五㌢の梯形の落ち込みがある。

(二) 後円部東側調査区

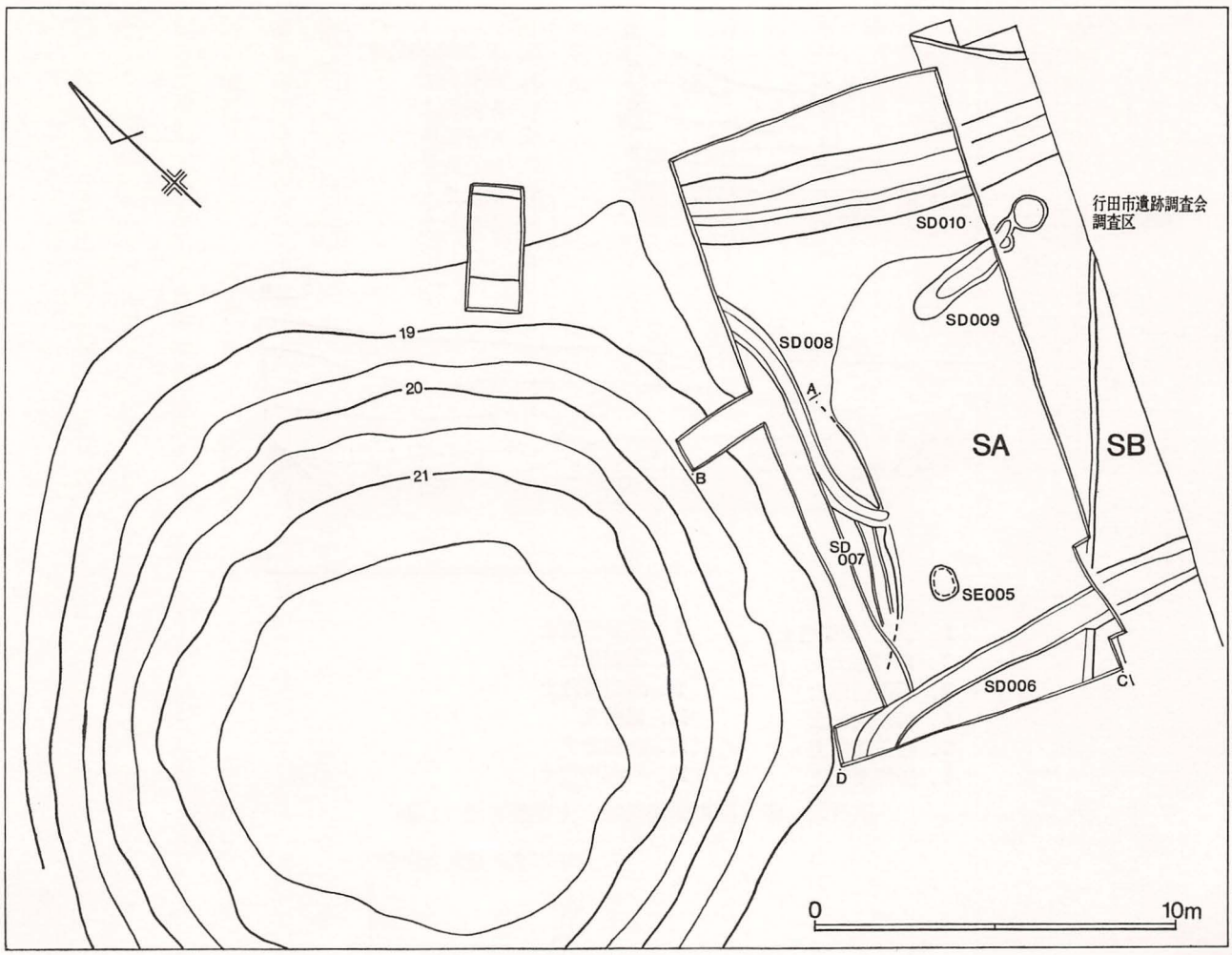
後円部調査区は後円部墳丘裾東側に内堀の範囲を明らかにするために設定した。調査の結果、内堀の外側ラインを調査区の南隅に検出することができた（第８図）。したがって、後円部東側調査区は墳丘端から内堀範囲内にあたる。ほかに溝（ＳＤ００６～０１０）、井戸跡（ＳＥ００５）を検出した。

内堀

調査区の南隅に検出した内堀の外側ラインはわずか一・三㍍であるが、行田市遺跡調査会による東側に隣接する道路敷地の発掘調査により、この延長部分が検出されている。この調査ではさらに内堀の北辺が東辺と直交する位置に検出され、愛宕山古墳の周堀の平面形が稲荷山古墳と同様に長方形を示すことが明らかとなった。前方部調査区の成果と合わせると内堀の南北長は約六七・五㍍に復原できる。

内堀の墳丘側立上がり部は溝（ＳＤ００７、００８）と重複し、また、堀が墳丘側および調査区北側に向い浅くなるため、調査区の中央で約六・五㍍にわたり検出したにとどまった。このため、墳丘北側に三・五×一・五㍍のトレンチを設定して内側立上がり部分を調査したが、溝ＳＤ０１０の延長部分を検出しただけで、墳丘端部を確認することはできなかった。

堀の深さは外側で三六㌢、内側で一〇㌢である。幅は最短部で約五・五㍍。覆土は第八層黒褐色土、第九層暗黒褐色土、第一〇層褐色土が主体となっている（第９図）。調査区中央の墳丘サブトレンチでは第七層黒褐色土が旧表土と考えられる。



第８図　後円部東側調査区全測図

埴輪は調査区東側の中堤よりに多量に出土した（第10図、図版八）。形象埴輪がわずかにあるが円筒埴輪が圧倒的に多く、前方部調査区の東辺と同様に中堤から落ち込んだ状態で出土している。

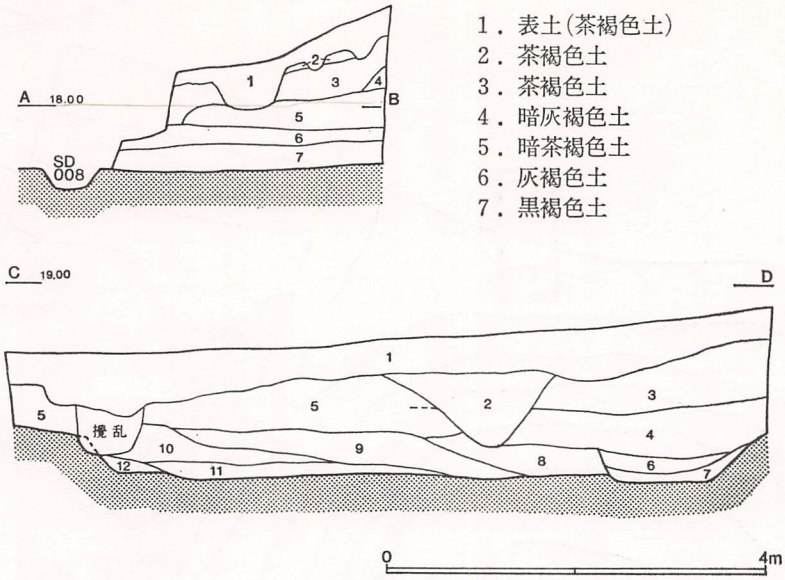
その他の遺構

溝（ＳＤ００６～０１０）、井戸跡（ＳＥ００５）を検出した（第８図）。ＳＤ００８を除き、愛宕山古墳築造以降の時期である。

ＳＤ００６は調査区南側を東西に走り、西側では墳丘をよけるようにくびれ部方向にカーブしている。幅一〇八㌢、ローム層上面からの深さ六〇㌢、西から東に向いわずかに深くなる。ＳＤ００７は内堀の内側立上がり部に検出した。北側をＳＤ００８に切られている。幅五〇㌢、深さ一〇㌢、走向Ｎ―35°―Ｅ。ＳＤ００８は墳丘の裾に沿い、南側では逆にカーブし、内堀と重複している。前方部調査区のＳＤ００１～００３と同様に堀に伴うものか明確にできなかった。幅六七㌢、深さ二〇㌢。ＳＤ００９は調査区東側に検出した。幅九〇㌢、深さ二八㌢、走向Ｅ―8°―Ｓ。行田市遺跡調査会の調査区で土壙状の落ち込みと重なる。ＳＤ０１０は調査区の北側に東西方向にのびる。幅二㍍、深さ一・一㍍、南壁に段にもち、断面は略逆台形を示す。

井戸跡ＳＥ００５は調査区の南側に検出した。前方部調査区の井戸跡と同形態である。径八六×六八㌢、堀底から約六〇㌢掘り下げ、一㍍ボーリングしたが底にあたらなかった。

（中　島　宏）



1．表土(茶褐色土)
2．茶褐色土
3．茶褐色土
4．暗灰褐色土
5．暗茶褐色土
6．灰褐色土
7．黒褐色土

1．表土(茶褐色土)
2．茶褐色土
3．暗茶褐色土
4．暗茶褐色土
5．暗茶褐色土
6．灰黒褐色土
7．暗黄褐色土
8．黒褐色土
9．暗黒褐色土
10．褐色土
11．灰褐色土
12．暗灰褐色土

第９図　後円部東側調査区　土層断面図（1/80）

第10図　後円部東側調査区　内堀内遺物出土位置図(1/80、数字は実測図の番号)

二　遺　物

(一)　埴　輪

前方部南側、後円部東側両調査区で出土した遺物のうち、主体となるのは埴輪片であり、その中でも円筒埴輪が大部分である。

前方部調査区では内堀内の東南部コーナー付近からの出土が、やや多く、これは中堤上に樹立されていたものが破損、転落したものと判断される状況であったが、中堤上にはその痕跡は残されていなかった。また、内堀内の他の部分でも比較的大型の破片が出土し、墳丘上から落ち込んで埋没したと思われるものもあった。一方、後円部東側調査区は、大部分が内堀内にあたるものであったが、中堤寄りの部分での出土が目立った。これは、隣接して実施された行田市遺跡調査会の市道域の発掘調査区内での遺構のありかたや遺物の出土状況から、中堤に樹立されたものが破損、転落したものであることが明らかであったが、墳丘寄りでは、墳丘上からの転落と思われるものも散見された。

このように、両調査区を通じ、原位置を留める埴輪は無かった。個々の詳細については観察表に記したとおりである。なお、円筒埴輪については実測図及び図版の番号は1～88が前方部調査区出土、89～186は後円部調査区内堀内の出土である。また、実測図の断面の、口縁部内外の細線及び、タガの上下の細線は、その範囲が仕上げたヨコナデを施された範囲を示すものである。こうしたヨコナデによる仕上げについては強弱はあるものの各円筒埴輪に共通する技法であるので、観察表では端部内外面及びタガのヨコナデによる仕上げの記述は一切省略してある。

形象埴輪については、器種の判明するもので主要なものを図示したが、写真図版にのみ示したものもある。多くは後円部調査区の出土である。

円筒埴輪

出土した円筒埴輪は、技法的な面では、外面がタテハケメを施した後、粘土紐を貼付け、ヨコナデし（実測図各断面、細線の範囲）タガとしている。ハケメは、深浅の差はあるものの、ヨコハケメ等の認められるものは見当らず、全てタテハケメのみである。一方内面はヨコハケメ、またはナナメハケメを残すものが多いが、基部から中位にかけ、タテないしナナメにナデるものもあり、各所にユビオサエ痕を残すものもある。

口縁部はいずれも端面を形成し、内外面をヨコナデして仕上げている（実測図断面、細線の範囲）。焼成については、確認できる限りでは黒斑の認められるものはなく、還元色を呈するものもあり、全て登り窯による焼成として誤りはない。

前方部南側調査区では、全体の形態がほぼ判明するものが七個体あった（1～7）。器高はいずれも約四〇㌢で、タガの間隔のバランスも近似しており、スカシも二段目及び三段目に一対ずつ互いに直角位置（7はややズレがあるが）になるように穿孔されている。形態はいずれも円形か、不整円形で雑な穿孔のしかたをしている。（下から）二段目に穿孔されるものは、その段の間隔のためであろうが、三段目のものより径が小さい傾向にある。断面の形態は5が開き方が大きいが、他はいずれも体部中位がわずかに内湾気味で、口縁部に至っては、外反して開く形態をとる。タガについては7がくずれた台形を呈する他は、偏平でくずれた「M」字形を呈しており、概し

て粗雑な作りである。内面はナナメハケメを主体として仕上げているが、1、4はユビオサエ痕が顕著に残され、7は最下段部分はタテのナデによっている。底面にはいずれも禾本科植物の茎と思われる棒状の圧痕が残される。色調については部分的に還元色を呈するもの（1、4）と、明黄灰色や灰茶褐色を呈するもの（2、3、7）がある。以上の七点については、高さ、口径、底径等の大きさ、タガの数やスカシの位置等についての近似を指摘できる。主要な円筒埴輪について、計測値の一覧表を作成したが、1～7は高さが三八～四二㌢、口縁径は二六～二八㌢底径は一六～二〇㌢と大きさについては四㌢の範囲内にある。各段については、最下段が一〇～一二㌢、第二段が五・五～七㌢、第三段六・五～八㌢、口縁部段七～九㌢、と二㌢の範囲内にあり、タガについては基部幅が二～二・五㌢であった。このように1～7は一見して大きさ、各段の幅等、近似するものであることがわかるが、各部の計測値からもそれが了解されるところである。これら規格性のある一群の円筒埴輪を「A類」の円筒埴輪と呼び説明を進めるが、さらにタガの断面の形状から、断面が偏平な「M」字形で、粗雑なヨコナデで仕上げのもの（1～6）を「A_1類」、くずれた台形を呈するが比較的きちんとした強目のヨコナデをして仕上げるもの（7）を「A_2類」としておく。

8～10は、口縁部または底部付近の形態がある程度明らかになったもので、10は最下段の幅が広目であるが、いずれも、先に述べたA類と思われるものである。8はA_1類、9はA_2類で、それぞれ内面にユビオサエ痕が顕著に残る部分があり、10はA_2類でナナメの幅の広いナデにより仕上げている。

11は体部中位以上しか形態が判明しないが、口縁径が三四㌢でA類より一回り大きなもので外面最上段に窯印（「×」）が認められる。一方、後円部東側調査区出土の89は高さが六三㌢、口縁径約三六㌢で、最下段の幅が二三㌢と、他の段に比べ広い特徴を有するものである。口縁部の屈曲のしかたや寸法的に二㌢程度の差があるが、11に類する形態と思われる。12、14も三段目の中位以上を欠いているが、最下段の幅からして、同様に、89に類似する形態と思われる。これらを総括し、「B類」と呼ぶことにするが、全体の器形の判明している89、一個体を基本としたもので、「A類より大型で最下段の幅が広く、タガの形状がくずれた台形を主体としている」と類推されるものを含む一群であることを付言しておく。

15以下44は口縁部破片だが、15はB類、それ以外の16、18～24等はA類である。何れも外面は、左傾するものを含むが、タテハケメ、内面はヨコないしナナメのハケメを施しユビオサエ痕を残すものもある。口縁部は開き方に種々のバリエーションを持ち、スカシの認められるものは、何れも円形を基本とするものである。

45～75は体部破片である。外面はタテハケメ、内面はヨコハケメまたはナナメのナデが施されるが、51、65、67のようにユビオサエ痕を顕著に残すものもある。45はB類、46、47、49等はA類である。スカシの認められるものはいずれも円形と思われるものである。

76～88は、底部破片である。外面はタテハケメ、内面はナナメハケメのものが多いが、ナナメナデのもの（76）もある。76、78、83はA類である。底面には禾本科植物の茎の棒状の圧痕を残すものが大半である。

次に、後円部東側調査区出土のものであるが、前方部南側調査区に比べ、全体の形態がほぼ判明するものは89のみであった。

89についてはB類としてすでに触れたところであるが、最下段が他の段に

比べ広目である。外面はタテハケメ、内面はヨコハケメないしナナメハケメが施されるが、部分的にナデが認められ、また、底面には棒状の圧痕が残される。スカシは不整円形で、二段目及び三段目に一対ずつ互いに直角位置に穿孔されており、この点はA類と同様である。タガはくずれをみせる台形である。

90は二段目中位以上の形態の判明するもので、B類である。スカシは89と同様な部分に穿孔される。

91～111は口縁部破片である。いずれも外面はタテハケメ、内面はナナメないしヨコハケメが認められ、端部には面が形成され、内外をヨコナデして仕上げている。91～95はB類、96はA類である。その他については、前方部調査区でA類としたものとは胎土、色調を異にするものが大半で、多くはB類と考えられるものである。

112は朝顔形円筒埴輪の口縁部破片で、外面はタテ、内面はヨコハケメが認められる。器厚が大きく、B類を上回る大形品であろう。

113～165は体部破片である。外面はタテハケメが施され、例外はなく、内面はナナメハケメ、ないしナナメのナデが施される。113～115はB類であるが、その他、口縁部直下の126もB類で、その他、段の幅から、122、127もB類と推測され、B類の円筒埴輪が比較的多数を占めていることを体部破片からも指摘しうる。もち論、B類の主なタガの形状であるくずれた台形を呈するものが多く、スカシについては円形と推定されるものばかりである。

さて、こうした円筒埴輪の中で、やや厚手で、A、B類に比較すると幅も広目で、高さも高く、しっかりとした台形のタガを有する破片があった。116、156、159がそれであるが、これらはいずれも色調が明るい灰褐色ないし灰白色に近い色調で、A類、B類とは胎土、焼成も異にするものである。さらに、116にはスカシが認められるが、その遺存部分からすると、長方形と判断して良いものである。大きさは、B類より大型になることは体部の弧の描き具合などからほぼ誤りのないところであり多段凸帯の大型品と思われるものであるが、そのタガの本数や段数については推定の手掛りがない。こうした一群はA、B類と一見して区別が可能であり、「C類」と呼称することにする。

磨滅して不明瞭なものもあるが破片の観察からは、技法的には外面がタテハケメであり、内面はヨコハケメないしナデと、基本的にA、B類と同様と思われる。

166～186は底部破片である。外面はタテハケメ、内面はナナメハケメ、又はタテ方向、ナナメ方向の幅の広いナデが施されているが、181のようにタテハケメの下に荒いヨコハケメが認められるものもあった。最下部は肥厚するものが多く、180、186のように内側が突出するものもある。底面には、禾本科植物の茎の棒状の圧痕を残すものがほとんどである。

形象埴輪

形象埴輪はいずれも破片であったが種類の判明するものもいくつかあった。187～189は大刀形埴輪の一部である。いずれも勾金の部分であるが、187はや大型のものと思われ、三輪玉が二つ接合したが、脱落痕が他に四箇所認められる。188、189は勾金の上端部分であるが、188に瘤状に付けられたものは三輪玉と思われるが、かなり退化した表現である。図示した以外にも大刀形埴輪の柄頭部分の破片もあったが、全て後円部東側調査区の出土である。

190、191は蓋形埴輪の破片で、頂上部の飾りの一部分と思われる。190はその蓋との接合部分、191は先端部の破片と思われるが、図示した以外にも破片が

十片ほどある。全て後円部東側調査区の出土である。

192は人物埴輪の佩用する大刀の柄頭かとも思われるもので、胎土は187と同様である。

この他、図示し得なかったが、盾形と思われる埴輪の破片が前方部南側、後円部東側両調査区で、家形、馬形と思われるのが前方部南側調査区で発見されているが、形象埴輪については、概して前方部南側より後円部東側調査区の方がはるかに出土点数が多い。この他、弾琴人物埴輪の琴と思われる破片もあり、また、後円部東側調査区の隣接する地区の行田市遺跡調査会の調査の際に、人物埴輪の頭部も出土している（図版二三）。

以上、埴輪について述べてきたが、前方部南側調査区と後円部東側調査区ではやや様相が異なることが指摘できる。すなわち、円筒埴輪では前方部調査区出土のものは、A類が主体となっており、後円部調査区ではB類が主体となっていることである。さらに、形象埴輪に関しては、前方部調査区でも散見するが、その多くが後円部調査区の出土であった。

(二) 土師器及び須恵器

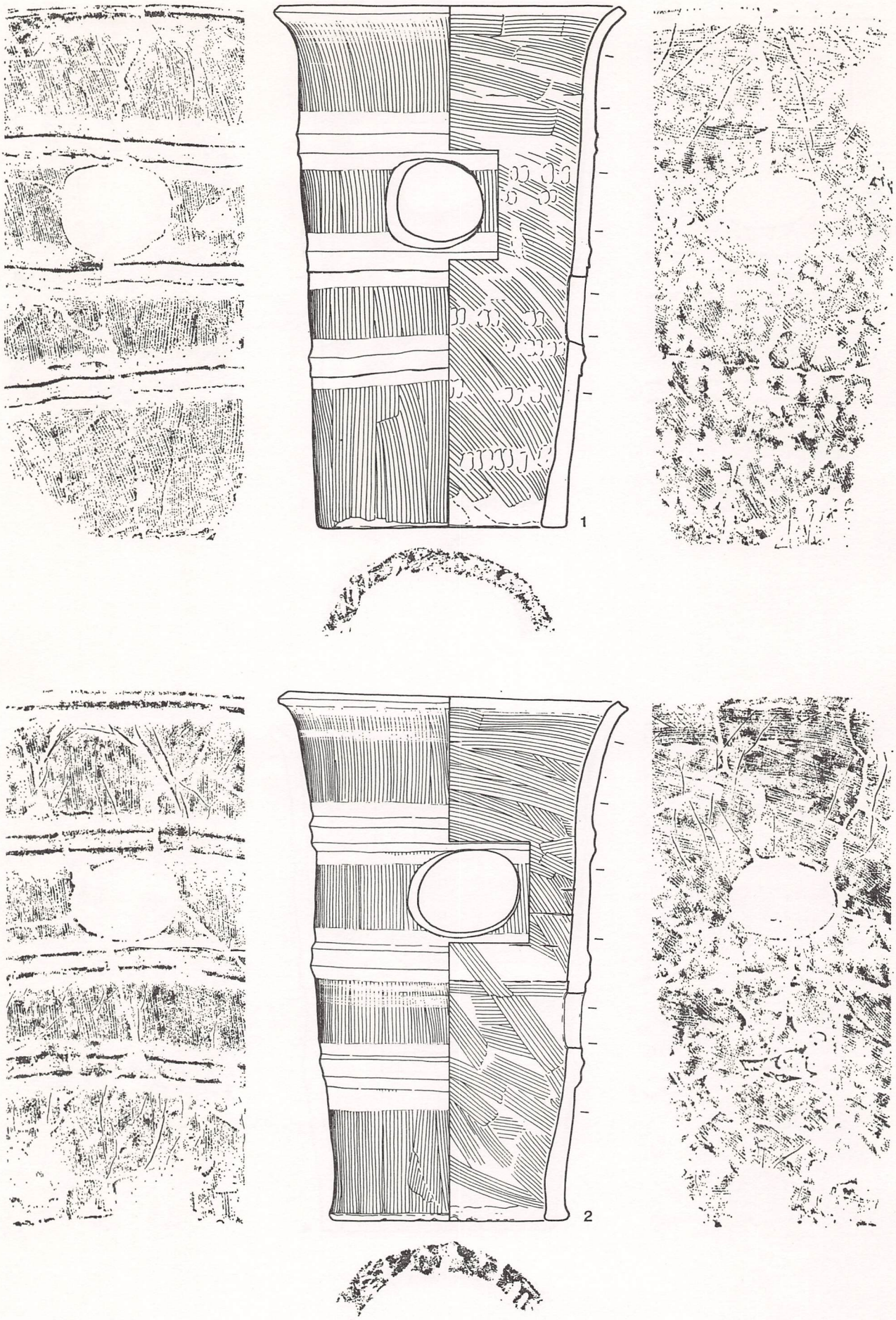
古墳に係る出土遺物としては、埴輪の他に若干の土師器片及び須恵器片があったが、小破片が多く、土師器は図示に耐え得るものがない。一方、須恵器についても形態の判明するものはなく、わずかに甕の体部破片が数点あったので、それらを図示しておく（193～200）。

いずれも外面には平行タタキメ、内面は同心円タタキメが例外なく認められる。多くが後円部東側調査区からの出土である。

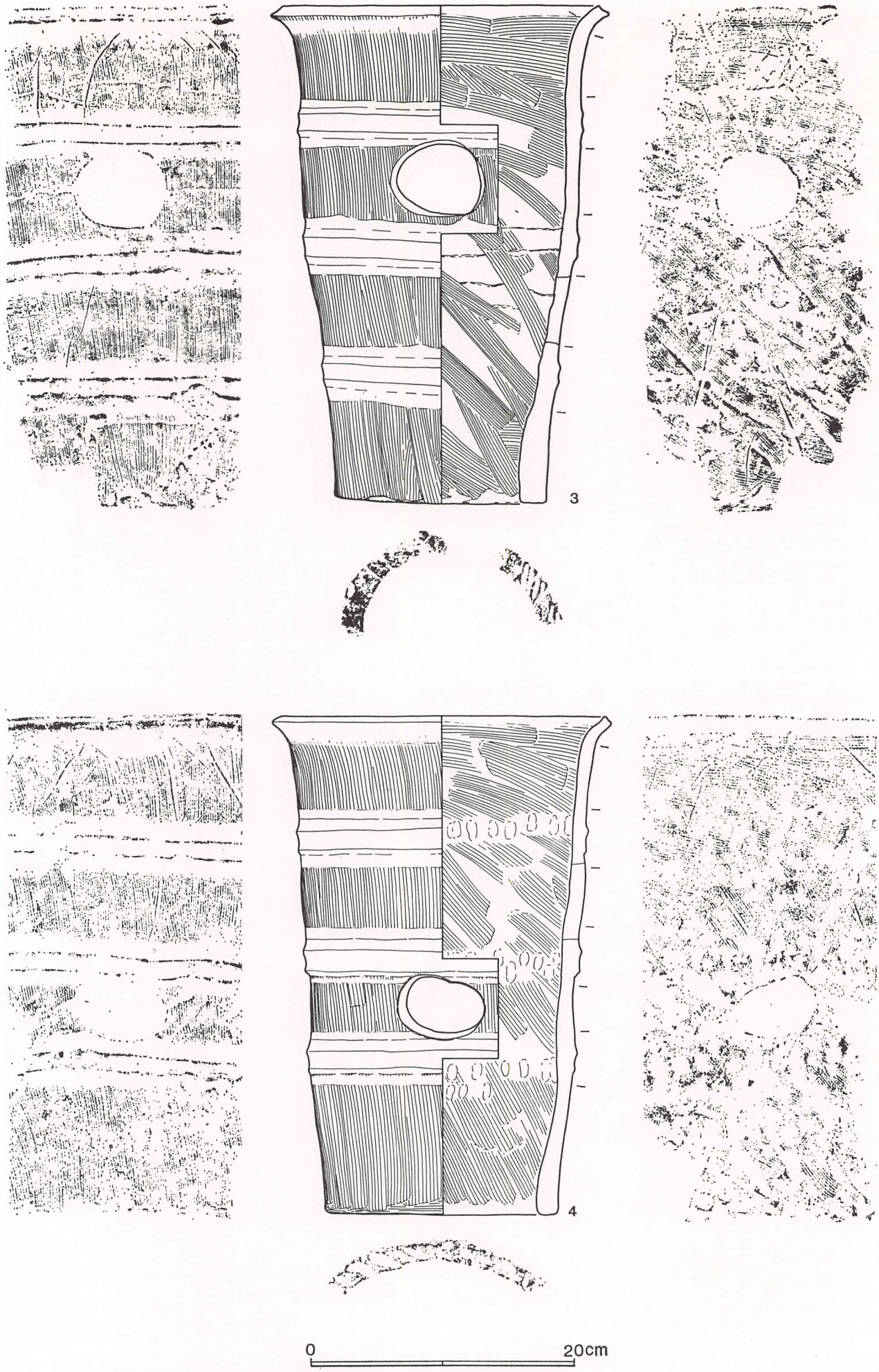
（杉崎　茂樹）

第1表　主要な円筒埴輪の計測値（単位：cm、5mm以下は4捨5入、（　）内は推定）

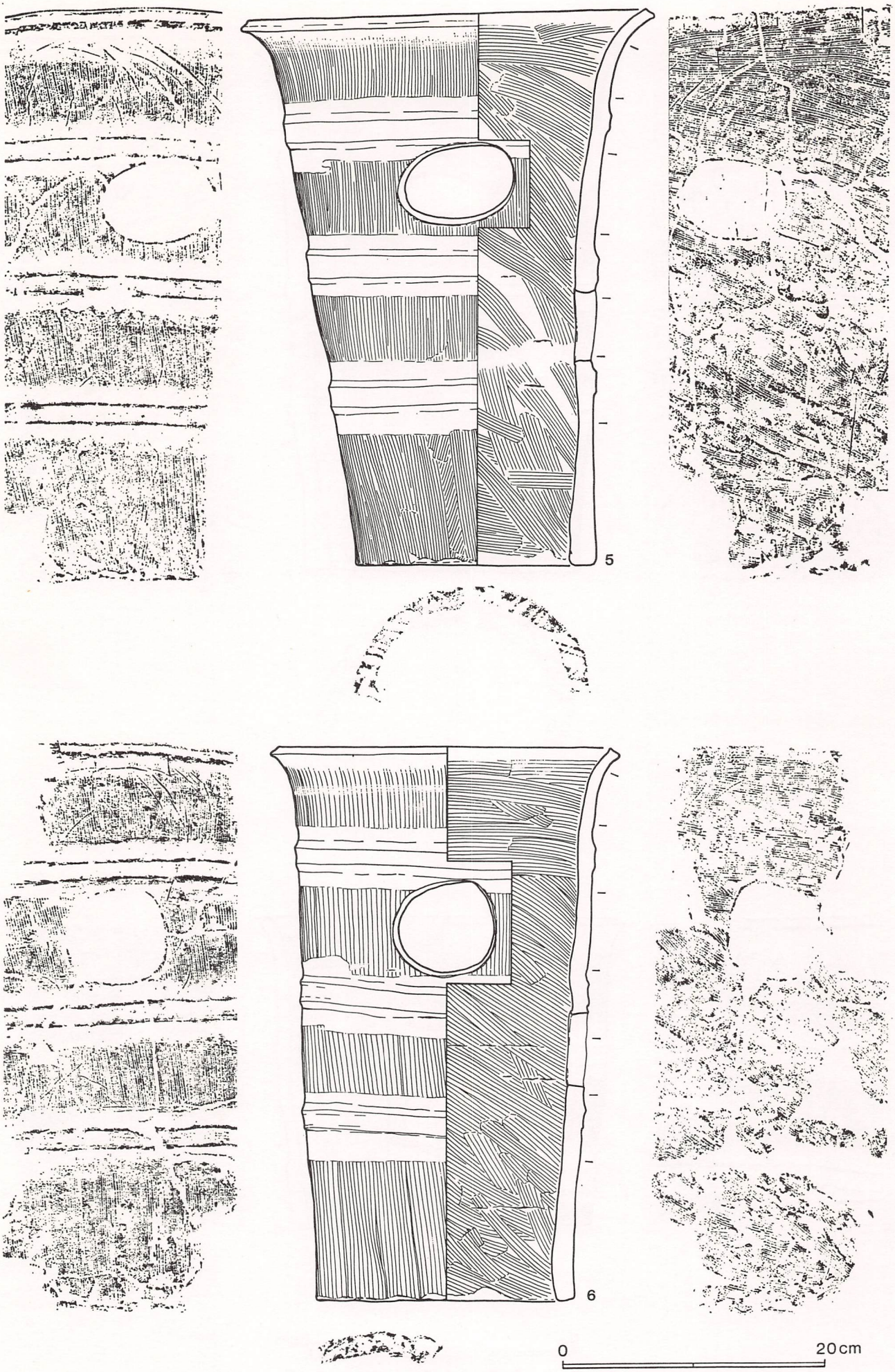
No.	大きさ			各段の幅				凸帯（タガ）の幅（基部）				分類
	器高	口縁径	底径	最下段	第2段	第3段	口縁段	形態	下	中	上	
1	39.5	26.5	18.5	11.0	5.5～7.0	6.5	7.0～8.5	M字	2.5	←	←	A_1
2	39.5	(26)	17.5	10.5	6.0	7.0～8.0	9.0	〃	2.5	←	←	〃
3	38.0	(28)	16.0	8.5	7.0	8.0	8.0	〃	2.5	←	←	〃
4	38.5	26.5	(18)	11.0	5.5	7.0	7.0～8.5	〃	2.5	←	←	〃
5	41.5	30.5	17.5	11.5～13.0	6.5～7.5	7.5	7.5	〃	2.5	←	←	〃
6	42.0	(28)	(21)	13.0	7.0	8.0	7.5	〃	2.5	←	←	〃
7	40.0～41.0	27.5	19.0～20.5	10.5～12.0	7.0	8.0	8.0	台形	2.0	←	←	A_2
8	—	(28)	—	—	—	7.0	7.5～9.0	M字	—	2.5	←	A_1
9	—	28.0	—	—	—	—	9.5～11.0	台形	—	—	2.0	A_2
10	—	—	19.0～20.0	13.0	6.5	—	—	〃	1.8	2.0	—	〃
11	—	30.0～31.0	—	—	—	—	13.0～15.5	〃	—	—	2.0	B
12	—	—	18.0	21.5	11.0	—	—	〃	2.0	←	—	〃
13	—	—	22.0	23.5	—	—	—	〃	2.0	—	—	
14	—	—	(20)	22.5～24.0	10.0	—	—	〃	2.5	←	—	B
15	—	—	—	—	—	10.5	11.5	〃	—	2.0	←	〃
16	—	—	—	—	—	6.5	7.5	〃	—	—	2.0	A_2
24	—	—	—	—	—	6.0	8.0	M字	—	2.5	←	A_1
89	64.0	(34)	(22)	21.5	11.5	11.0～13.5	11.5～12.5	台形	2.0	←	←	B
90	—	(34)	—	—	—	13.0	13.5	〃	—	1.8～2.5	←	〃
91	—	—	—	—	—	11以上	12.0	〃	—	—	2.0	〃
92	—	—	—	—	—	11.0	12.0	〃	—	2.0	←	〃
94	—	—	—	—	—	9.0	12.5	〃	—	2.0	←	〃
113	—	—	—	—	10.5	9.5以上	—	〃	2.0	←	—	〃
114	—	—	—	—	10.5	10.0	—	〃	2.0	←	←	〃
115	—	—	—	—	12.0	—	—	〃	2.0	—	—	〃



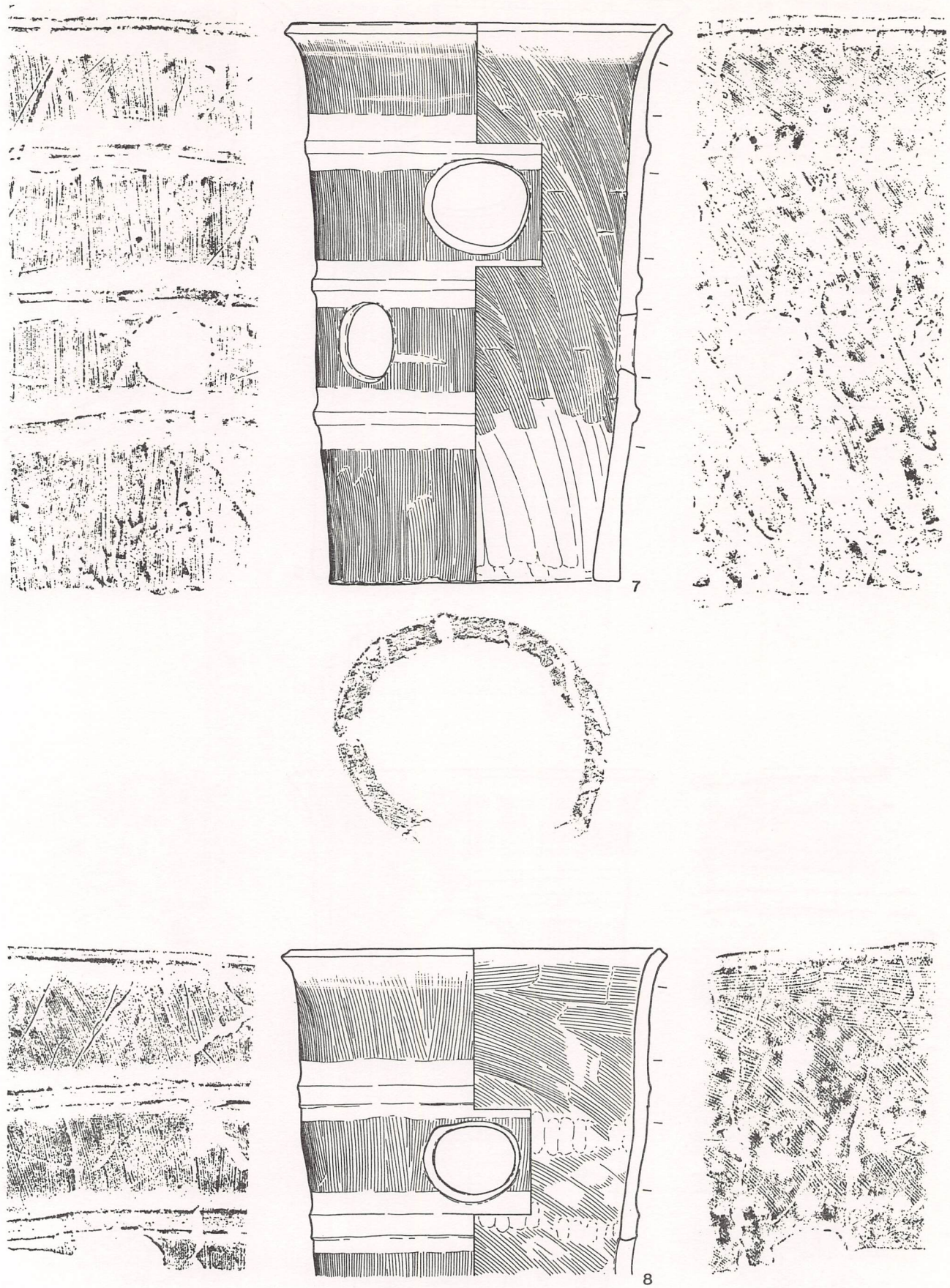
第11図　前方部南側調査区出土遺物１（1、2）



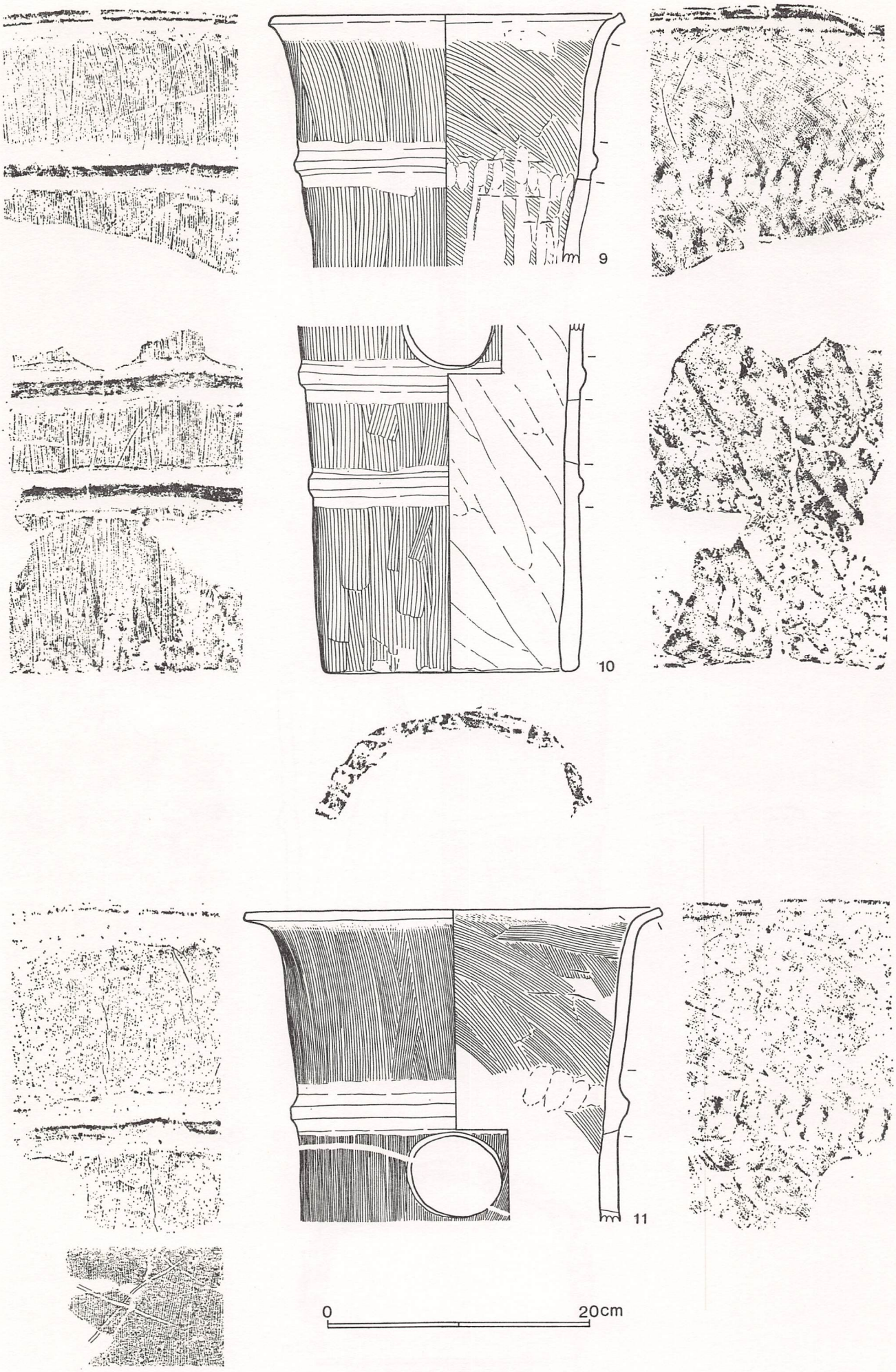
第12図　前方部南側調査区出土遺物２（3、4）



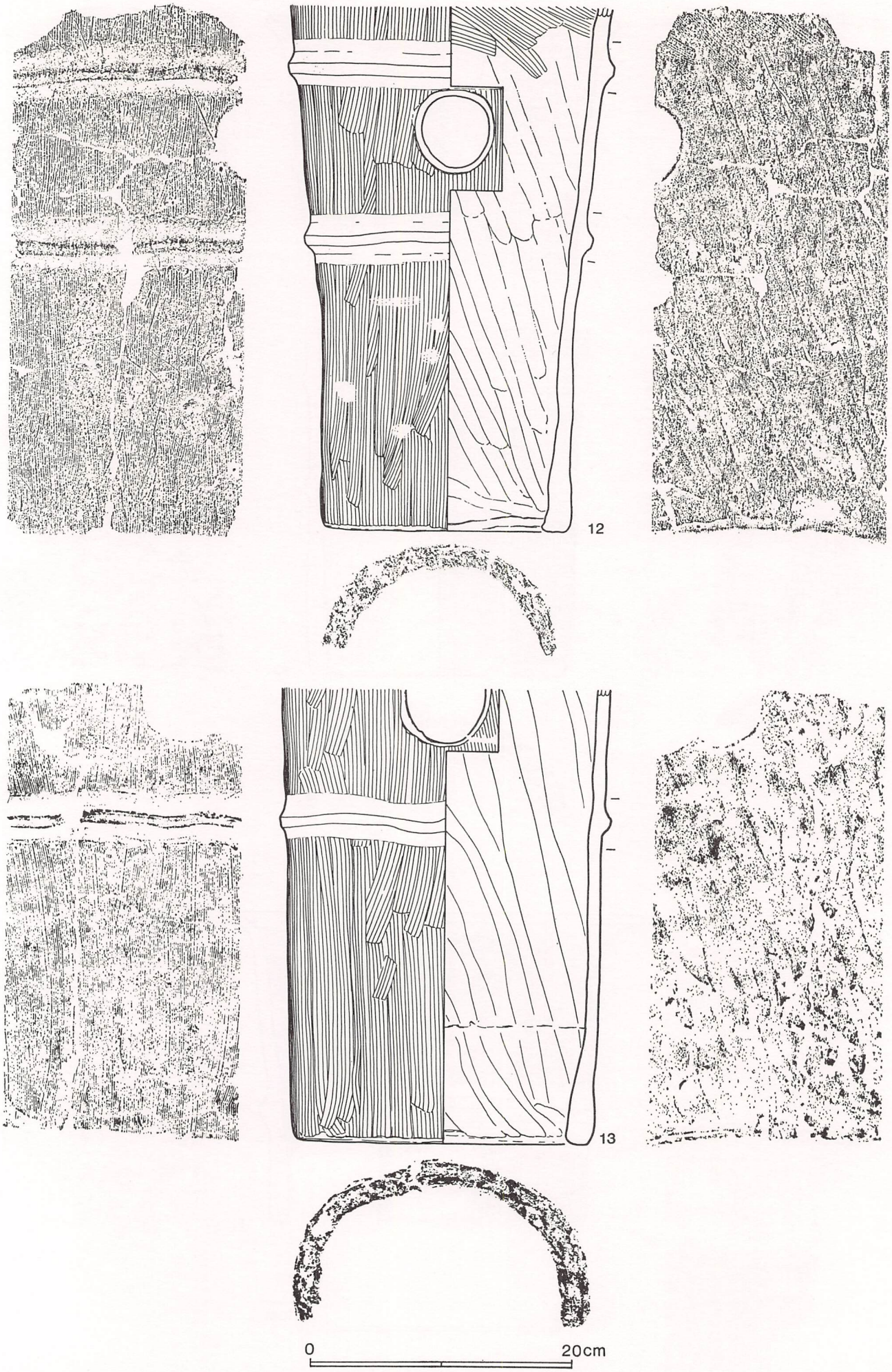
第13図　前方部南側調査区出土遺物３（5、6）



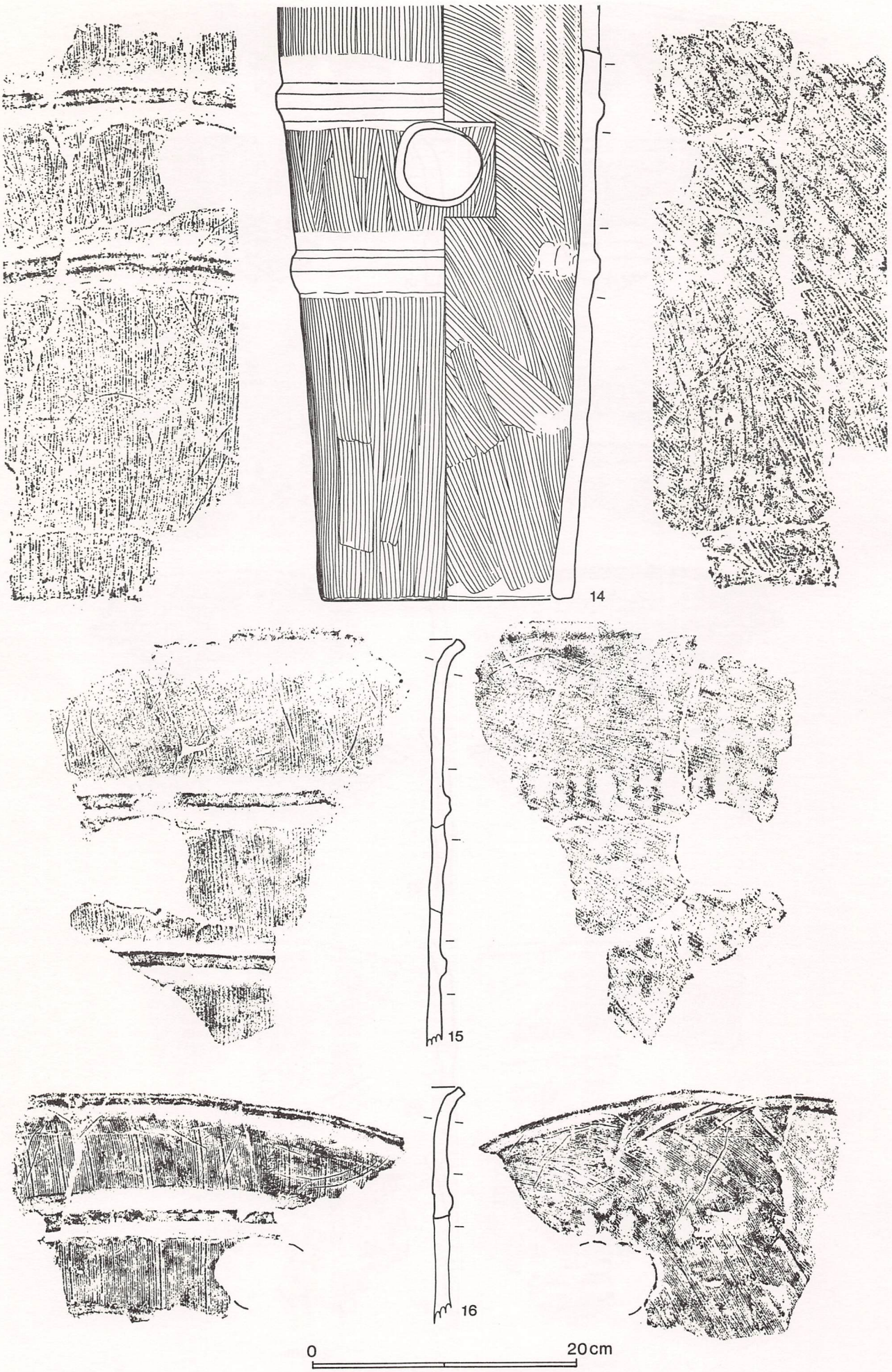
第14図　前方部南側調査区出土遺物４（7、8）



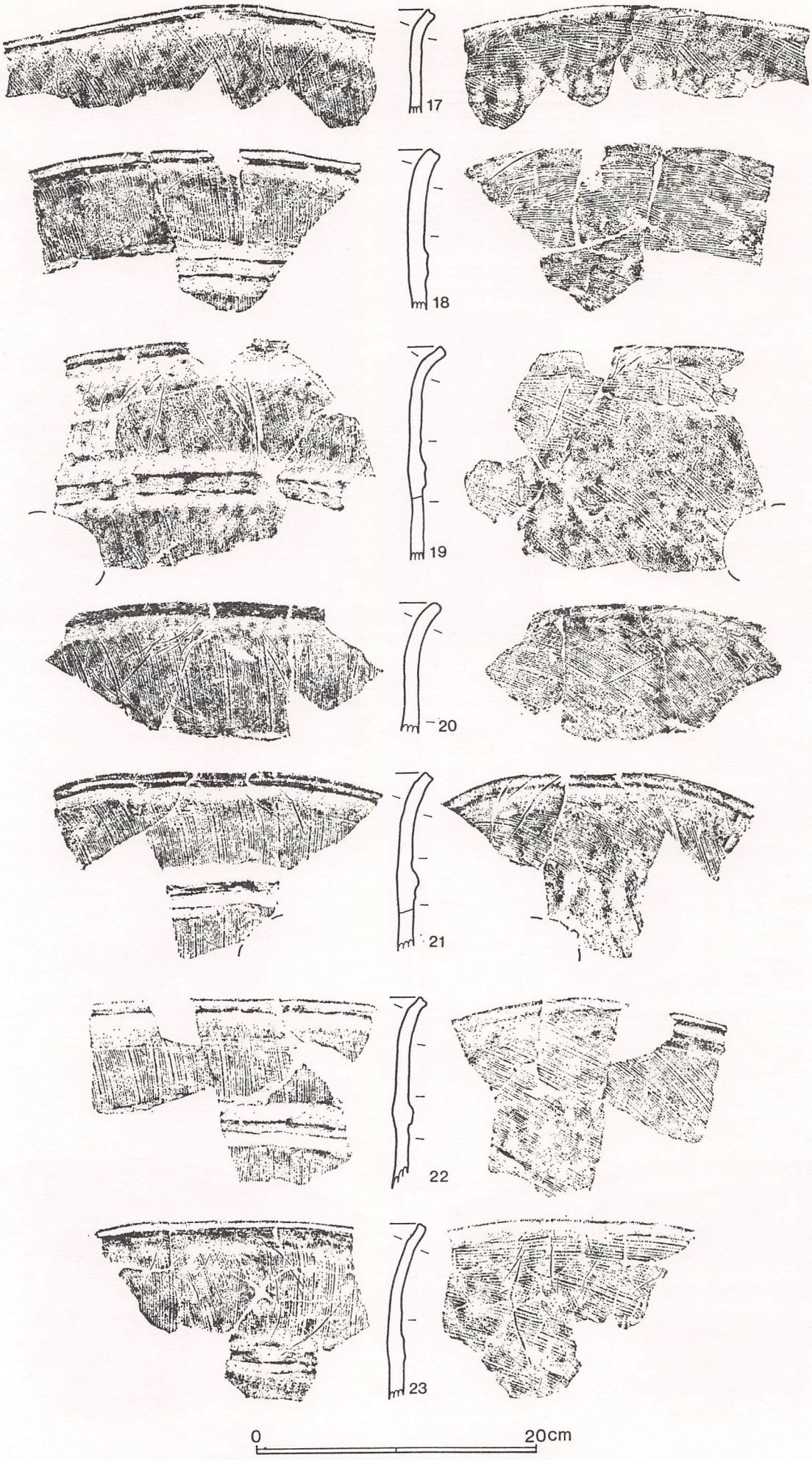
第15図　前方部南側調査区出土遺物５（9～11）



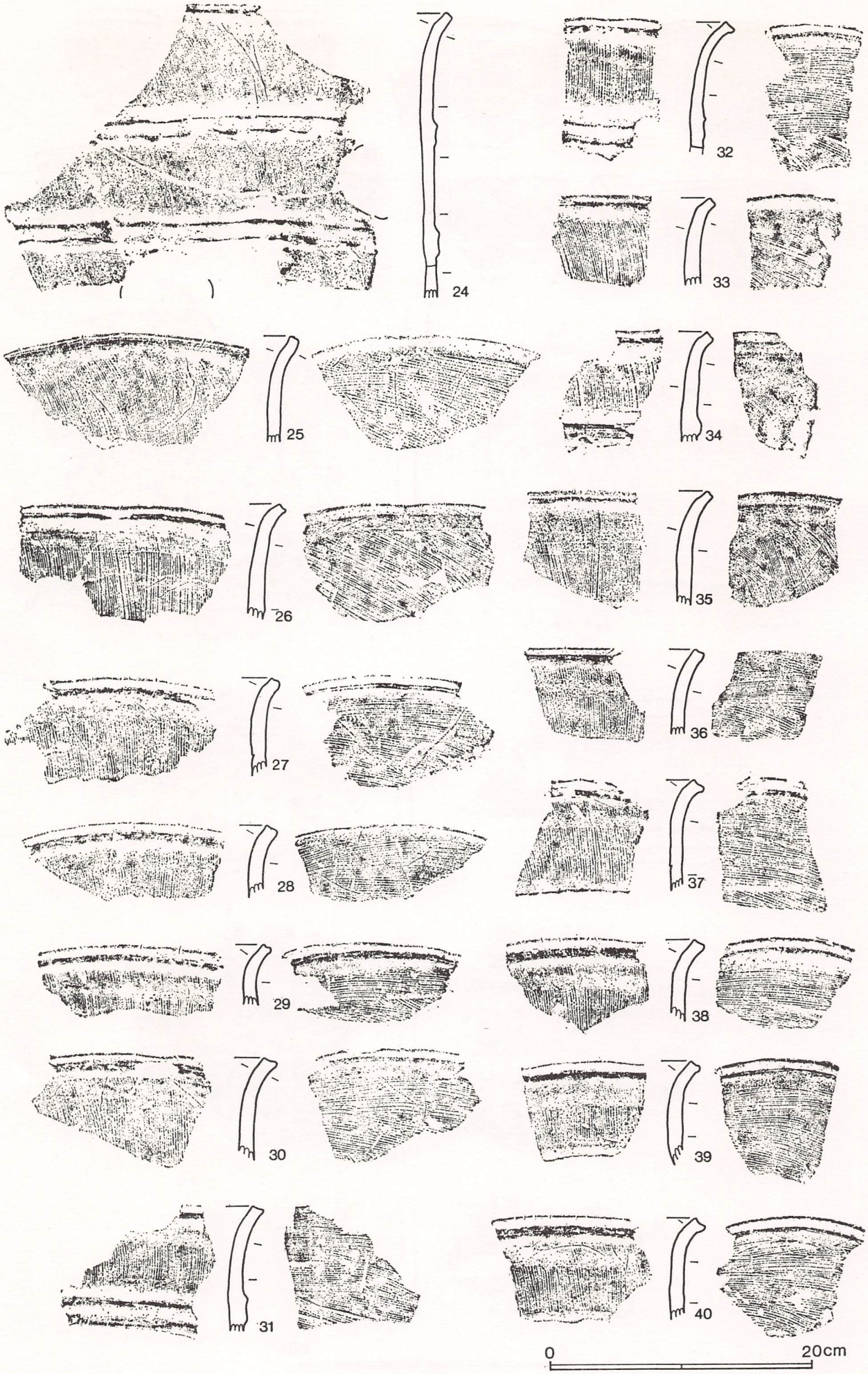
第16図　前方部南側調査区出土遺物６（12、13）



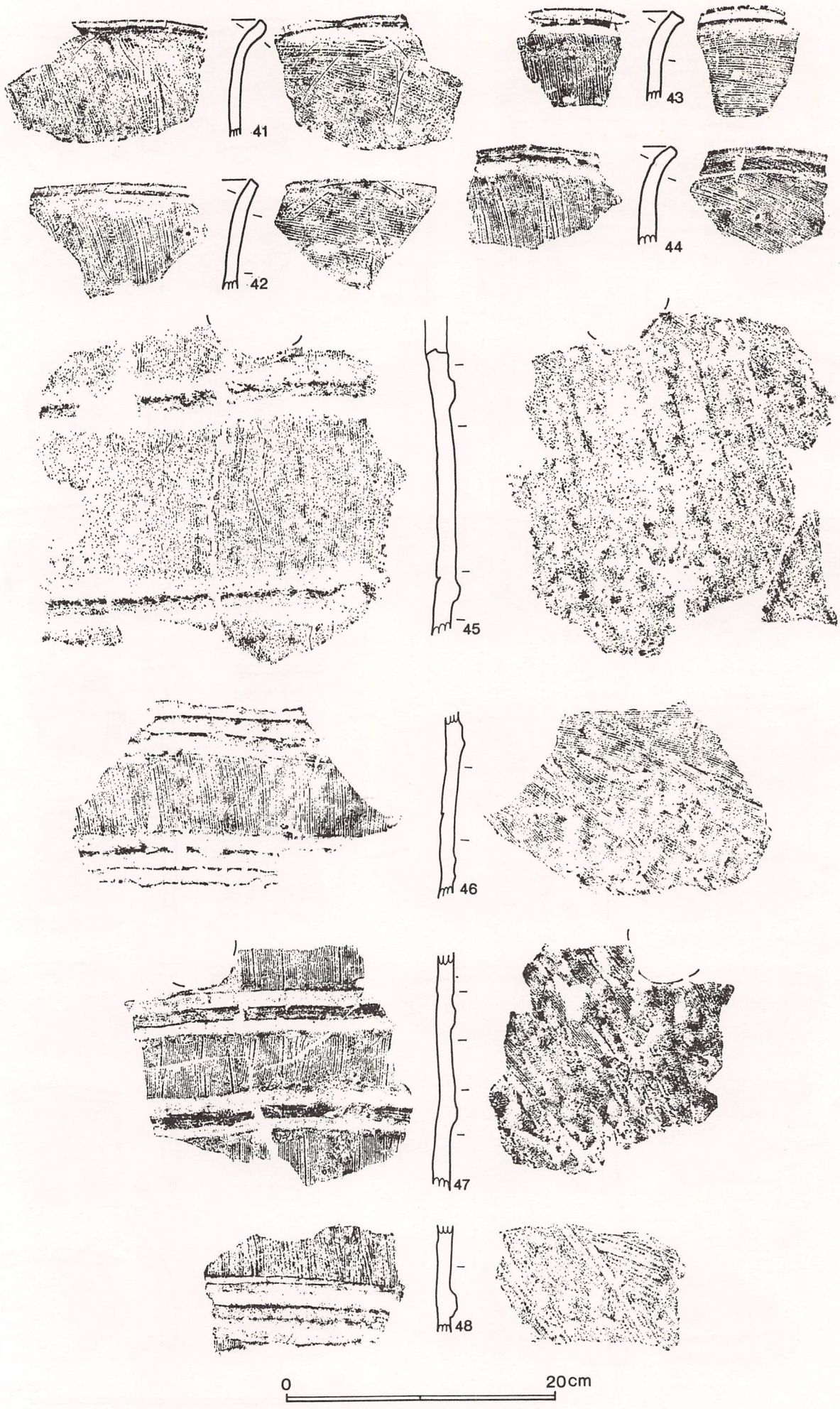
第17図　前方部南側調査区出土遺物７（14～16）



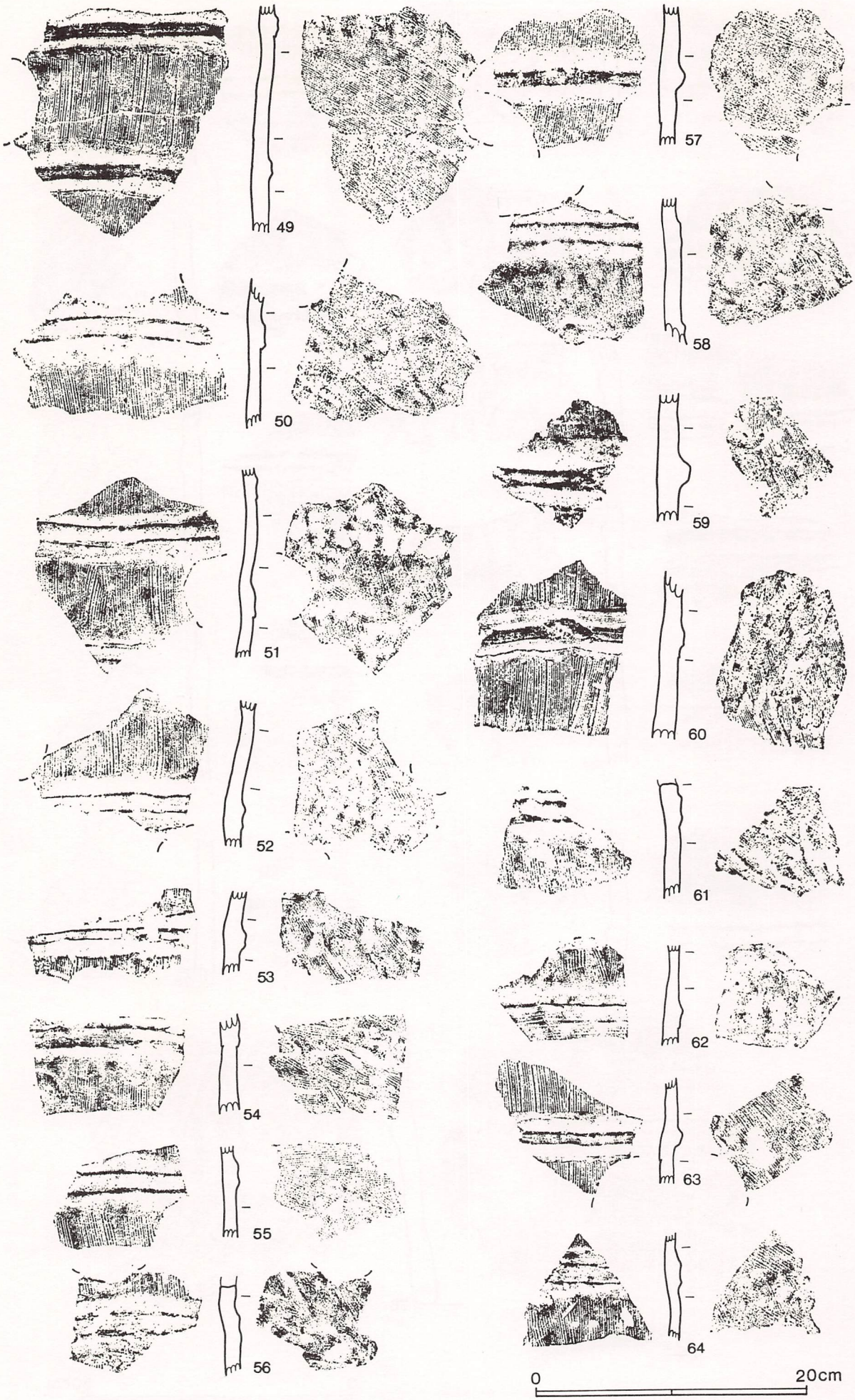
第18図　前方部南側調査区出土遺物８（17～23）



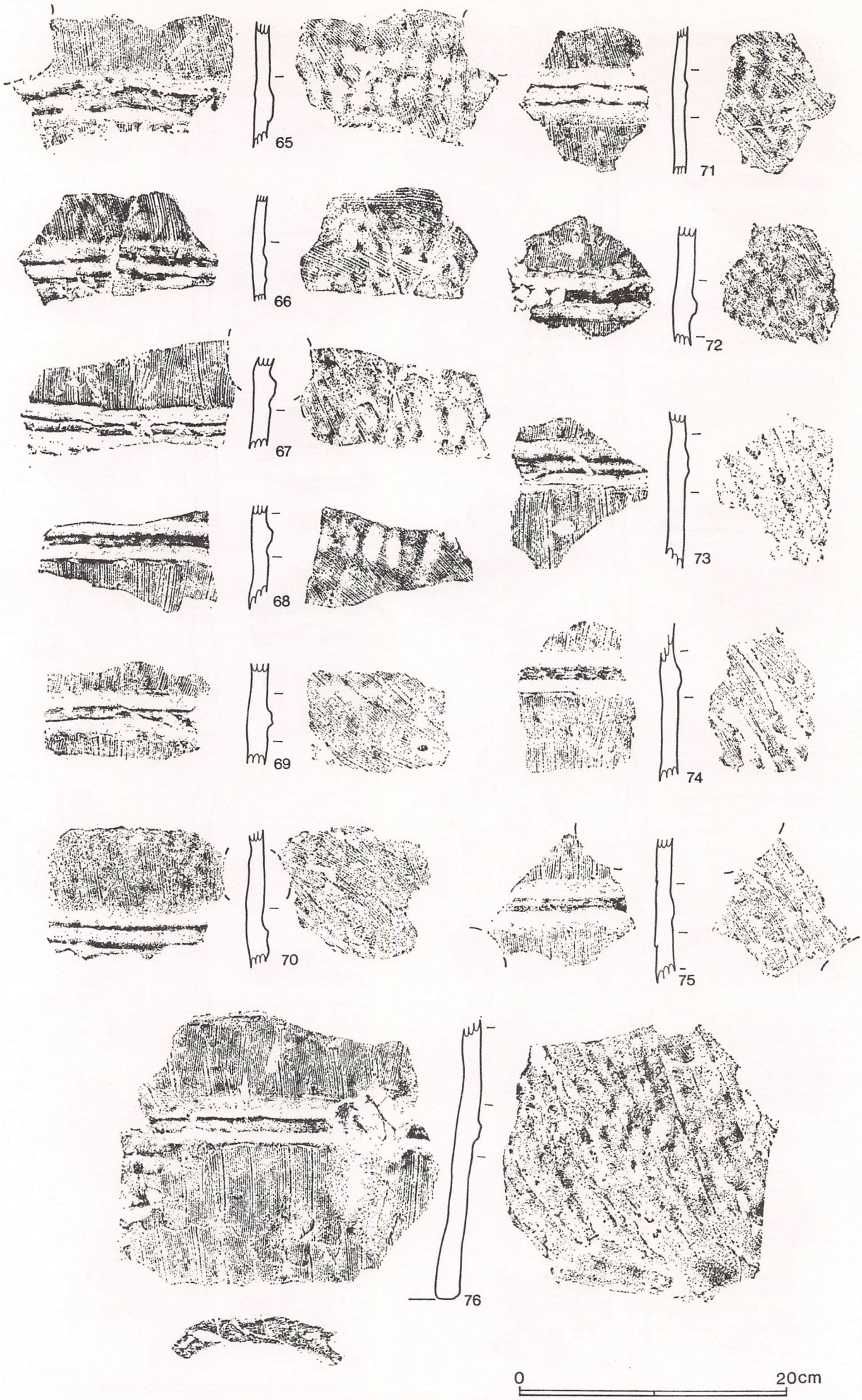
第19図　前方部南側調査区出土遺物９（24～40）



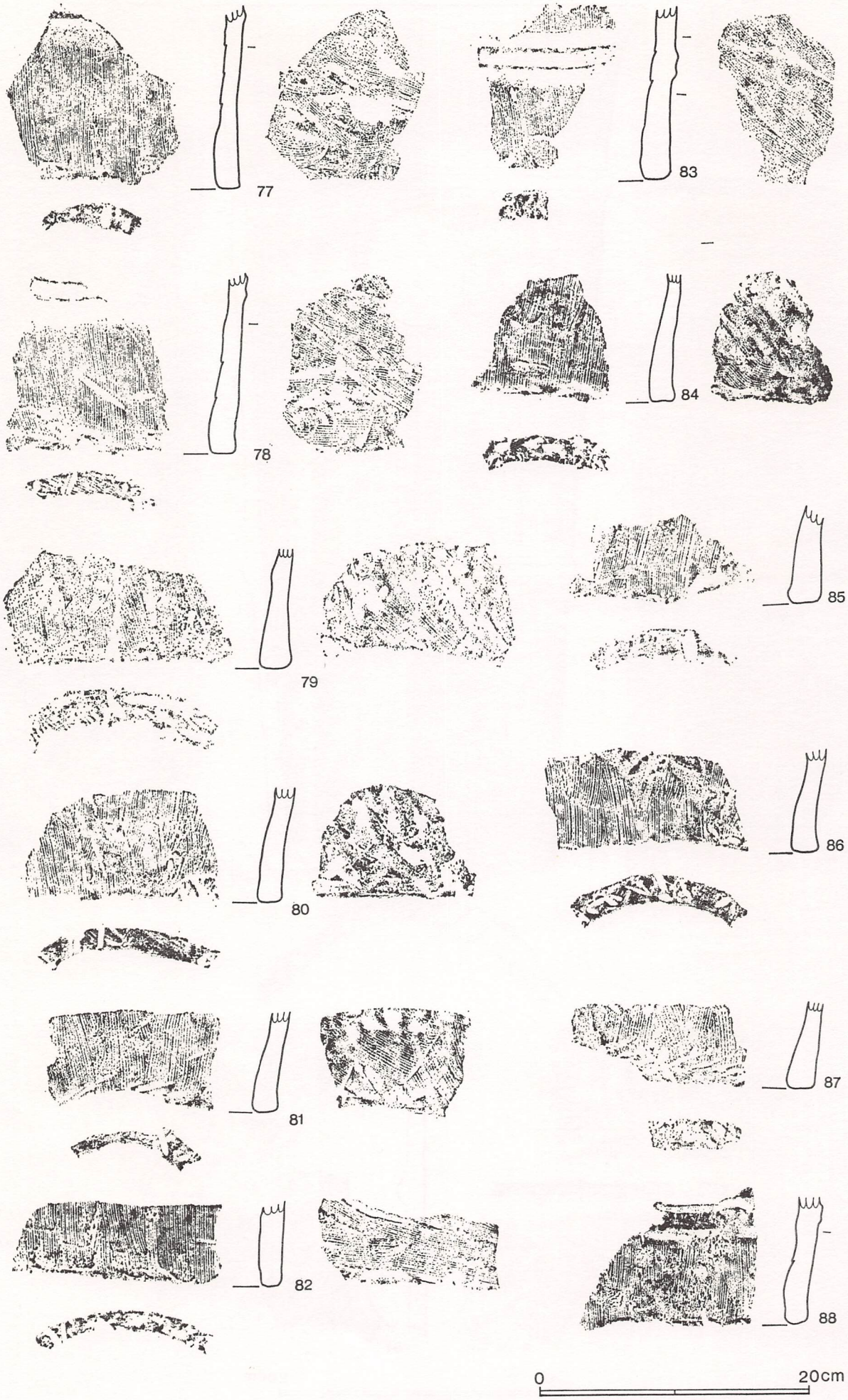
第20図　前方部南側調査区出土遺物10（41～48）



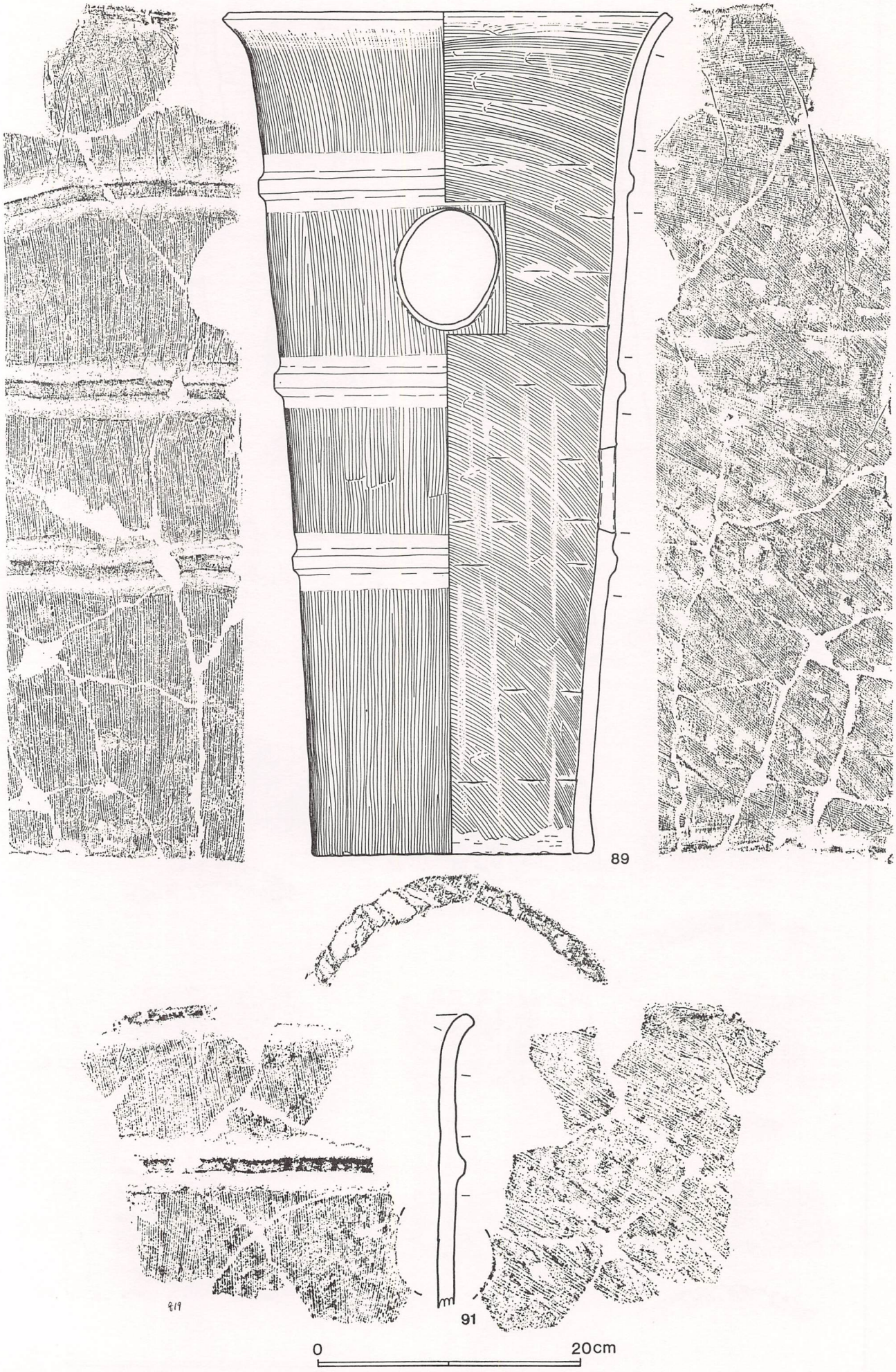
第21図　前方部南側調査区出土遺物11（49～64）



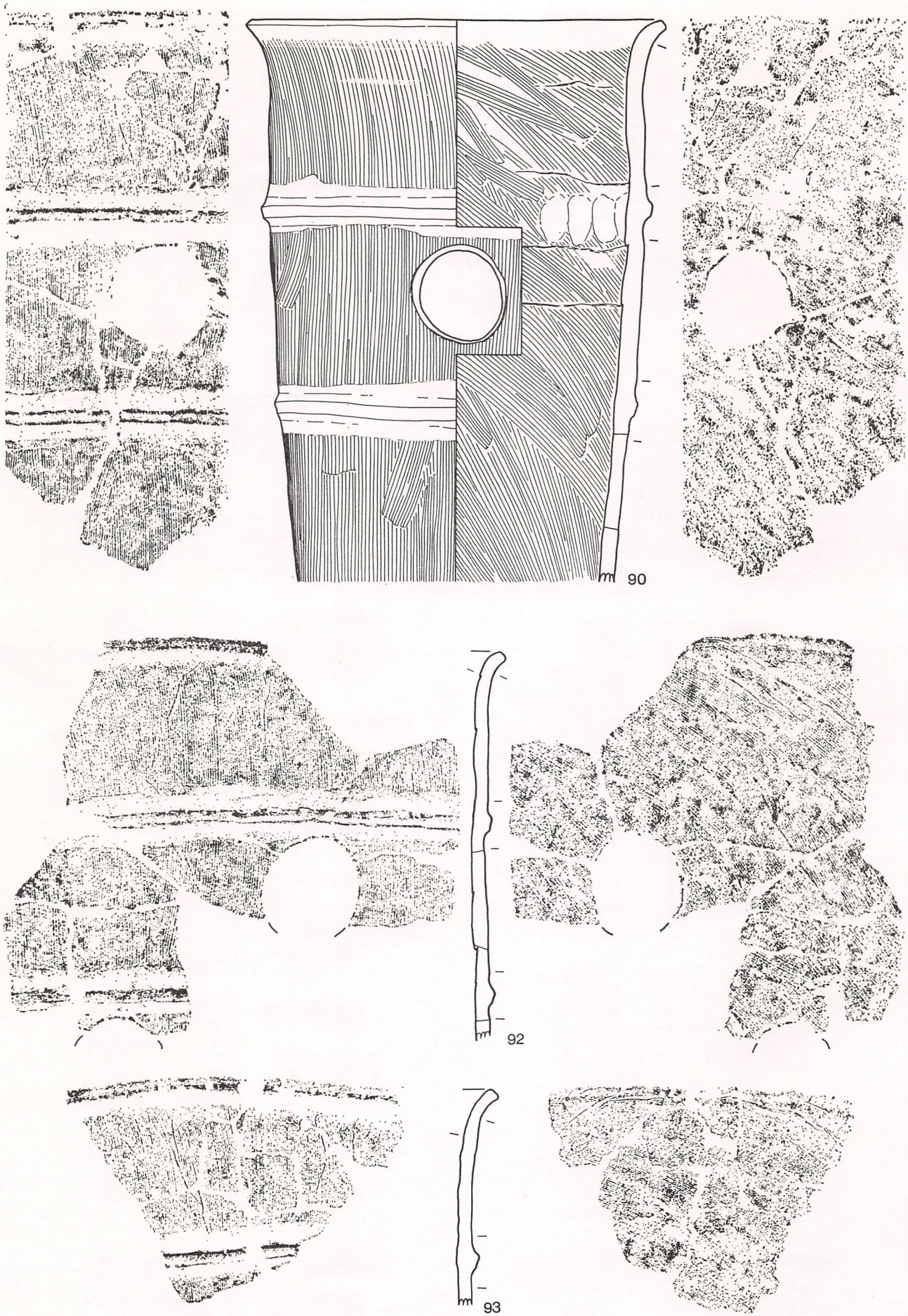
第22図　前方部南側調査区出土遺物12（65～76）



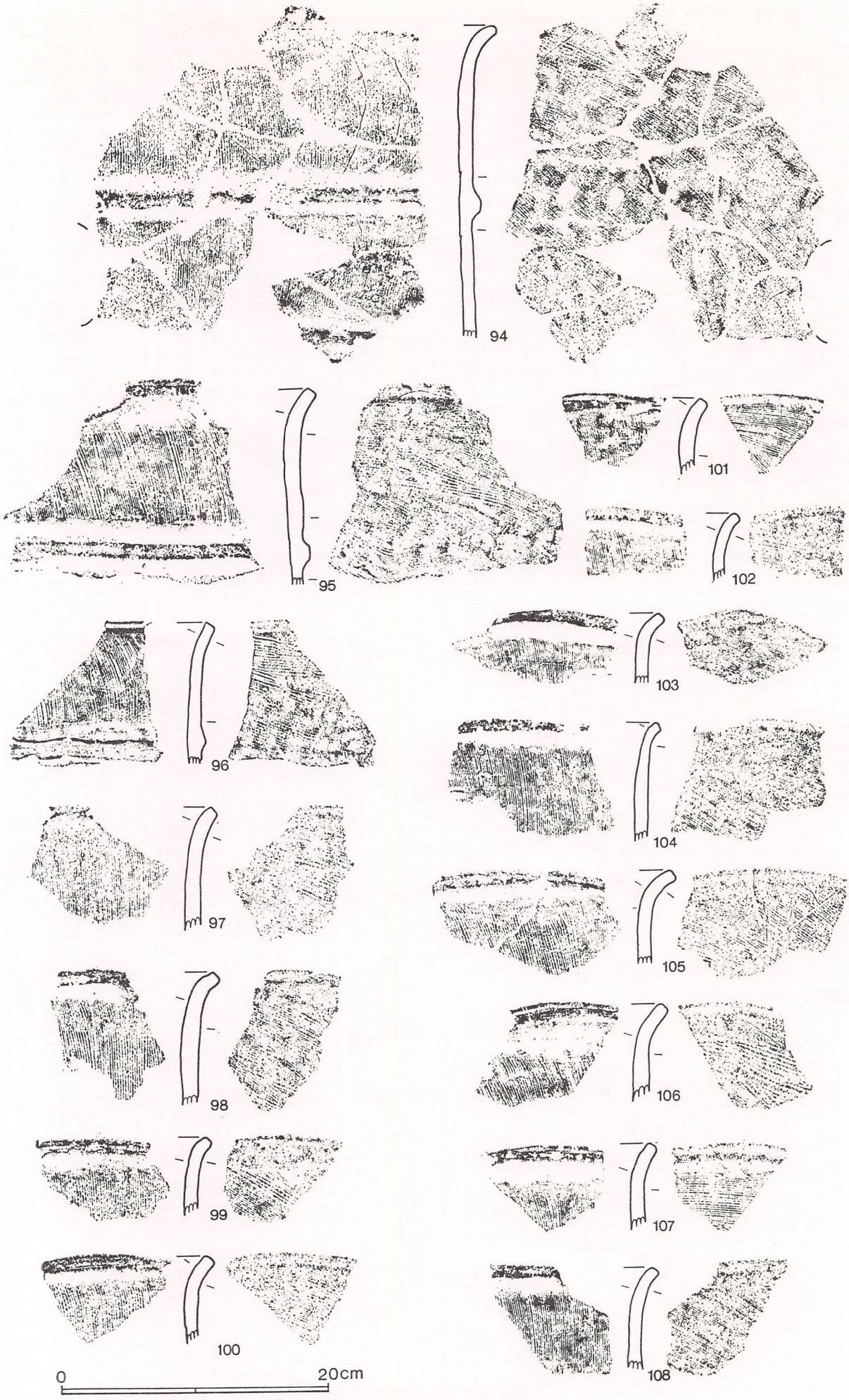
第23図　前方部南側調査区出土遺物13（77～88）



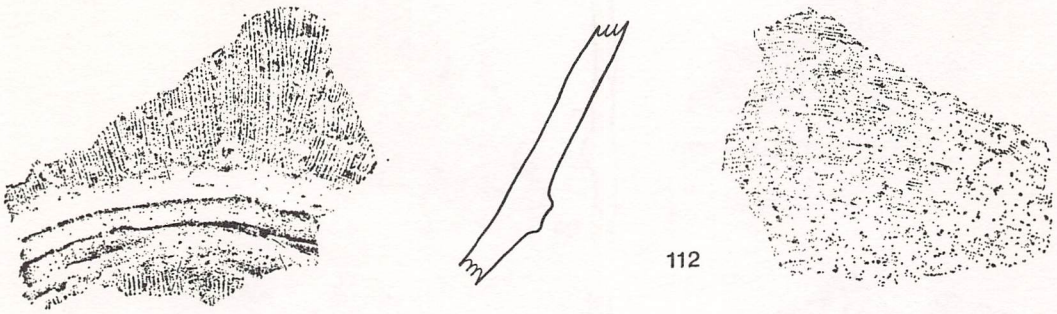
第24図　後円部東側調査区出土遺物１（89、91）

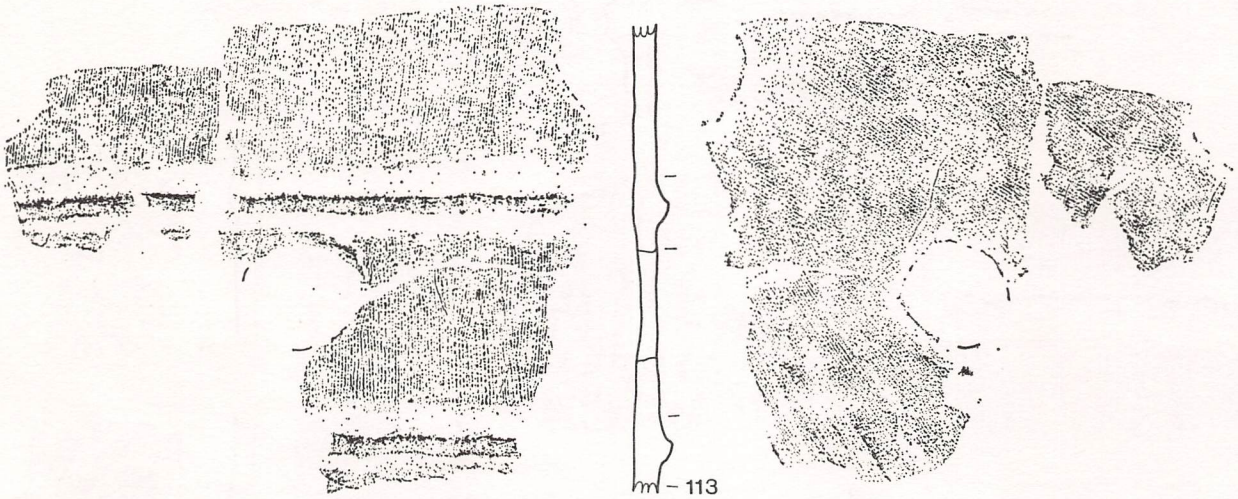


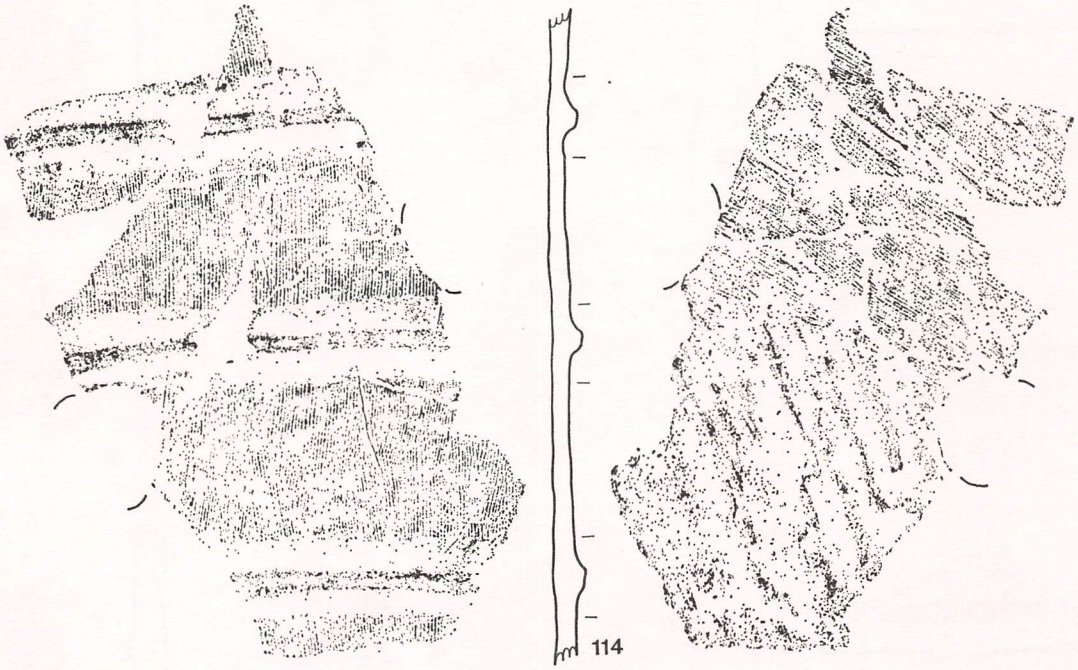
第25図　後円部東側調査区出土遺物２（90、92、93）



第26図　後円部東側調査区出土遺物３（94～108）

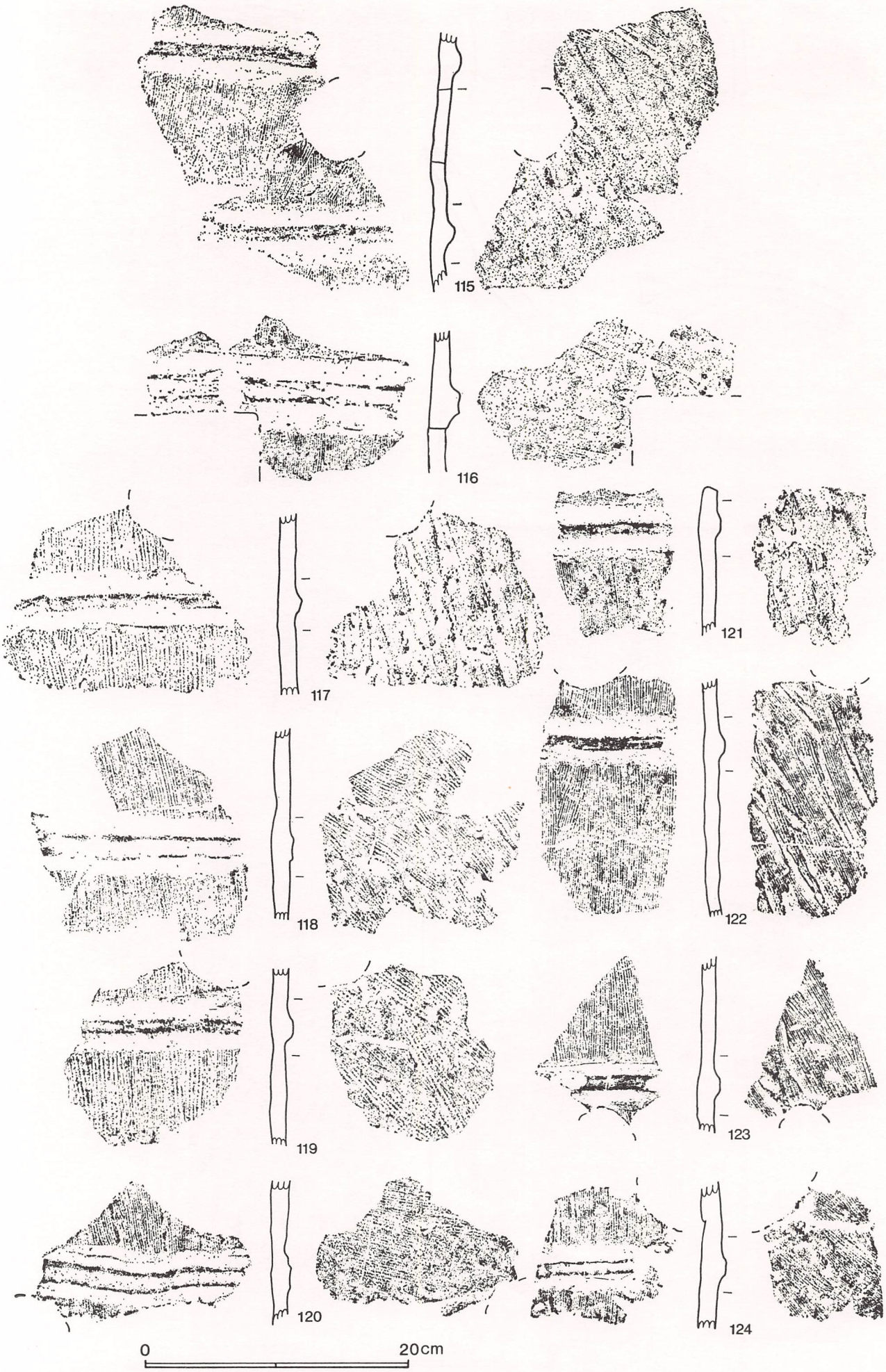




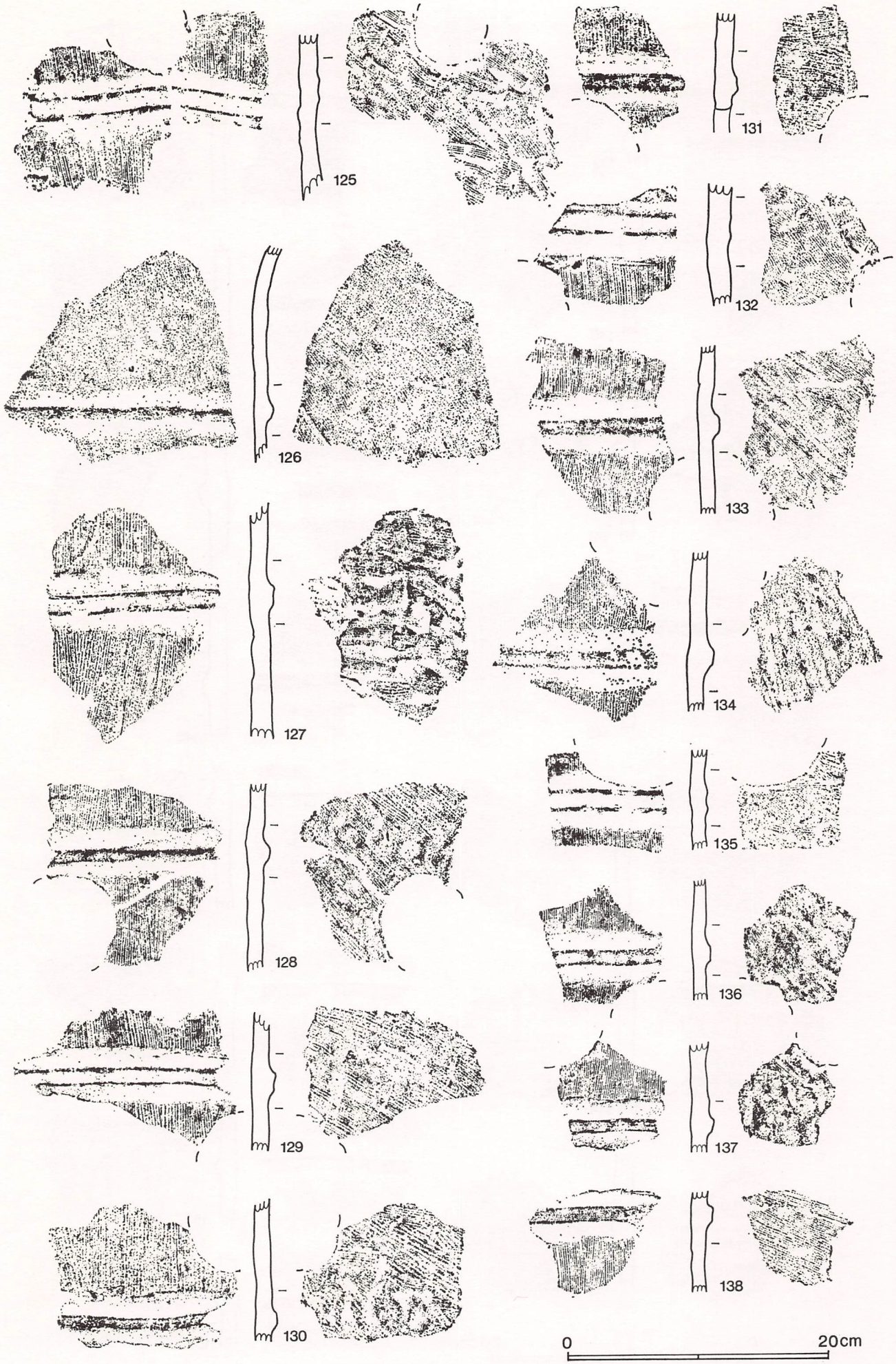


0 20cm

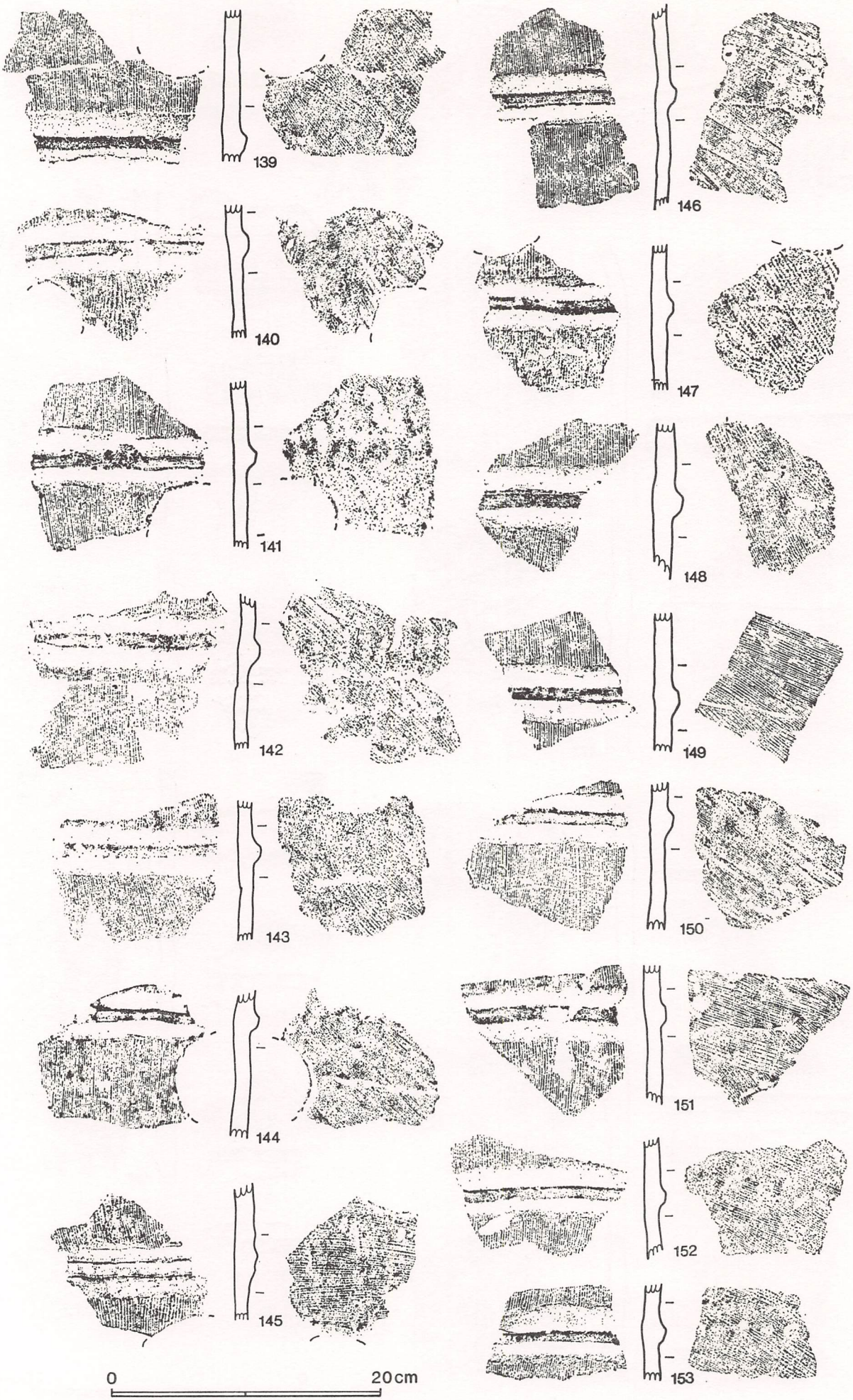
第27図　後円部東側調査区出土遺物４（109～114）



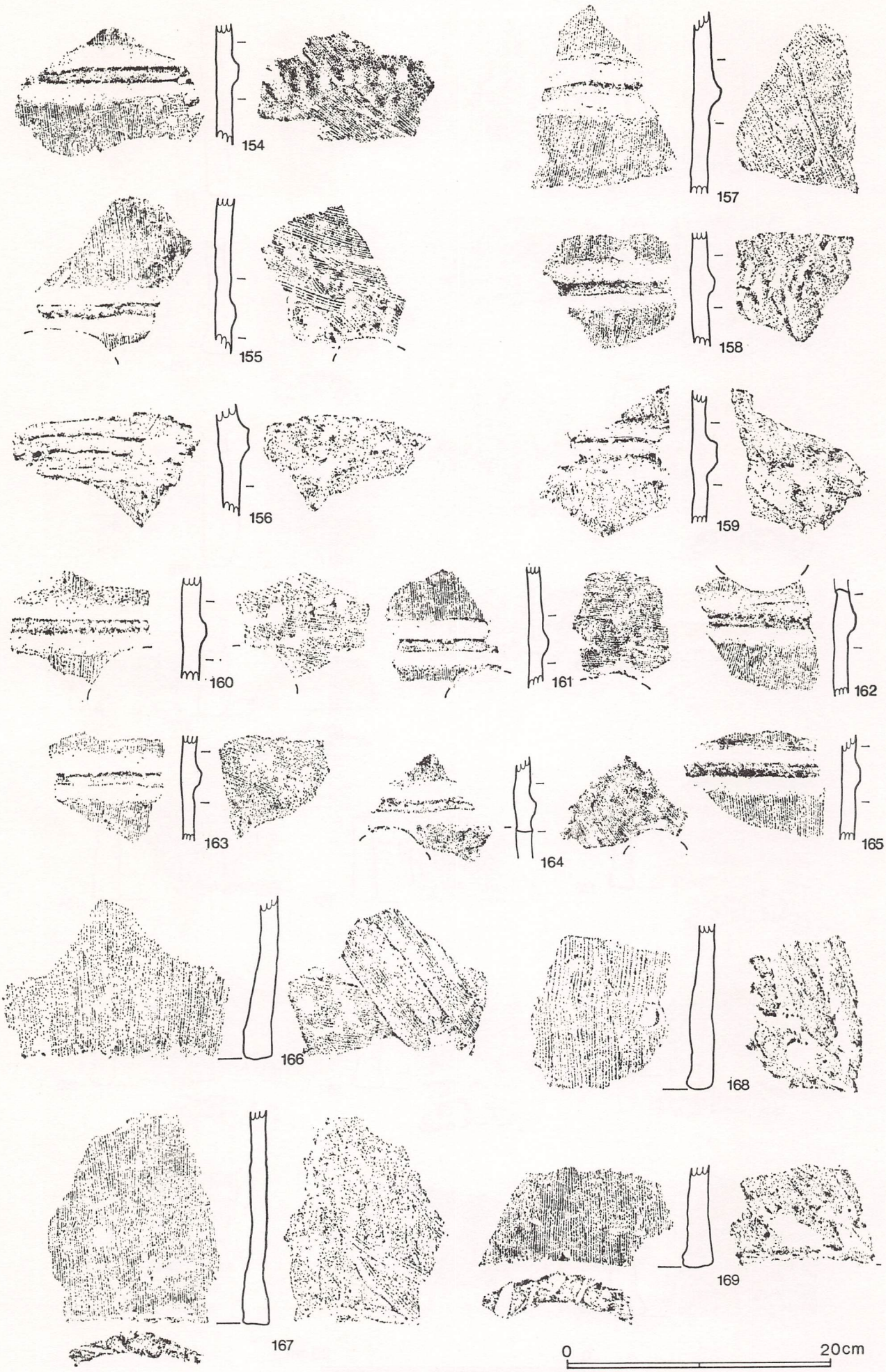
第28図　後円部東側調査区出土遺物５（115～124）



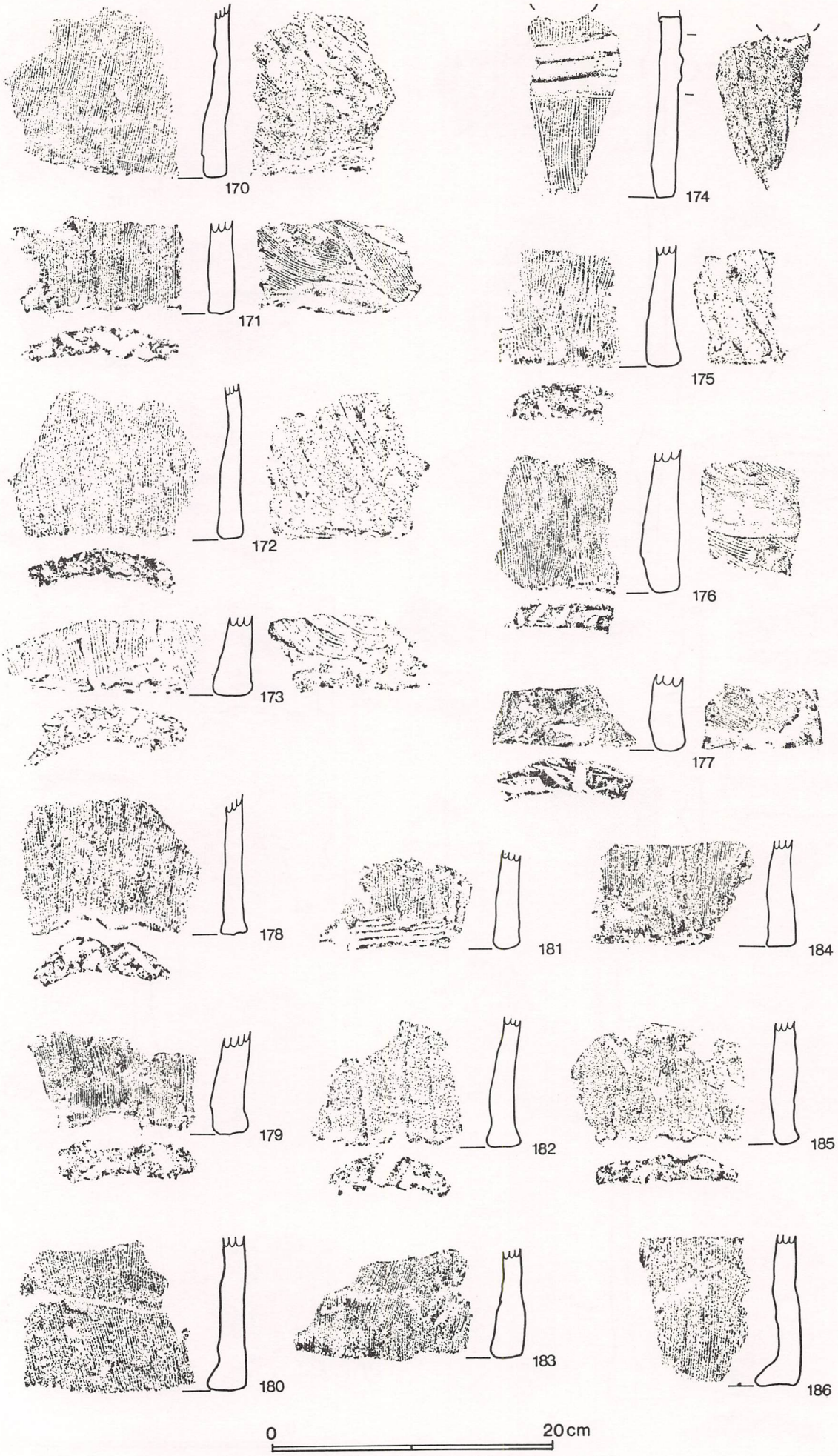
第29図　後円部東側調査区出土遺物６（125～138）



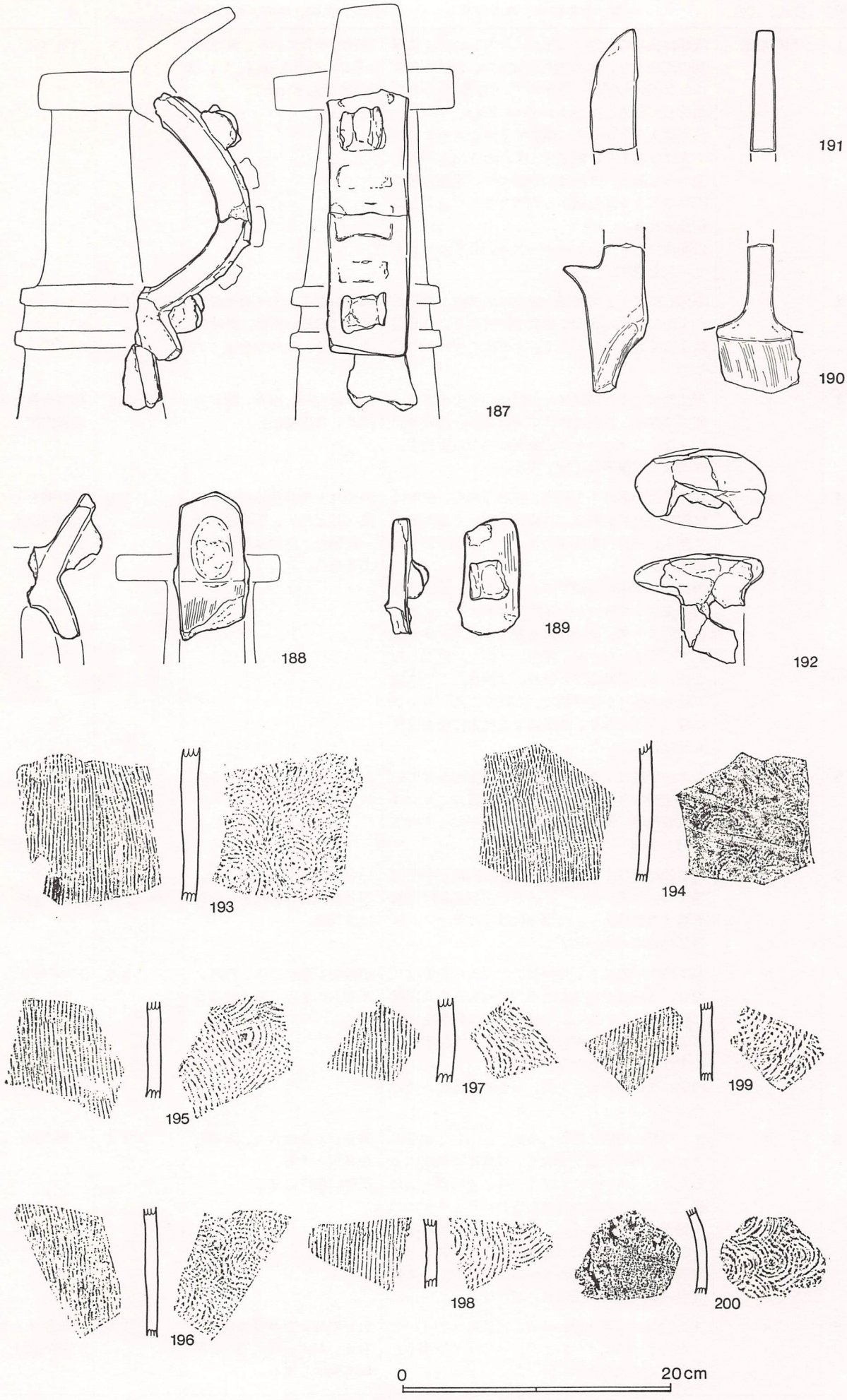
第30図　後円部東側調査区出土遺物７（139～153）



第31図　後円部東側調査区出土遺物８（154～169）



第32図　後円部東側調査区出土遺物９（170～186）



第33図　形象埴輪（187～192）及び須恵器（193～200）

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成、等の特徴	ハケメ（10本/cm）	備　　考
1	円筒埴輪	底部は底面にかけなだらかに肥厚し底面には棒状の圧痕あり、体部は内湾気味で、口縁に向うにしたがいわずかに径を増す。口縁部は外方に屈曲して開き、端面はわずかに凹む。 外面はタテないし左に傾斜するナナメハケメ、タガは３本あり、偏平でくずれた「M」字形、上から２段目、３段目に一対づつ、直角方向に円形のスカシが上部から右回りにえぐるように穿孔される。 内面はナナメないしヨコハケメ、各所にユビオサエ痕を残す。	砂粒を多量に含み、灰色味を帯びた褐色を基調とし、部分的に灰色となる。 焼成堅緻。	1.8	内堀内出土。
2	〃	形態的には１と略同様。底部は底面直上で鈍くわずかに突出し底面に棒状の圧痕あり。口縁部はゆるく外反気味に開く。タガはくずれた「M」字形。	細砂を含み、内外明灰褐色断面は明るい灰色。焼けしまり欠く。内外ややマメツ	1.8	〃
3	〃	形態的には１と略同様だが底径がやや小さい。底部は厚く、底面に棒状の圧痕残る。内面はナナメないしヨコハケメ、各所に接合痕を残す。タガはごく偏平な「M」字形。	細砂を含み、内外、断面共明るい黄灰褐色。	1.4～1.6	約半周強を欠く。 内堀内出土。
4	〃	基本的な形態は１と同様。底部は厚く、底面には棒状の圧痕が残る。口縁部は短かく屈曲気味に開き、端部内面直下はヨコナデによりわずかに凹む。 外面はわずかに左傾するタテハケメ、基底部外面は先行してヨコハケメ内面はナナメハケメで部分的にナデ、オサエ痕を各所に残す。タガは偏平でくずれた「M」字形。スカシは底部から２段、３段目にあけられる。２段目のものは切り始めと終りが不連続で、右回りにえぐるように穿孔されており、ナデによる仕上げや面取りも行なわれていない。	外面は上半が茶味のある灰色（還元色）、下半は黄灰～灰褐色、内面は黄色味のある茶色。	1.8	半周強を欠く。 内堀内出土。
5	〃	基本的形態は１と略同様だが口縁部にかけての開き方が大きくなる。上から２段目のスカシは横長の円形（楕円形）。タガは偏平でくずれた「M」字形	細砂を含み、内外共明るい灰茶褐色。	1.5	内堀内出土。
6	〃	基本的形態は１と略同様。底部は内側がやや肥厚する。外面タテハケメ、やや左傾底部は表面剝落する部分あり。内面中位以下はナナメ、口縁部付近はヨコハケメ。	白色の細砂を多量に含む。内外共明るい灰褐色、断面は暗灰色。	1.4	〃
7	〃	基本的な形態は１と略同様。スカシの位置は２段目、３段目がきちんと直角で対称となる位置に穿孔されていない。下のスカシは内側をナデにより面取り。タガは偏平でくずれた台形又はくずれた三角形となる。 内面は底部がナナメナデ、以上の部分はナナメハケメ。	細砂を多量に含み、内外、断面共に明るく茶味のある灰色。	1.3	内堀内出土。
8	〃	１と同様の形態と思われるが、上から２本目のタガの下方部分以下を欠く。口縁部は焼成によるものか、楕円形に大きく歪み、正円形とした場合には直径約28cm前後と思われる。タガはごく偏平でくずれた「M」字形、粘土不足に加えナデツケが不十分で、粗雑な仕上り、スカシは穿孔後部分的にユビオサエ。内面はナナメ及びヨコハケメで、部分的にユビオサエ。	細砂を多量に含み、灰褐色を基調とする。 堅緻に焼けしまる。	1.4	内堀内出土。
9	〃	１と同様の形態と思われる。内面はナナメハケメの後部分的にタテにナデ。ユビオサエ残る。タガはくずれた台形。	白色の細砂を多量に含む。明るい黄灰～灰茶褐色。堅緻に焼けしまる。	1.6	中位以下を欠く。 内堀内出土。

第２表　出土遺物観察表（１）

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成、等の特徴	ハケメ（10本／cm）	備考
10	〃	1と同様の形態と思われる。タガは低く、くずれた台形。内面はナナメにナデて仕上げる。上方にナナメハケメ認められる。底面に棒状の圧痕残る。	細砂を多量に含む。明茶褐色を基調とし、断面は黒灰色。部分的にしまりを欠く。	1.7	内堀内出土。
11	〃	口縁部は短く外方に屈曲し、ごくわずかに凹む端面を有する。外面口縁部段に焼成前の陰刻がある。タガはくずれた台形。内面はナナメハケメ、オサエを残す部分あり。	小量の小石粒を含む。内外灰茶褐色、断面は暗い茶褐色。焼けしまり欠く。	1.4	
12	〃	中位以下の破片で、1～10とは異なり、最下段（底部段）の幅が広い。外面はタテハケメを基調とし、タガはくずれた、裾を引くような台形。内面はナナメのナデ、上部はナナメのハケメが認められる。	荒砂を多量に含み、外面は暗～灰褐色、内面は灰褐色を呈し、ザラザラした感触を与える。	1.7	内堀内出土。
13	〃	12を一回り大きくした形態と思われる。底部はゆるく孤を描くような断面をしており、内面が厚く太目の作り。タガの断面も同様で、上下に波を打つような部分がある。	荒砂を多量に含み、内外断面共に茶褐色。	1.4	〃
14	〃	基本的には12と同様の形態で、タガは厚ぼったく鈍い台形。内面はナナメハケメの後、上方部分はタテにナデを加える部分がある。ユビオサエ痕残る部分あり。	小石粒と多量の荒砂を含み内外断面共茶褐色。焼けしまりを欠く。	外2.0 内2.5 1.5（2種）	内堀内出土。
15	円筒　口縁部	口縁部は外方に短かく屈曲し、端面は略平坦、タガは低い台形。内面ナナメハケメ、スカシの上位にユビオサエ痕が残る。円形のスカシは右回りに穿孔。	細砂、小石粒を含み、褐色を呈する。	2.0～2.2	〃
16	〃	口縁部の形態は15と同様。タガはくずれた偏平な台形。内面はナナメハケメ、ユビオサエ痕の残る部分あり。器面の調整は比較的丁寧。	白色の細砂を多量に含む。淡い茶褐色を呈し、焼成良好。	1.6～1.9	〃
17	〃	端部は両端ともわずかに肥厚気味。端面は凹む。外面は左に傾斜するタテハケメ、内面ナナメないしヨコハケメ、ユビオサエ痕残る。	白色の細砂を多量に含む。赤味のある茶褐色。	1.8	〃
18	〃	やや厚手の作り。端面わずかに凹む。内面ヨコハケメ。タガは偏平でくずれた「M」字形。	胎土、色調は16と同様。	1.5～1.9	〃
19	〃	端部内側がヨコナデで凹み気味。タガは偏平でくずれた「M」字形。	細砂多量に含む。外面赤褐色、内面灰茶褐色。	1.7	内堀内出土。
20	〃	端部はゆるく外反するように開き、丸く仕上げる。内面ナナメハケメ。	細砂多量に含む。内外共明るく淡い茶褐色。	1.6	〃
21	〃	タガはくずれた台形で、仕上げに強くヨコナデされている。内面ナナメハケメ、ユビオサエ痕残る。	細砂多量に含む。内外共赤味のある灰色（還元色）。	1.7	〃
22	〃	端部は17と同様。タガは偏平でくずれた台形。内面ナナメハケメ、ユビオサエ痕残る。	細砂多量に含む。外面灰茶褐色、内面灰黄褐色。	1.6～1.8	〃
23	〃	端部はわずかに内反気味、わずかに凹む端面を形成する。タガはごく偏平で、雑な仕上げ。	細砂多量に含む。外面赤褐色、内面は明茶褐色。	1.8～2.2	〃
24	〃	上から2、3段目にスカシが認められる。外面は左に傾くタテハケメ、内面はナナメハケメが認められるが磨滅して不明瞭。タガは偏平でくずれた「M」字形。	細砂を多量に含み、内外共に明るく淡い茶褐色。	1.2	〃
25	〃	仕上げのヨコナデのため、端部は内反気味に開く。外面左傾するタテハケメ、内面ナナメハケメ。	細砂多量に含む。外面淡い茶褐色、内面灰褐色。	外：1.5 内：2.1	〃
26	〃	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ、端面はわずかに凹む。	外面赤褐色、内面明灰茶褐色。	1.5～1.7	内堀内出土。
27	〃	外面タテハケメ、内面ヨコハケメ、接合痕残	細砂を多量に含み、内外共	1.8～1.9	

第3表　出土遺物観察表（2）

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成、等の特徴	ハケメ（10本／cm）	備　　考
		る。端部わずかに凹み、外端は丸い。	明るい灰褐色。		
28	〃	〃	細砂を多量に含み、外面灰黄褐色、内面灰褐色。	1.7	
29	〃	端部の仕上げのヨコナデが強く、内外にわずかにふくれる。外面タテハケメ、内面ヨコ及びナナメハケメ。	白色の細砂を多量に含む。内外共淡い茶褐色。	1.7	内堀内出土。
30	〃	端部は外方につまむようにヨコナデされる。外面タテハケメ、内面はヨコ及びナナメハケメ。	〃	1.6～1.7	〃
31	〃	外面タテハケメ、内面ヨコ及びナナメハケメ。タガは偏平でくずれた「M」字形。	細砂を多量に含み、茶味のある灰色（還元色）。	1.7	〃
32	〃	やや薄い作りで、端部外側は鈍く小さく突出する。外面タテ、内面ヨコ及びナナメハケメ。タガはごく偏平で粗雑な作り。	胎土、色調は29と同様。	1.7～1.9	
33	〃	端部は外方に小さく、わずかに屈曲する。外面左傾するタテハケメ、内面ナナメハケメ。内面やや磨滅。	外面赤褐色、内面灰茶褐色。	1.7	内堀内出土。
34	〃	端部及びハケメは33と略同様。内面にユビオサエ痕あり。タガは偏平でくずれた台形。	細砂多量に含む。外面赤褐色、内面灰褐色。	1.4～1.7	外堀内出土。
35	〃	孤を描くように外反し開く。端面は中央がわずかに凹む。外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。	白色の砂粒を多量に含む。内外共に灰色。	1.4～1.6	内堀内出土。
36	〃	ゆるく外反気味に開く。	細砂含む。内外暗褐色。	1.6～1.8	〃
37	〃	端部は32と略同様。	〃　。内外淡茶褐色。	1.8	
38	〃	端部外側は丸い。外面タテ。内面ヨコハケメ。	〃	1.8	内堀内出土。
39	〃	端部は32と略同様。外面タテ、内面ヨコないしナナメハケメ。	白色の砂粒を多量に含む。外面暗茶褐色、内面灰褐色。	1.6	〃
40	〃	37と同様で同一個体かと思われる。	37と同様。	1.6～1.7	〃
41	〃	端部はわずかに内反気味で、外側は丸い。外面は左傾するタテハケメ、内面ナナメハケメ、ユビオサエ痕を残す。	砂粒を多量に含み、内外共淡い茶褐色。	1.5～2.0	〃
42	〃	端部はごくわずかに外方に屈曲して開く。外面左傾するタテハケメ、内面ナナメハケメ。	砂粒多量に含む。外面赤味のある灰褐色、内面茶褐色	1.8～2.2	
43	〃	端部は30と略同様。	内外共白っぽい茶褐色。	1.7	外堀内出土。
44	〃	わずかに端面を作り出すが、端部は丸味のある鈍い作り、内面に意識されたものか不明だが沈線が１条横走する。	細砂を多量に含み、内外共赤味のある茶褐色。	1.5～1.6	内堀内出土。
45	円筒　体部	外面タテハケメ、内面ナナメにナデ（上部にナナメハケメ）。タガは偏平でくずれた台形。上方のタガの上の段及び間の段にスカシあり。内面に接合痕残る。	荒砂及び径５㎜程の小石粒を含む。外面は茶灰色、内面は暗黄灰色。	1.4～1.7	〃
46	〃	外面わずかに左傾するタテハケメ、内面はナナメハケメで接合痕を残す。タガはごく偏平な「M」字形。	細砂を多量に含む。内外共明褐色、断面灰褐色。	1.6	
47	〃	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ及びナナメのナデ。タガは偏平でくずれた台形。	荒砂を含み、灰色。	1.4	
48	〃	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。タガは偏平だがしっかりした台形。	荒砂多量に含みしまり欠く。外面灰褐色、内面茶灰色。	1.1 3.1	
49	〃	中間の段にスカシあり。外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。	細砂多量に含み、外面灰茶褐色、内面茶灰色。	1.6	内堀内出土。
50	〃	外面左傾するタテハケメ、内面ナナハケメ。	荒砂含み、灰～黄褐色。	1.6	
51	〃	比較的薄手で、タガはごく偏平。内面にユビオサエ痕残る。	外面灰褐色、内面赤茶色。硬質に焼き上がる。	2.0	

第４表　出土遺物観察表（３）

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成、等の特徴	ハケメ（10本／cm）	備　　考
52	〃	タガはごく偏平な「M」字形。内面にユビオサエ痕残る。		2.1	内堀内出土。
53	〃	タガは偏平でくずれた台形。	細砂含み、灰～灰褐色。	1.5	〃
54	〃	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。	外面灰褐色、内面黄褐色。	1.7	外堀内出土。
55	〃	〃	外面黄褐色、内面灰色。	1.6	内堀内出土。
56	〃	〃	細砂含み、明るい茶褐色。	1.8	〃
57	〃	内面にユビオサエ痕わずかに認められる。タガはくずれた台形で、三角形に近い。	砂粒を多量に含み、外面赤灰褐色、内面灰茶褐色。	1.4	
58	〃	タガはごく偏平。	細砂を多量に含み、灰白色。	1.6	外堀内出土。
59	〃	多段凸帯の大形品の破片か。器厚が比較的大きく、タガもしっかりした台形。	荒砂多量に含み、外面褐色内面灰褐色。	1.3	
60	〃	底部に近い部分と思われる。タガはごく偏平な台形。	細砂含み、灰～灰褐色。	1.4	外堀内出土。
61	〃	タガはやや幅広で偏平な「M」字形。		1.7	内堀内出土。
62	〃	タガは偏平で粗雑な作り。	灰色（還元色）で堅緻。	1.6	〃
63	〃	タガはややくずれた台形。内面にユビオサエ痕残る。	内外灰白色。	1.4	〃
64	〃	タガは60と同様。		1.6	〃
65	〃	タガは50と同様。内面にユビオサエ痕残る。	砂粒を含み、内外茶褐色。	〃	外堀内出土。
66	〃	薄い作りで、タガはごく偏平。	灰褐色。	1.8	内堀内出土。
67	〃	タガはくずれた台形。内面にユビオサエ痕残る。	内外灰褐色、断面灰色。	1.7	〃
68	〃	〃	内外黄～灰褐色、断面灰色。	1.6	〃
69	〃	タガは幅が狭く、上辺がわずかに凹む台形。	茶～赤味のある灰色。	〃	〃
70	〃	タガは偏平でくずれた「M」字形。	砂粒を多く含む。灰白色。	〃	〃
71	〃	タガはごく偏平でくずれた「M」字形。	〃　茶褐色。	1.7	〃
72	〃	タガは67と同様。	内外共に灰色（還元色）。	1.5	
73	〃	内面ナナメナデ。タガは偏平でくずれた「M」字形。	内外灰褐色、断面灰色。	1.4	内堀内出土。
74	〃	内面ナナメハケメ。タガは角が丸味を持つ。	砂粒を含み、内外茶褐色。	1.4	内堀内出土。
75	〃	〃　、接合痕残す。タガはごく偏平。	〃	〃	外堀内出土。
76	円筒　底部	1と同形態のものの底部と思われる。外面はタガを挟み横に連続するようなタテハケメが認められる。内面はナナメにナデ。タガは偏平でくずれた「M」字形で部分的に指でおさえられ潰れている。	細砂を多量に含み、外面は灰色（還元色）、内面は茶味のある灰色。	1.3	内堀内出土。
77	〃	基部は一様に肥厚する。内面に接合痕残る。	内外灰白色、断面暗灰色。	1.5	〃
78	〃	基部内面は膨らむように肥厚し、ヨコハケメが認められる。底面に棒状の圧痕あり。	やや赤味のある灰褐色で、還元気味に焼成される。	1.4	〃
79	〃	外面は内湾するように、内面は裾が広がるように肥厚する。底面に棒状の圧痕あり、外面最下部はタテハケメに先行するヨコハケメが認められる。	内外明茶灰色、断面黒灰色。外面磨滅する。	1.6	〃
80	〃	外面タテハケメ、内面ナデ。	内外明灰褐色、断面灰色。	〃	〃
81	〃	〃　、内面ナナメハケメ、ユビオサエ痕を残し、底面に棒状の圧痕残る。	細砂多量に含み、黄灰褐色を呈す。	2.1	〃
82	〃	外面タテ、内面ナナメハケメ。底面に棒状の圧痕。	外面灰褐色、内面茶灰色。	1.6	〃

第５表　出土遺物観察表（４）

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成、等の特徴	ハケメ（10本／cm）	備　　考
83	〃	タガはやや低い位置にあり偏平でくずれた「M」字形。基部はやや肥厚する。	赤味のある灰色(還元色)。	〃	内堀内出土。
84	〃	基部はやや外反気味。内面ナナメハケメ及びナデ。	外面灰褐色、断面灰色。	〃	〃
85	〃	内面最下部は鈍く突出する。内面ナナメハケメ。	内外黄灰色、断面灰色。	1.5	〃
86	〃	基部はやや外反気味。内面ナナメのナデ。	内外灰褐色、　〃　。	〃	〃
87	〃	内面は裾が広がるように肥厚する。内面ナナメハケナ。	硬質で茶味のある灰色。	2.4	〃
88	〃	タガはごく偏平な台形。内面ナナメハケメ及びナデ。	茶味のある灰色。	1.4	〃
89	円筒埴輪	外面がやや肥厚する基部から、口縁部にかけ略直線的に開く。端部にかけてはゆるく外反気味で、端面はごくわずかに凹む。最下段の幅がタガ間部分の幅より広く、2、3段目に互い直角に、対称位置に円形のスカシが穿孔される。 タガはややくずれを見せる台形。外面タテハケメ、内面はナナメハケメを主体とし口縁付近ではヨコハケメ、部分的にタテ方向に軽いナデを施し、接合痕を各所に残す。底面に棒状の圧痕残す。	荒砂を多量に含み、茶褐色を呈し、比較的均質に良好に焼成されている。	〃	口縁部は欠損部分が多い。 以下、186までは後円部調査区出土だが、調査区は全て内堀内。
90	円筒埴輪体～口縁部	ゆるく内反気味の体部で、口縁部は外方に屈曲し開く。 端面はわずかにふくらみを持つ。上から2、3段目に対称位置、直角方向に円形のスカシを有す。外面タテハケメ、内面は不明瞭なナナメハケメ、部分的にユビオサエ痕を残す。タガはくずれた台形。	荒砂を多量に含み、内外共黄色味のある褐色、断面は茶灰色。焼けしまりを欠き内外磨滅する部分が目立つ。	1.7	
91	〃	端部は外方に短かく屈曲し、端面は丸味を持つ。外面タテハケメ、内面ナナメハケメ、ユビオサエ痕を残す。タガはくずれた台形。	小石粒を多量に含み、茶褐色。	1.7～1.8	
92	〃	端部は外方に短かく屈曲し、端面は平坦。外面タテハケメ、内面ナナハケメで、ユビオサエ痕が残る。 タガは下方がつぶれた台形。	荒砂、小石粒含み、褐色。	1.5～1.8	
93	〃	〃	荒砂、小石粒を多量に含み部分的に茶味のある灰色。	1.4	
94	〃	端部は外方に屈曲し、端面は磨滅して丸味を帯びる。タガはくずれた台形。内面にユビオサエ痕残る。	荒砂を多量に含み、黄褐色しまりを欠きもろい。	1.7～1.9	
95	円筒　口縁部	外面左傾するタテハケメ、内面ナナメないしヨコハケメ。突面は平坦。タガは偏平な台形。	砂粒を多量に含み、茶褐色。	1.6	
96	〃	端部はわずかに外方に屈曲気味で、端面内側はやや突出気味。	細砂を多量に含み、部分的に赤味のある灰褐色。	1.7	
97	〃	端部は外反気味で、端面は平坦。	荒砂を多く含み、明褐色。	1.5～1.6	
98	〃	内面端部直下はヨコナデのためわずかに凹む。	細砂多く含み、暗茶褐色。	1.6～1.9	
99	〃	端面は平担で、両端はわずかに丸味を持っている。	小石粒を含み、暗褐色。	1.6～1.7	
100	〃	〃	細砂を多く含み、明褐色。	1.8	
101	〃	〃	〃	1.5～1.6	
102	〃	〃	小石粒を含み、赤褐色。	1.3～1.4	
103	〃	〃	細砂を多く含み、淡茶褐色。	1.5	
104	〃	端部直下は薄い作り。端面はわずかにふくらむ。	細砂、小石粒含み、褐色。	〃	

第6表　出土遺物観察表（5）

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成、等の特徴	ハケメ（10本／cm）	備　　考
105	〃	端部は外方に屈曲して開き端面に平担。内面ナナメハケメで斜走する沈線あり。	砂粒を多く含み、明茶褐色。	1.8	
106	〃	端面は両端が丸く、中央がわずかに溝状に凹む。	細砂を多量に含み、褐色。	1.6、3.3	
107	〃	端面はわずかに凹み、両端は丸い。	小石粒を含み、暗茶褐色。	1.7	
108	〃	〃	〃　暗褐色。	1.3～1.5	
109	〃	端面はわずかにふくらみがある。	外面明褐色、内面灰色。	〃	
110	〃	〃	小石粒を含み、明茶褐色。	1.3	
111	〃	外反気味に開き、端面はわずかに凹む。厚手の作り。	細砂を含み、褐色。	1.7～1.9	
112	朝顔形円筒口縁部	外面タテハケメ、内面ヨコハケメ。タガは偏平でくずれた「M」字形。器厚が大きく、大型品であろう。	砂粒、小石粒を含み、内外茶褐色、断面暗褐色。	2.0	
113	円筒　体部	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ、ユビオサエ痕を残す。タガは下方がくずれて低い台形で三角形に近い部分もある。円形のスカシ有り。	荒砂を含み、淡い灰褐色。	1.7～1.8	
114	〃	外面タテハケメ、内面は上位がナナメハケメ、下位ナナメのナデ。タガは裾広がりの台形。	荒砂、小石粒を多量に含み褐色を呈する。	1.5～1.8	
115	〃	外面タテハケメ、内面は上部にナナメハケメが認められる他、ナナメにナデ。タガはくずれた台形。	荒砂を多量に含み、褐色。	1.6	
116	〃	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ及びナデ。タガは鈍さはあるが、幅が広く、しっかりとした「M」字形。タガ直下に方形と思われるスカシあり。	内外明灰褐色、断面は黄灰色。荒砂、小石粒を含み焼成堅緻。	1.3	
117	〃	外面タテハケメ、内面ナナメにナデ。タガは三角形。	荒砂、小石粒含み、明褐色。	2.0	
118	〃	外面左傾するタテハケメ、内面ナナメハケメ。タガは偏平でくずれた「M」字形。	荒砂を多量に含み、しまりを欠く、濃い茶褐色。	2.1	
119	〃	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガはくずれた台形。	荒砂含む。赤味のある灰色。	2.0	
120	〃	外面タテハケメ、内面は不明瞭だがハケメあり、タガはごく偏平。	荒砂を含み、しまりを欠く。明灰褐色。	1.8	
121	〃	外面左傾するタテハケメ、内面ナデ。タガはごく偏平な台形。	荒砂、小石粒を含み、灰褐色。	1.6	
122	〃	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガはくずれた台形。	荒砂多く含み、茶褐色。	1.5～1.9	
123	〃	〃	荒砂を含み、濃い茶褐色。	1.6～1.8	
124	〃	〃	明茶褐色。しまりを欠く。	1.5～1.7	
125	〃	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガはごく偏平。	淡い灰褐色。	1.9	
126	〃	口縁部に近い部分の破片。外面タテ、内面ナナメハケメ。タガは台形と三角形の中間的な形態。外面磨滅。	荒砂と小石粒を含み、もろい。内外明茶褐色。	2.0	
127	〃	内面ナナメハケメ、粗雑な成形。タガはやや幅広で上辺がわずかに凹む台形。	荒砂、小石粒を含み、明るい茶褐色。	2.1～2.3	
128	〃	内面ユビオサエ痕残る。タガは丸味のある台形。	砂粒を含み、茶褐色。	1.9	
129	〃	タガは127と同様。	荒砂、小石粒含み、灰褐色。	1.9～2.1	
130	〃	スカシは内側をナデにより面取り。タガは偏平な台形。	砂粒を含み、淡赤灰色。	1.8、2.3	

第7表　出土遺物観察表（6）

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎、色調、焼成、等土の特徴	ハケメ（10本／cm）	備　　考
131	〃	スカシ内面はナデて仕上げる。タガはくずれた台形。	荒砂を含み、淡茶灰色。	1.9、2.4	
132	〃	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガはごく偏平。	濃い茶褐色。	2.0	
133	〃	内面ナナメハケメ。タガは偏平でくずれた台形。	荒砂含む。淡い茶褐色。	1.5～1.7	
134	〃	内面ナナメのナデ。　〃	〃　。茶褐色。	1.7	
135	〃	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガはごく偏平。	砂粒含み、淡い茶灰色。	1.7	
136	〃	薄い作りでタガは偏平な台形。	砂粒含み、淡い赤褐色。	1.4	
137	〃	内面タテのナデ及びナナメハケメ。	荒砂、小石粒含み、褐色。	1.5	
138	〃	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガは偏平な台形。	灰色味のある茶褐色。	1.6～1.7	
139	〃	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガは台形がくずれて三角形との中間的な形態。スカシ内側はナデで面取。	荒砂を含み、淡茶褐色（還元色）。	1.7	
140	〃	外面タテ、内面ナナメハケメ及びタテのナデ。	荒砂含み、黄褐色。	2.0、2.7	
141	〃	外面タテ、内面ナデ及びナナメハケメ。	荒砂多量に含み、茶褐色。	1.5	
142	〃	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガはくずれた台形。	荒砂含み、灰色（還元色）。	〃	
143	〃	〃	〃　、明褐色。	〃	
144	〃	〃	〃　、明茶褐色。	1.9	
145	〃	外面タテ、内面ヨコハケメ。タガは偏平な「M」字形。	細砂含み、灰褐色。	1.8～2.0	
146	〃	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガは偏平な台形。	荒砂含み、明灰褐色。	1.4	
147	〃	〃	〃　、淡赤褐色。	2.0、3.1	
148	〃	やや厚手。タガはくずれを見せる台形。	荒砂、小石粒含み、明褐色。	1.7	
149	〃	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガは偏平な台形。	灰茶褐色。	1.6～1.8	
150	〃	〃	荒砂含み、濃い茶褐色。	1.4	
151	〃	〃	〃　、茶褐色。	1.5～1.7	
152	〃	〃	茶味のある灰色。	1.5～1.8	
153	〃	外面タテ、内面ナナメハケメ、ユビオサエ痕残る。タガはくずれて、台形と三角形の中間的な形態。	荒砂含み、淡茶灰色。	1.5	
154	〃	外面タテ、内面ナナメハケメ、ユビオサエ痕残る。	荒砂含み、茶褐色。	1.6	
155	〃	タガは偏平でくずれた台形。	〃	1.6～1.7	
156	〃	外面は浅いタテハケメ、内面ナデ。タガはしっかりとした「M」字形。	荒砂を含み、黄色味を帯びた白色。		
157	〃	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガはくずれた台形。	荒砂含み、外面は淡黄褐色内面は淡茶灰色。	1.8	
158	〃	内面タテにナデ。タガは偏平な台形。	砂粒含み、茶褐色。	〃	
159	〃	156と同一個体かと思われる。タガは幅広で上辺がわずかに凹む台形で、しっかりとした作り。	156と同様		
160	〃	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガは偏平な台形。	砂粒多く含み、淡黄灰色。	1.9、2.5	

第8表　出土遺物観察表（7）

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成、等の特徴	ハケメ（10本／cm）	備考
161	〃	外面タテ、内面ヨコハケメ。タガはくずれた台形。	〃　、灰茶褐色。	1.4	
162	〃	内面ナナメハケメ及びタテのナデ。	砂粒多く含み、茶褐色。	1.6	
163	〃	内面ナナメハケメ及びナデ。タガはくずれた台形。	茶褐色。	1.4	
164	〃	タガはくずれて、台形と三角形の中間的形態。	外面灰褐色、内面茶褐色。	1.3～1.5	
165	〃	内面ナナメハケメ。タガは偏平な台形。	砂粒多量に含み、黄褐色。	1.5～1.8	
166	円筒　底部	内湾気味に立上がる。外面タテ、内面ナナメハケメ。	〃　　、明褐色。	1.4～1.8	
167	〃	外面タテハケメ、内面タテのナデ。	〃　　、褐色。	2.0、2.8	
168	〃	基部は肥厚し、底面に棒状の圧痕。内面ナナメハケメ及びナデ。	白石の砂粒を多量に含み、内外灰色（還元色）。	1.7	
169	〃	内面最下部は鈍く突出する。内面ナナメのナデ。	砂粒、小石粒含み、茶褐色。	〃	
170	〃	薄手の作りで、内面ナナメ及びヨコハケメ。	白色の荒砂含み、灰色。	〃	
171	〃	底面に棒状の圧痕顕著。	〃　　、灰褐色。	〃	
172	〃	基部は一様に肥厚する。内面ナナメのナデ。	明褐色。	〃	
173	〃	裾が広がるように肥厚する。内面ナナメハケメ。	白色の砂粒含み、茶褐色。	2.1	
174	〃	最下部は器厚を減じる。内面タテのナデ。タガはごく偏平な「M」字形。	荒砂、小石粒含み、灰色味のある褐色。	2.0	
175	〃	外面最下部は裾広がりに肥厚。内面ナナメのナデ。	荒砂多く含み、淡灰褐色。	1.7	
176	〃	最下部上方が肥厚。内面ナナメハケメ及びナデ。	黄灰色を呈し、堅緻。	1.6	
177	〃	外面タテ、内面ナナメハケメ。底面に棒状の圧痕。	黄灰色。	0.9	
178	〃	最下部は外方に小さく突出気味。内面タテにナデ。	小石粒を小量含み、茶褐色。	1.7	
179	〃	外面最下部は鈍く外方に突出する。内面は最下部がヨコにナデ。以上の部分はナナメハケメ及びナデ。	荒砂多量に含み、茶褐色。	1.5	
180	〃	内面最下部は三角形に突出する。内面はナナメ及びヨコにナデ。	荒砂、小石粒を多量に含む。しまりを欠き、褐色。	1.9	
181	〃	外面最下位に粗いヨコハケメが認められる。内面はナナメにナデ。	淡い黄褐色。	2.0	
182	〃	最下部内外共外方に小さく突出する。内面はナデ。	砂粒多量に含み、褐色。	1.6	
183	〃	基部は一様に肥厚。内面ナナメにナデ。	〃	1.5	
184	〃	内面はナナメのナデ。	外面黄灰色、内面灰色。	〃	
185	〃	外面最下部は小さく外方に突出。内面はナナメのナデ。底面に棒状の圧痕あり。	砂粒、小石粒含み、淡褐色。		
186	〃	内面最下位は三角形に突出する。内面はナナメにナデ。底面に棒状の圧痕あり。	荒砂多量に含む。しまりを欠き、褐色。	1.8	
187～189	大刀形埴輪	いずれも勾金の部分で、187には三輪玉が2個接合した。他にも4個所脱落痕がある。188、189も勾金の柄頭側の先端部分で、188の突起状の部分に三輪玉を表現したものと思われるが、かなり退化した表現である。	187は暗茶褐色を呈し、もろい。188は黄褐色で小石粒を含む。189は灰褐色。	——	図示したものは全て後円部東側調査区出土。
190・191	蓋形埴輪	笠頂部に付けられる飾の部分の破片。190は付根付近で、外方部分にハケメが認められる。	190、191共同様で、荒砂、小石粒を含み、ややもろく	——	〃

第9表　出土遺物観察表（8）

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成、等の特徴	ハケメ（10本／cm）	備　　考
		191は飾りの先端部分と思われる。	明褐色。		
192	形象埴輪	大刀の柄頭かと思われる。	187と同様。	――	
193 ～ 200	須恵器	いずれも甕の体部破片で、200はやや小型品かと思われる。200は釉が付着して判然としないが、外面はいずれも平行タタキメ、内面は同心円タタキメが残る。	いずれも荒砂を少量含み、内外青灰～灰色を呈するが、断面セピア色となるもの（196、197、200）もある。200がやや焼けしまりを欠く他はいずれも堅緻。	――	193～195、197、198、200は後円部東調査区出土。

第10表　出土遺物観察表（9）

V まとめ

愛宕山古墳の前方部南側、後円部東側、両調査区での成果は前章に述べたとおりである。本章ではこれを総括し、若干の考察を加えるとともに、今後の課題についても述べ、まとめとしたい。

周堀について

調査の主な目的は、周堀の具体的な状況を明らかにすることにあったが、前方部南側調査区では、周堀が二重であることが確認され、さらに後円部東側調査区では、隣接して行田市遺跡調査会が実施した市道域の調査成果(註1)と併せ考えると、それが長方形の平面形態を有するものであることが判明した。各部分の概要は以下のとおりである。

内堀は前方部前面の比較的遺存の良好な部分の堀底で幅約六・二㍍、検出面で約七・六㍍である。東南コーナー東側面部は立上りが破損しているが、ほぼ同様な数値が予想される。後円部東側調査区では墳丘側立上り部分の遺存は良くないが、中堤と後円部との最も幅の狭くなる堀底部分の幅は約五㍍となろう。

墳丘主軸長を確認するため、後円部背後に設定したトレンチ内でも内堀の立上りは、後世の溝により破壊されているものと思われ、確認されなかったが墳丘主軸長五三㍍という数値はさほどの変更は要さないと思われる。

中堤の幅は前方部南側調査区内の前方部前面基部で約六・七㍍、検出面で五・六㍍で、東側面部では基部で五・一～六・二㍍、検出面で四・〇～四・八㍍であった。

外堀は、前方部南側調査区の東側面部分では、古い時期の溝を壊して開削され、幅は全体で正確に把握できなかったが、調査区中央部の断面観察では、堀底で約一・九㍍、検出面で約三・二㍍であり、前方部前面部分では、調査区内で外方立上りが明確に検出できず、側面部より広くなる可能性がある。

不確定要素もあるが、以上の数値から、周堀の全長（主軸長）は八十数㍍と推定され、また、深さについては、遺構検出面から、内堀で五〇～七〇㌢、外堀では四五～七〇㌢の範囲にあり、標高は一六・九～一七・〇㍍の範囲内の部分が多く、珪藻分析の結果からは、開削当初、水をわずかに湛えるような湿地的環境にあったことが予想されるものであった。

埼玉古墳群の前方後円墳については、稲荷山古墳(註2)、二子山古墳(註3)、鉄砲山古墳(註4)が長方形の二重周堀を有することが判明、又はほぼ確実視されているところである。かつて、埼玉古墳群中の小型前方後円墳は盾形の周堀を有するものという想定がなされ(註5)、愛宕山古墳の周堀もそうした形態と考えられていたが、今回の調査により長方形かつ二重周堀であることが明らかとなって、他の小形前方後円墳の周堀の形態の推定にも再考を迫るものである。

さて、こうした前方後円墳で長方形周堀を有する例としては、千葉県芝山町殿塚古墳(註6)が最初の調査例であり、その希少性に注目した市毛勲氏による考察(註7)があるが、確実な例としては、千葉、埼玉両県で発見されているのみであり、推定を含めても全国で十例前後であることは別に述べたところである(註8)。前方後円墳の長方形周堀については類例も少なく、その系譜等について議論できる現状ではないが、後期古墳群としては、大規模な前方後円墳が群集するという点で全国的にみても異色な古墳群である埼玉古墳群のその前方後円

墳の多くに、採用されているという点で、その形態に政治的意義が付加されている可能性も考えられるのである。

その他の遺構について

両調査区で発見された、周堀以外の遺構は、溝、井戸、土壙があったが、この中で、周堀の開削以前と判断されるものに溝、SD005があったが、覆土の状況から、開削時にはすでに埋没していたものであるが、その性格は不明である。

この他、開削時と極めて近い時期と判断されるSD001～003の3基の溝がある。前方部前面の周堀底の墳丘寄り、及び中堤寄りで発見された小規模なものであるが、覆土は周堀のそれと全く同じであり、周堀の埋没が始まるときにはすでに存在したものである。こうした溝は鉄砲山古墳の後円部東側部分の調査でも内堀底の中央や、墳丘際からも発見されており、(註9)その走行方向から周堀の開削と何らかの係りを有する可能性を有するものである。

埴輪について

出土した遺物のうち、最も多かったのは埴輪片であり、とりわけ、その大部分は円筒埴輪であった。

出土状況をみると、前方部南側調査区では内堀内からが多く、特に南部のコーナー付近では中堤寄りの出土が目立った。後円部東側調査区では、調査区東壁寄りでの出土が目立ったが、こうした状況は隣接する行田市遺跡調査会の発掘調査区内での遺構のありかたから、中堤上に樹立されていたものが破損、転落したことが明らかであった。

円筒埴輪はいずれも破片となって出土したが、その中で完形又は全体の様子がわかる程度に復元できたものも数個体あった。これらについてはA～C類の、概略三形式に分類したが、A、B類は三本凸帯の四段構成で、C類は全容は不明だが、多段構成の大型品と思われるものであった。

円筒埴輪の全体的な特徴としては、外面の調整は全てタテハケメであり、ヨコハケメの施されたものは見当らない。底部には押圧、ケズリ等を施されるものはなく、底面には禾本科植物の茎と思われる棒状の圧痕のあるものが多かった。焼成については、認めうる限りでは、明確な黒斑を有するものはなく、登窯により焼成されていると思われ、中には還元色を呈するものもあった。スカシについては、A、B類は基本的に円形だが、その穿孔のしかたの粗雑さゆえに、楕円形等にくずれをみせるものもある。これに対し、C類は出土点数自体極めて少ないが、方形のスカシが認められるものがあった。

タガはA類に偏平な「M」字形を呈するもの（A_1類）と偏平な台形を呈するもの（A_2類）とがあり、B類はいずれも偏平な台形であり、C類はややくずれを見せるが、A、B類と比較すると幅が広目で、高さもやや高い台形である。

以上のように、円筒埴輪については川西編年(註10)V期に該当するものである。主体となるA、B類は三本凸帯の四段構成であり、埼玉古墳群中では同様の形態のものは現在のところ確実な発見例がない。周辺地区の古墳では、熊谷市鎧塚古墳(註11)、女塚一号墳(註12)から、A類に類する円筒埴輪が出土している。鎧塚古墳の三本凸帯四段構成品は器高、口縁・底径等、A類に近い数値を有するが、女塚一号墳のものはこれよりも一回り大型のものである。愛宕山古墳のものと比較すると、タガはあまりくずれを見せず、比較的突出度のある台形を呈し、スカシについても半円形のものを散見し、先行する要素が強いものである。鎧塚古墳及び女塚一号墳の築造年代については、共伴する須恵器、及び土師器から、両者共五世紀末から六世紀初頭頃と考えられる。

また、吹上町袋・台遺跡一号墳[註13]からはB類より小型で、タガが偏平な「M」字形という相異があるが、B類と同様のプロポーションと思われる円筒埴輪が出土している。袋・台遺跡一号墳は共伴する土師器から六世紀前半と考えられるものである。

C類については出土点数は極めて少ないが、方形のスカシを有する、多段凸帯の大形品と思われ、埼玉古墳群中では二子山古墳[註14]の出土品の中に、タガ、スカシの形状の酷似するものがある。二子山古墳は六世紀第二4半期を前後する頃の築造と考えられる。

愛宕山古墳の円筒埴輪の年代は以上、決して十分とはいえないが、周辺の古墳及び埼玉古墳群内の古墳出土品との検討により、六世紀前～中葉頃の所産と考えておきたい。本古墳の円筒埴輪については、二時期の所産と考える向きもあるが[註15]、詳細な年代的位置付けとともに、類例の増加を待って検討してゆきたい。

円筒埴輪に比較すると、量的に非常に少なかったが、形象埴輪で種別の判明したものがあった。器財形埴輪では、蓋、大刀、が確認できた。蓋形埴輪については、かなり退化した形態と思われるが、関東地方では群馬県赤堀茶臼山古墳[註16]や県内の鴻巣市生出塚遺跡[註17]からの出土が知られている位であり、非常に希なものである。この他、盾形と思われる破片があり、器財埴輪以外では家形埴輪や動物形埴輪も発見された。

埴輪の器種別の出土状況を検討すると、円筒埴輪についてはA類が前方部南側調査区で多数を占め、後円部東側調査区ではB類が大部分であった。形象埴輪についても多くは後円部東側調査区からの出土である。出土した埴輪は多く中堤上に樹立されていたと思われるものであったが、中堤上に樹立痕は残されていなかったものの、前方部寄りの部分にはA類の円筒埴輪が、後円部寄りの部分にはB類及び形象埴輪が主体となっていたことを予想させる。

以上のように、今回の調査で愛宕山古墳の周堀の形態と埴輪について新たな知見が得られ、その内容は極めて重要な内容を含むものであった。愛宕山古墳の築造年代については、東方に隣接して所在する古墳群中の盟主墳である二子山古墳と相前後する時期が推定されるが、当時の古墳群の最高首長と思われる二子山古墳の被葬者の従属的位置にある者の墳墓としての位置付けが許されるであろう。

（杉崎　茂樹）

註1　『埼玉県埋蔵文化財調査年報　昭和五六年度』　埼玉県教育委員会　昭和五八年三月
註2　柳田敏司、他　『埼玉稲荷山古墳』　埼玉県教育委員会　昭和五五年一一月
註3　栗原文蔵、他　「天王山・梅塚古墳他周堀発掘調査概要」『資料館報No.6』県立さきたま資料館　昭和五〇年
註4　杉崎茂樹、他　『鉄砲山古墳』　埼玉県教育委員会　昭和六〇年三月
註5　註2文献第5図、古墳群模式図
註6　滝口宏、他　『はにわ』　日本経済新聞社　昭和三八年七月
註7　市毛勲「前方後円墳における長方形周溝について」『古代学研究　第七一号』古代学研究会　昭和四九年三月
註8　註4に同じ
註9　〃
註10　川西宏幸　「円筒埴輪総論」　『考古学雑誌　第六四巻　第二号』　日本考古学会　昭和五三年九月
註11　寺社下博　『鎧塚古墳』　熊谷市教育委員会　昭和五六年三月
註12　寺社下博　『女塚』　熊谷市教育委員会　昭和五八年三月
註13　田部井功、他　『袋・台遺跡』　吹上町教育委員会　昭和五七年三月
註14　杉崎茂樹　「二子山古墳の埴輪および須恵器」　『資料館報No.14』　県立さきたま資料館　昭和五八年九月
註15　若松良一　「同一古墳における円筒埴輪の多様性の分析」『法政考古学　第七集』法政考古学会　昭和五七年三月
註16　後藤守一　『上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳』　帝室博物館　昭和八年三月
註17　第一五号、二〇号埴輪窯跡から出土例がある。鴻巣市教育委員会山崎武氏御教示。

図

版

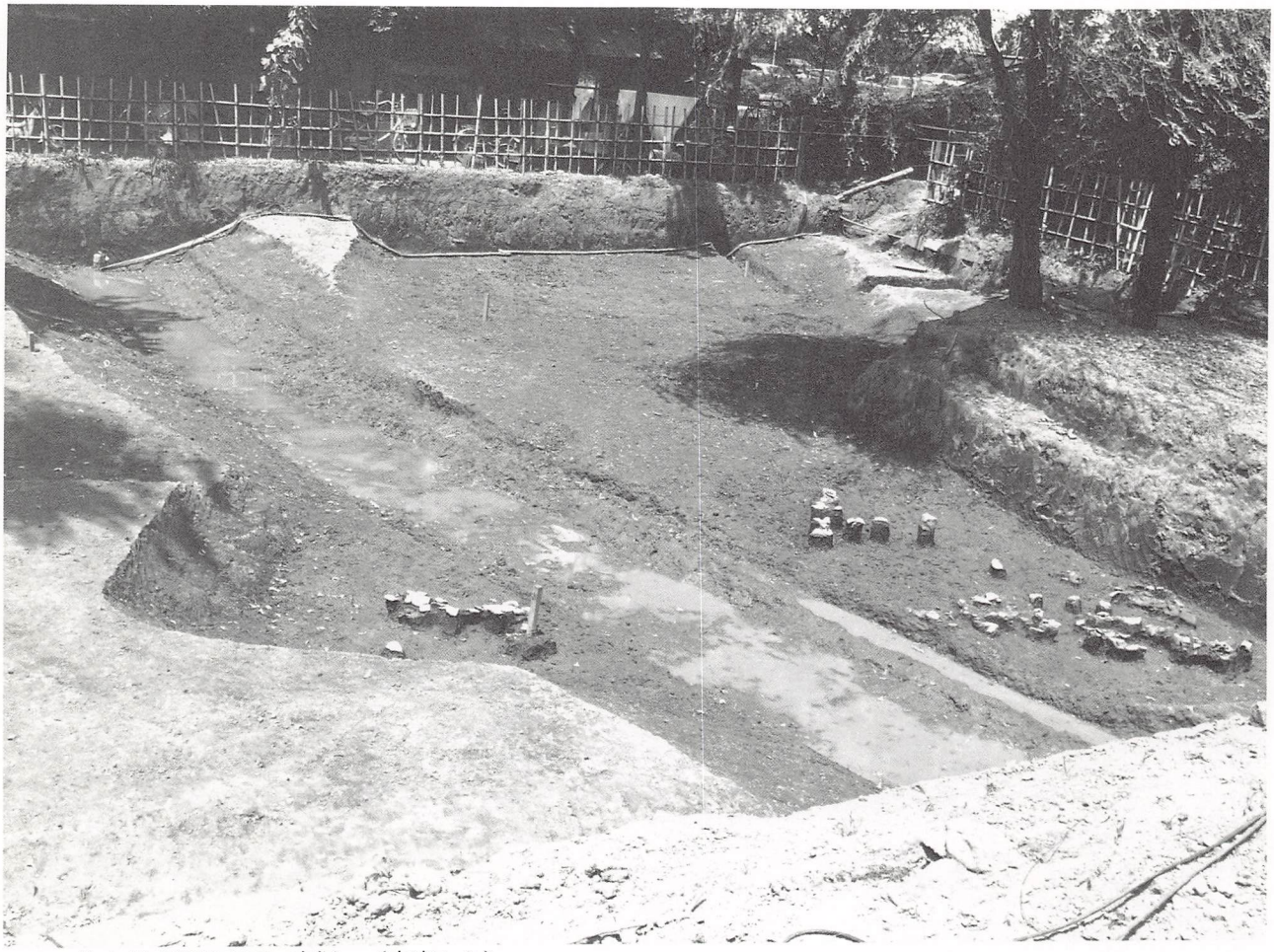
図版一

愛宕山古墳の埼玉古墳群内の位置　（昭和57年３月撮影）

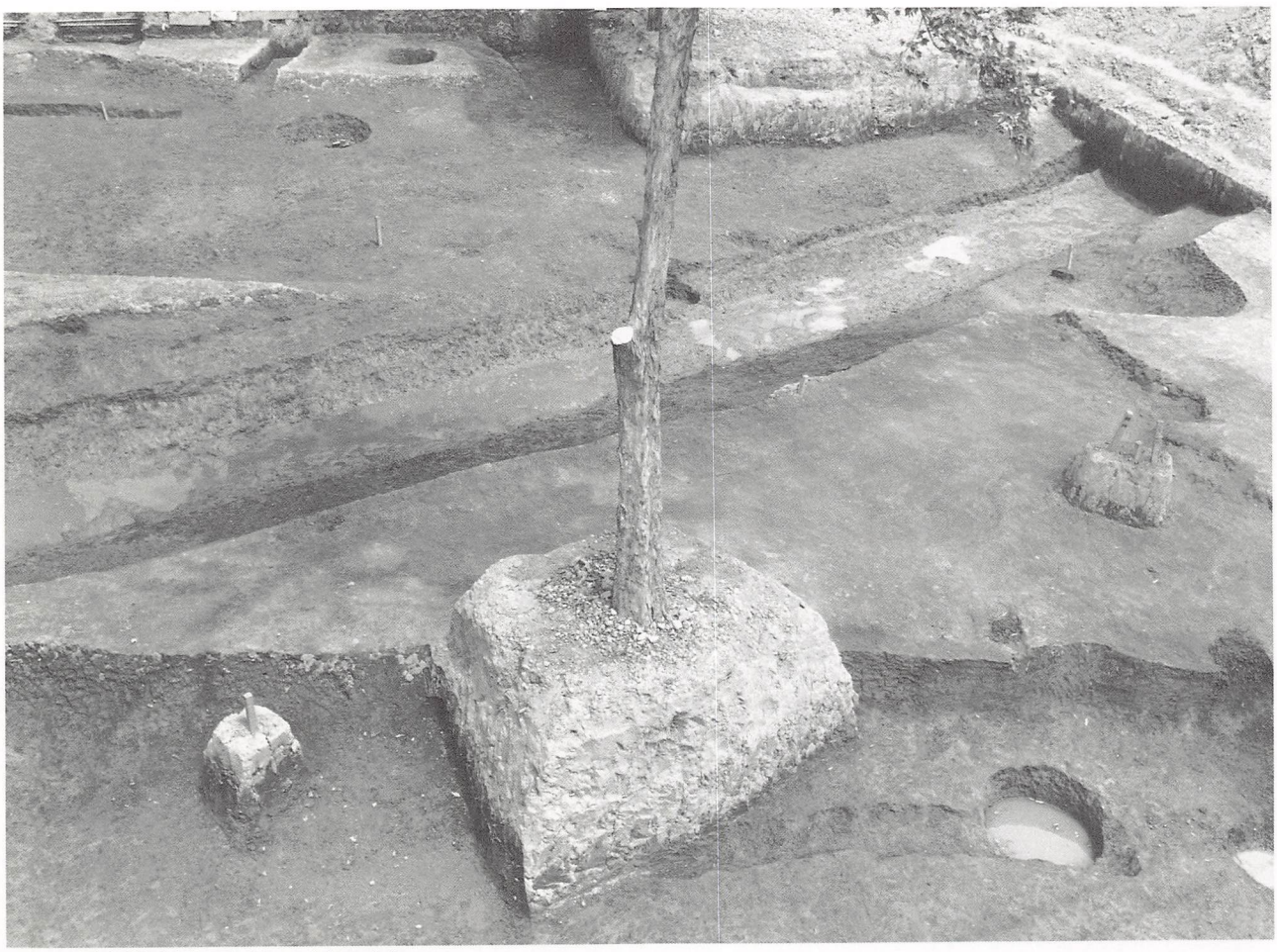
1　愛宕山古墳近景　（北西から）

2　南方部南側調査区内堀及び中堤　（南から）

図版三



1　前方部南側調査区　内堀　（南東から）



2　同上調査区　中堤　（南から）

図版四

1　前方部南側調査区
　外　堀（南西から）

2　同　上　（東から）

図版五

1　前方部南側調査区遺物出土状況（内堀内）

2　同　　上

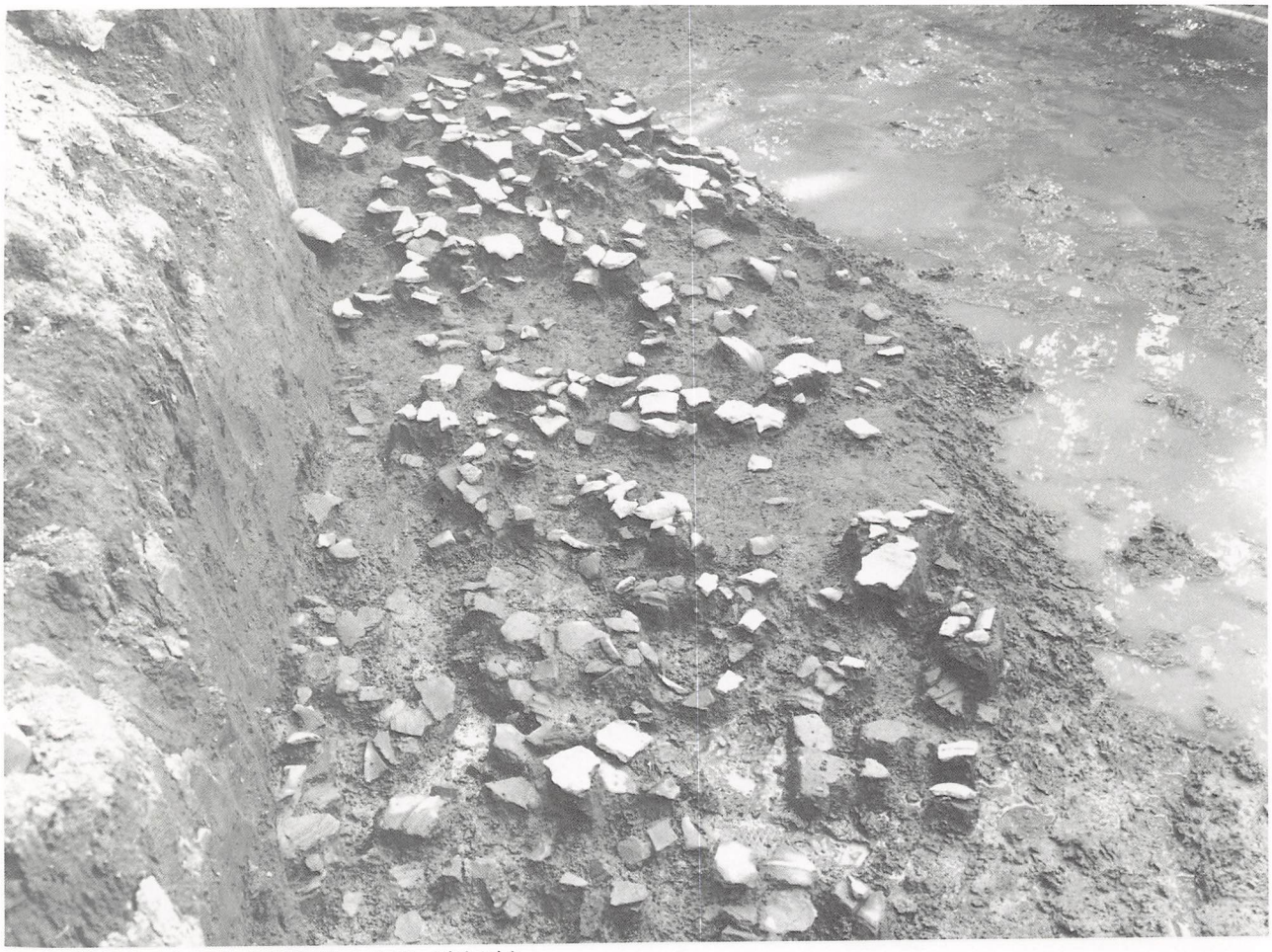
1　前方部南側調査区遺物出土状況（内堀内）

2　同　　上

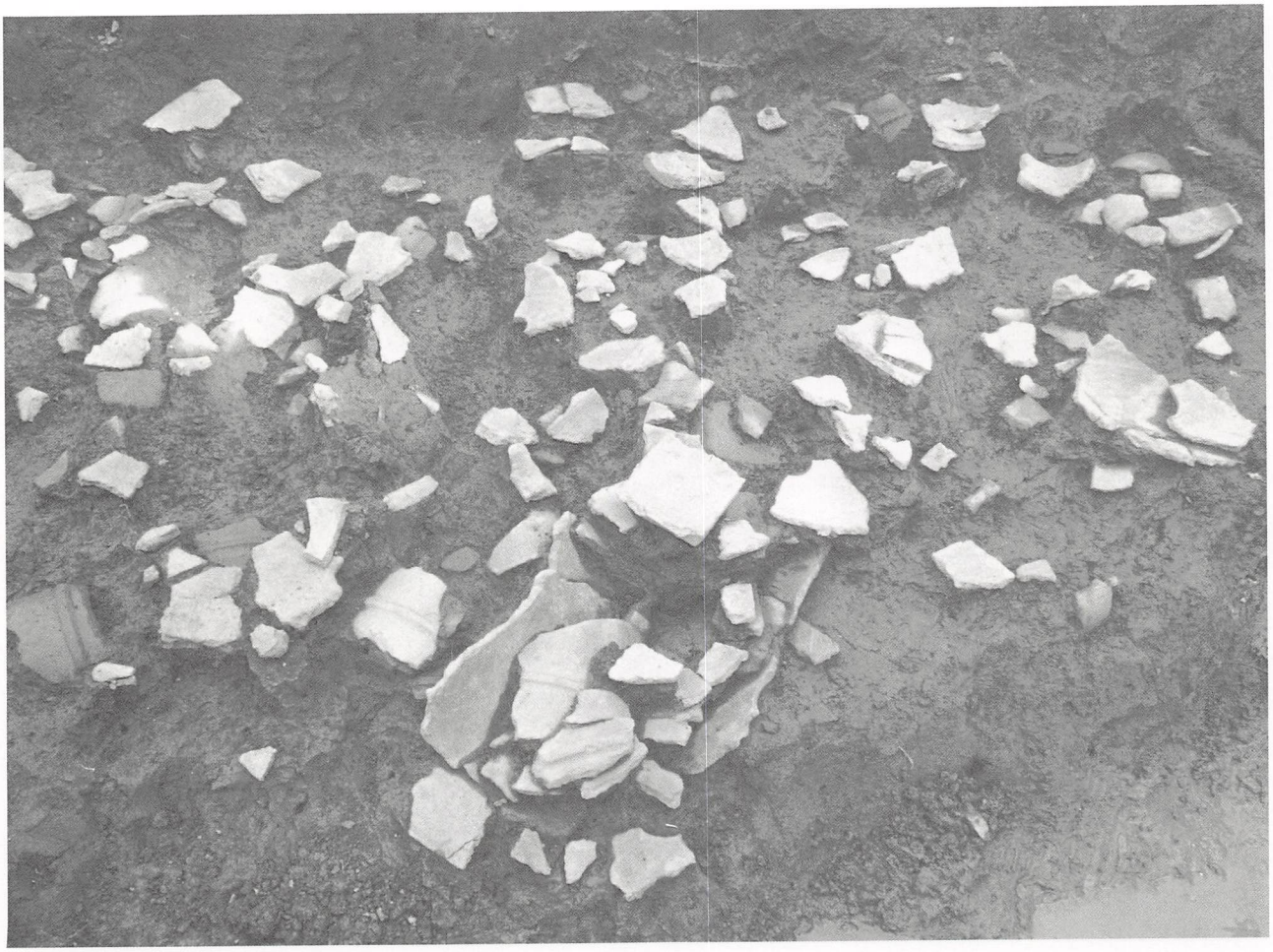
1　前方部南側調査区遺物出土状況（内堀内）

2　後円部東側調査区　全景（内堀）

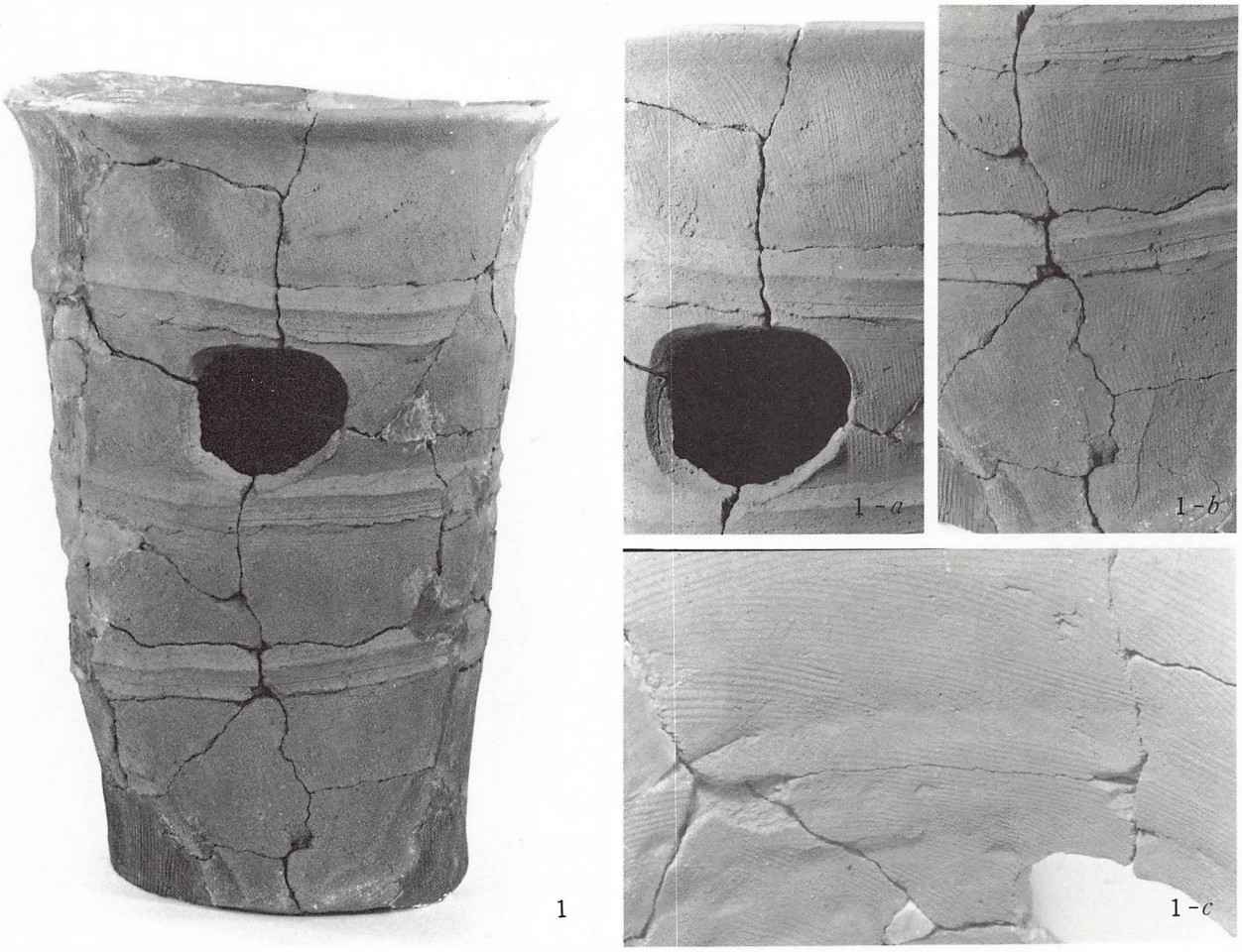
図版八



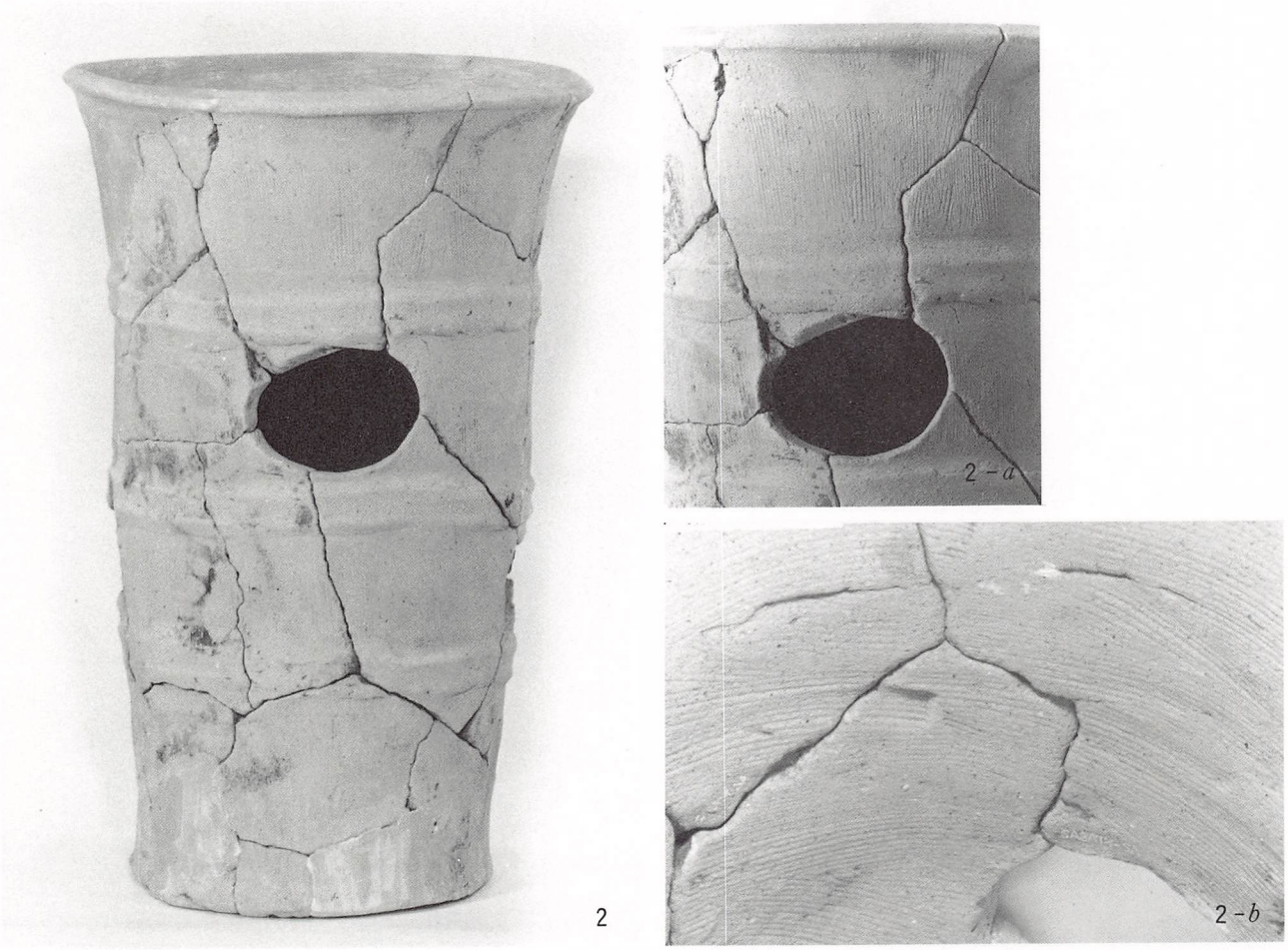
1　後円部東側調査区遺物出土状況（内堀内）



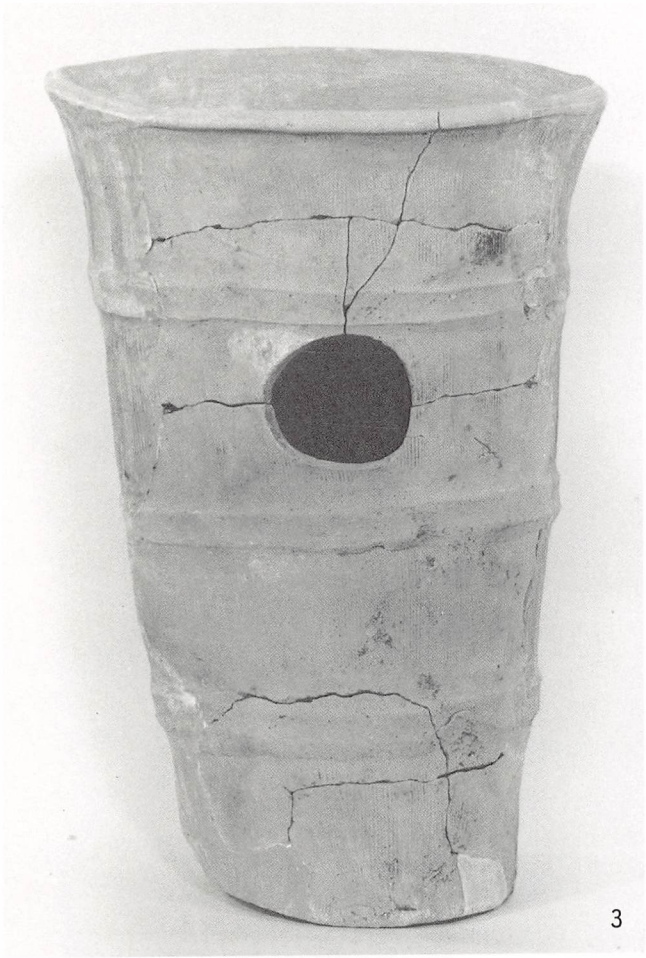
2　同　　上

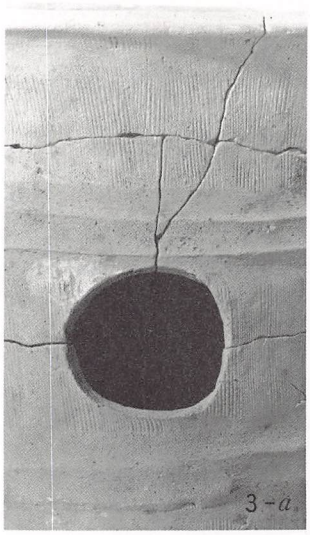


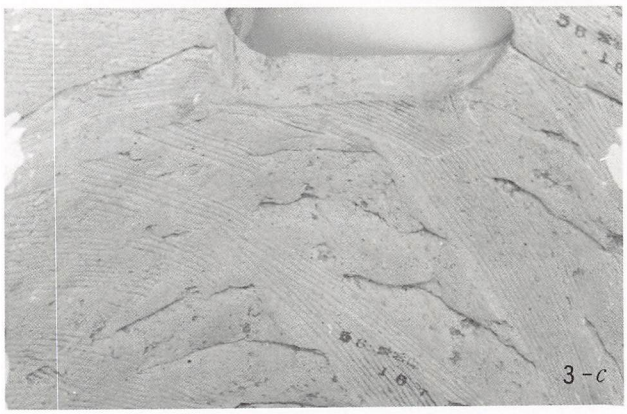
1　前方部南側調査区出土遺物１（1，*a*：スカシ～口縁部，*b*：基底部～第２段，*c*：内面）



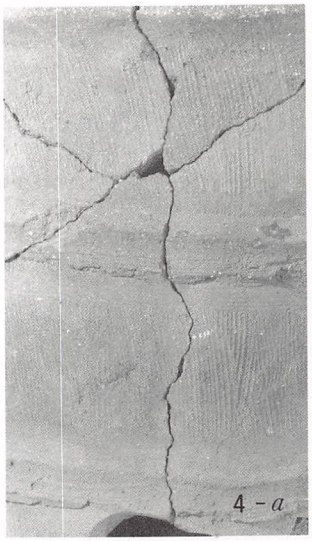
2　同　　上　　2（2，*a*：スカシ～口縁部　*b*：内面）

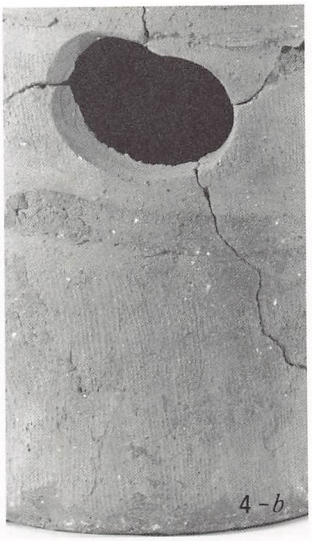


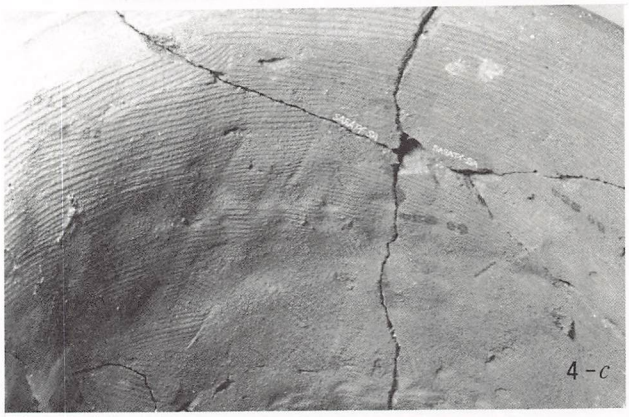




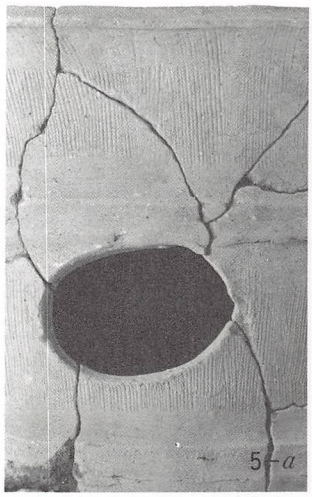
1　前方部南側調査区出土遺物　3（3，*a*：スカシ～口縁部，*b*：基底部～第2段　*c*：内面）

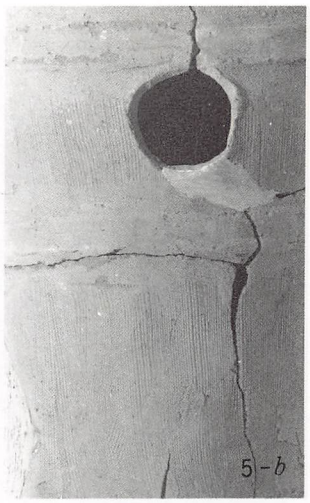


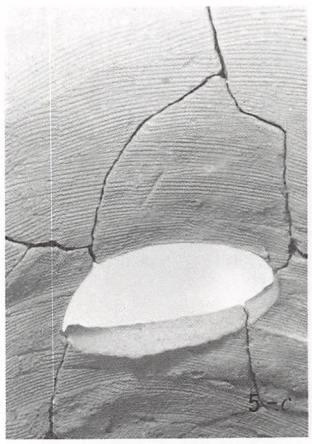


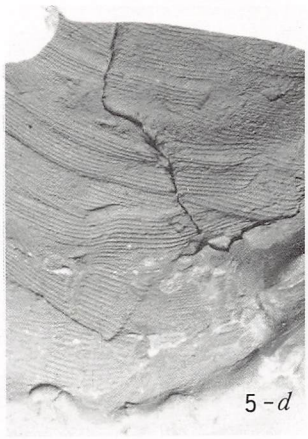


2　同　　上　　4　（4，*a*：第3段～口縁部　*b*：基底部～第2段　*c*：内面）

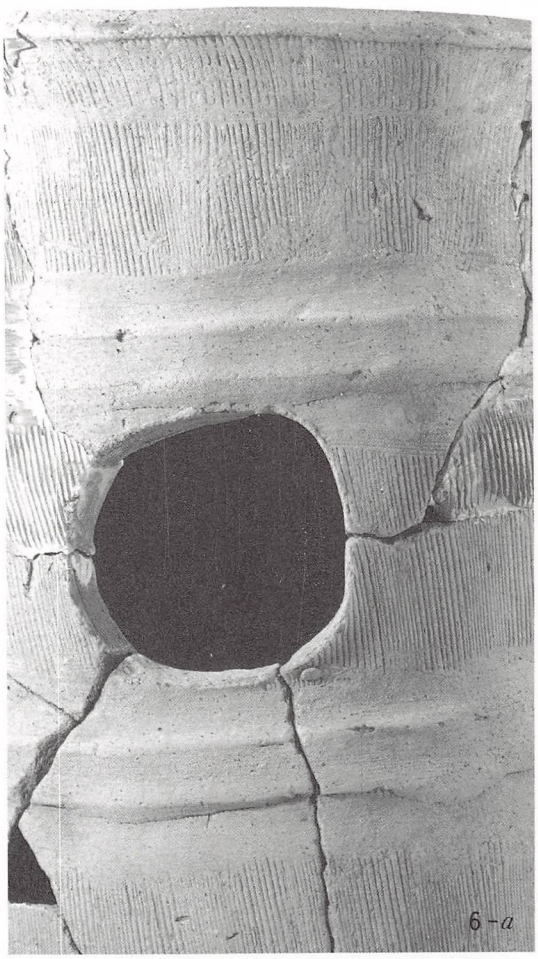




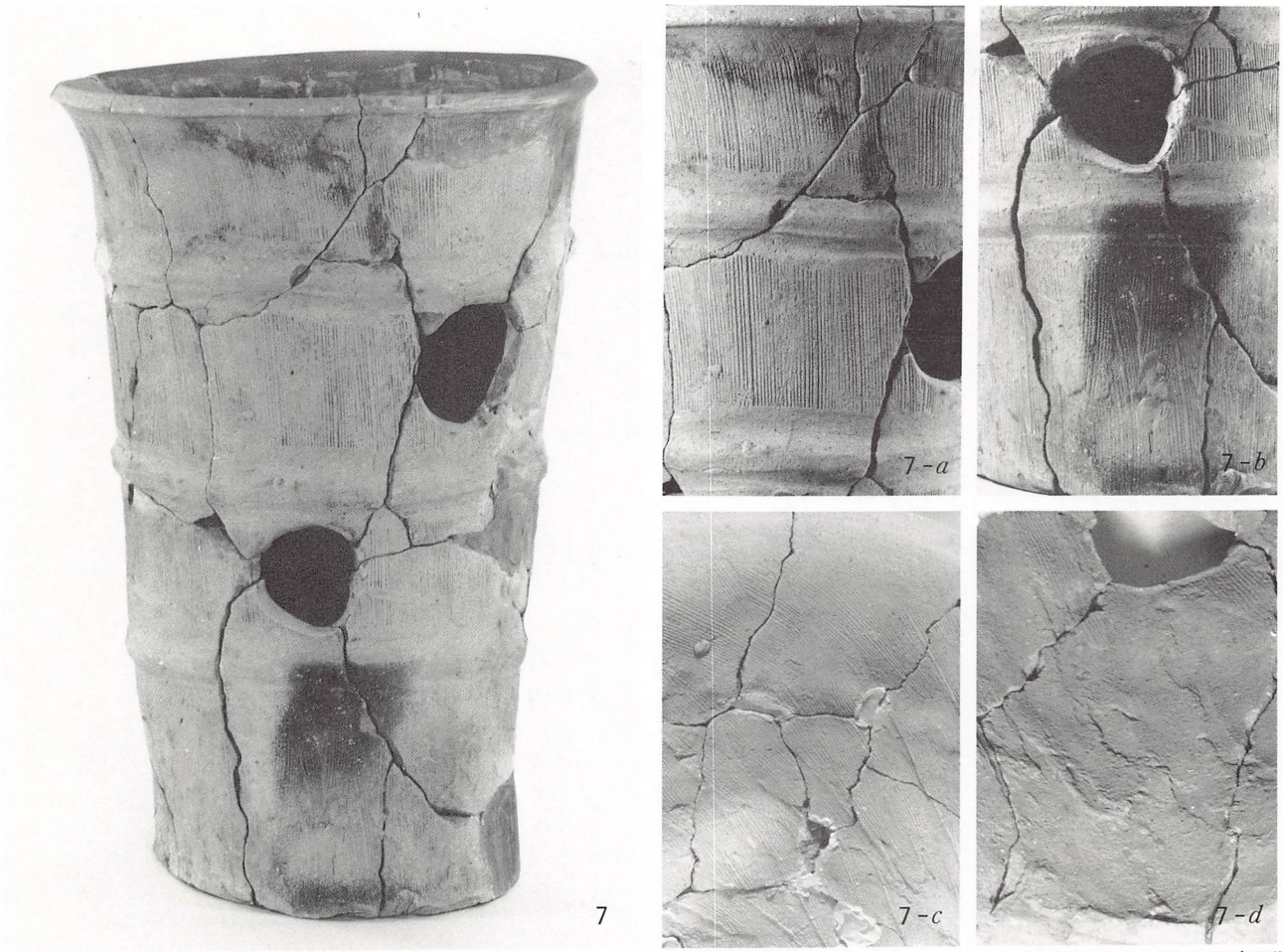




1　前方部南側調査区出土遺物　5（5，*a*：第3段～口縁部　*b*：基底部～第2段　*c*：口縁部内面　*d*：基底部内面）

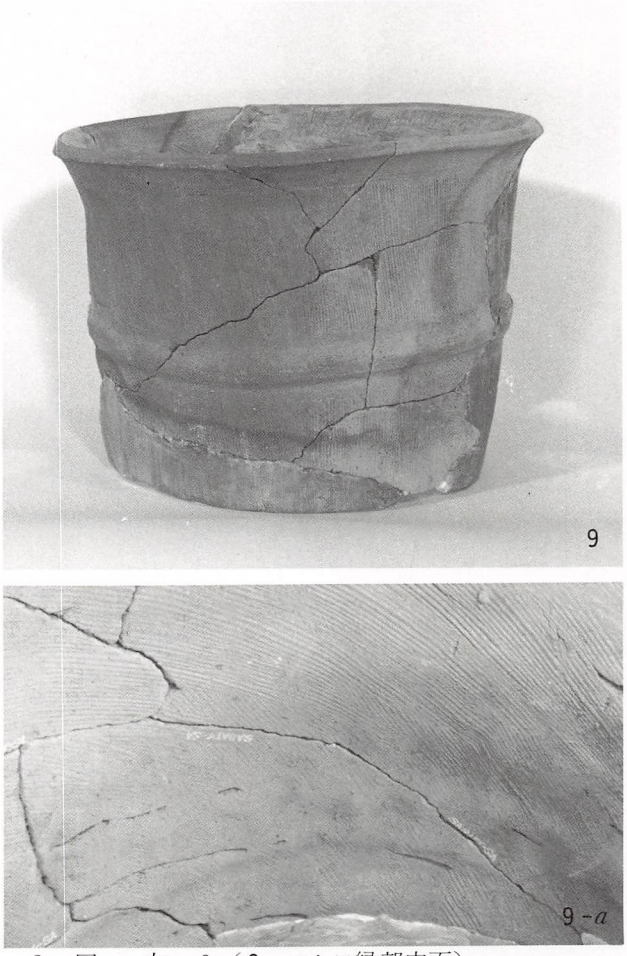


2　同　　上　　6（6，*a*：体部中位～口縁部）



1　前方部南側調査区出土遺物　7（7，*a*：第3段～口縁部　*b*：基底部～第2段　*c*：口縁部内面　*d*：基底部内面）

2　同　　上　　8（8）

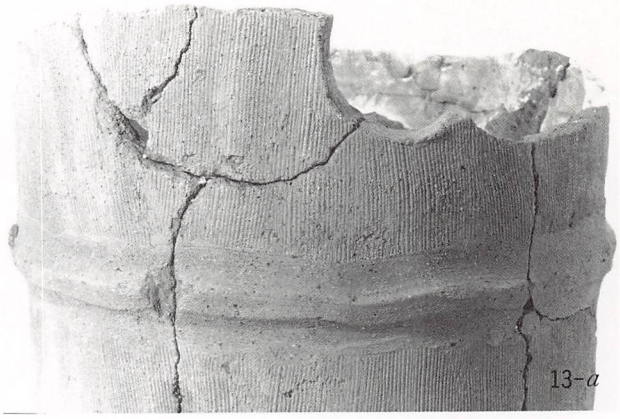


3　同　　左　9（9，*a*：口縁部内面）

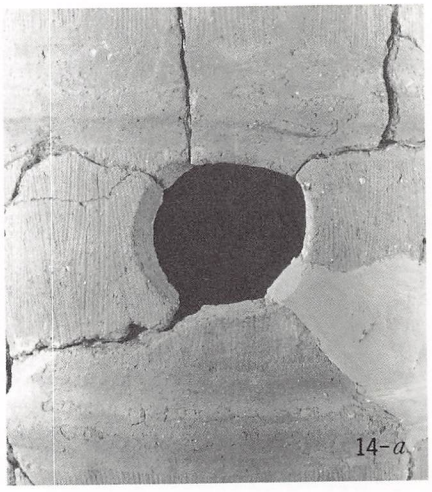
1　前方部南側調査区出土遺物 10（11, *a*：外面窯印）

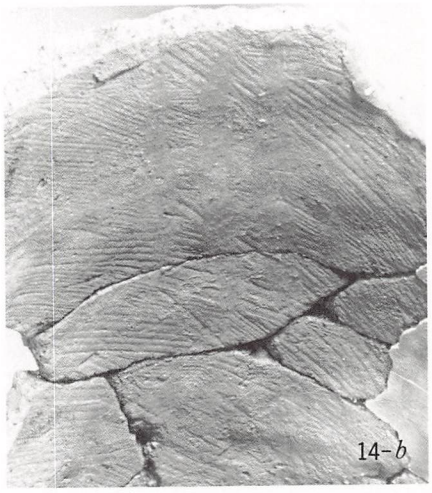
2　同　　左　11　（10）

3　同　　上　　12　（12, *a*：内面）

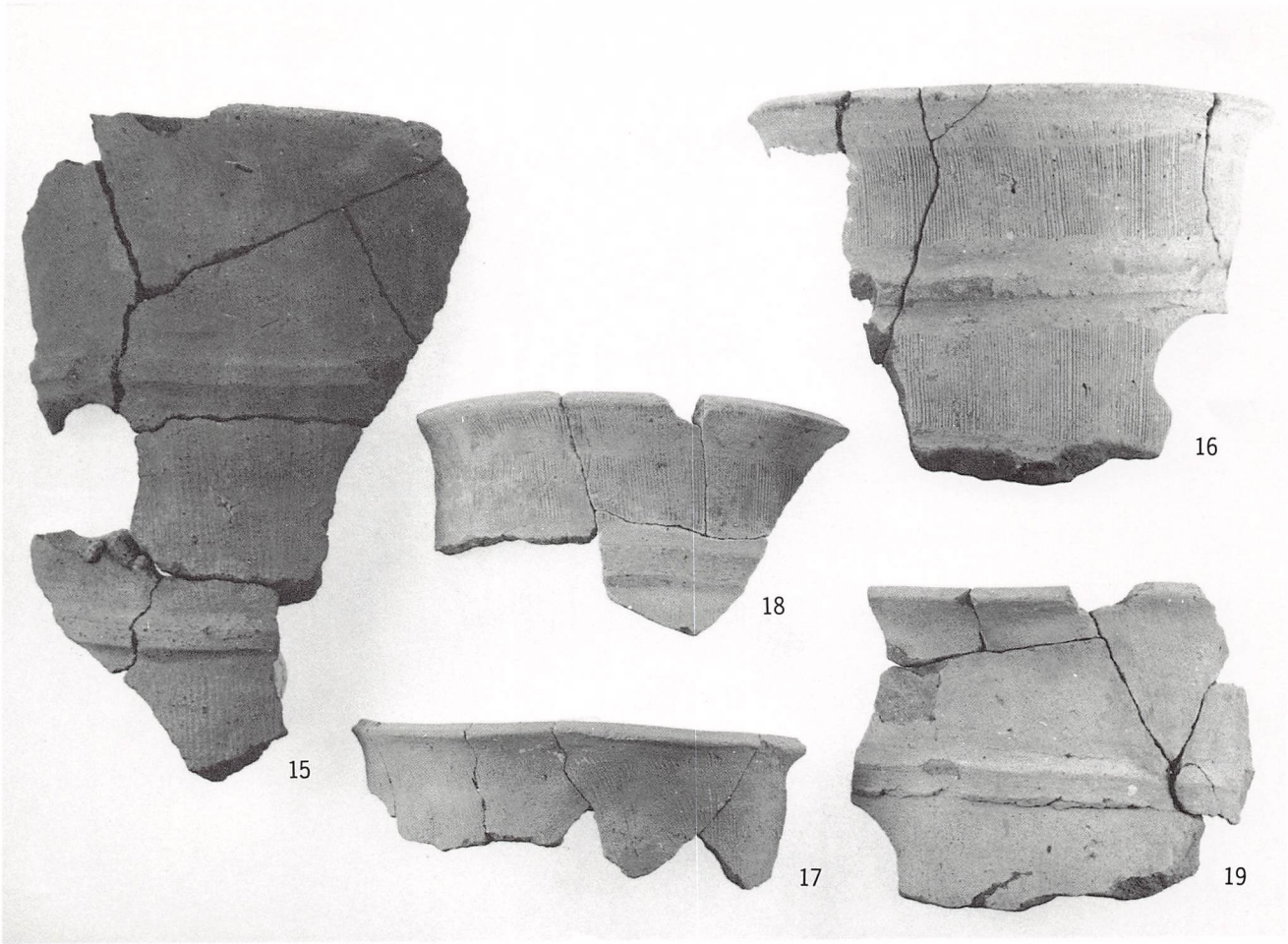


1　前方部調査区出土遺物　13　（13，*a*：タガ，スカシ部分　*b*：基底部段）

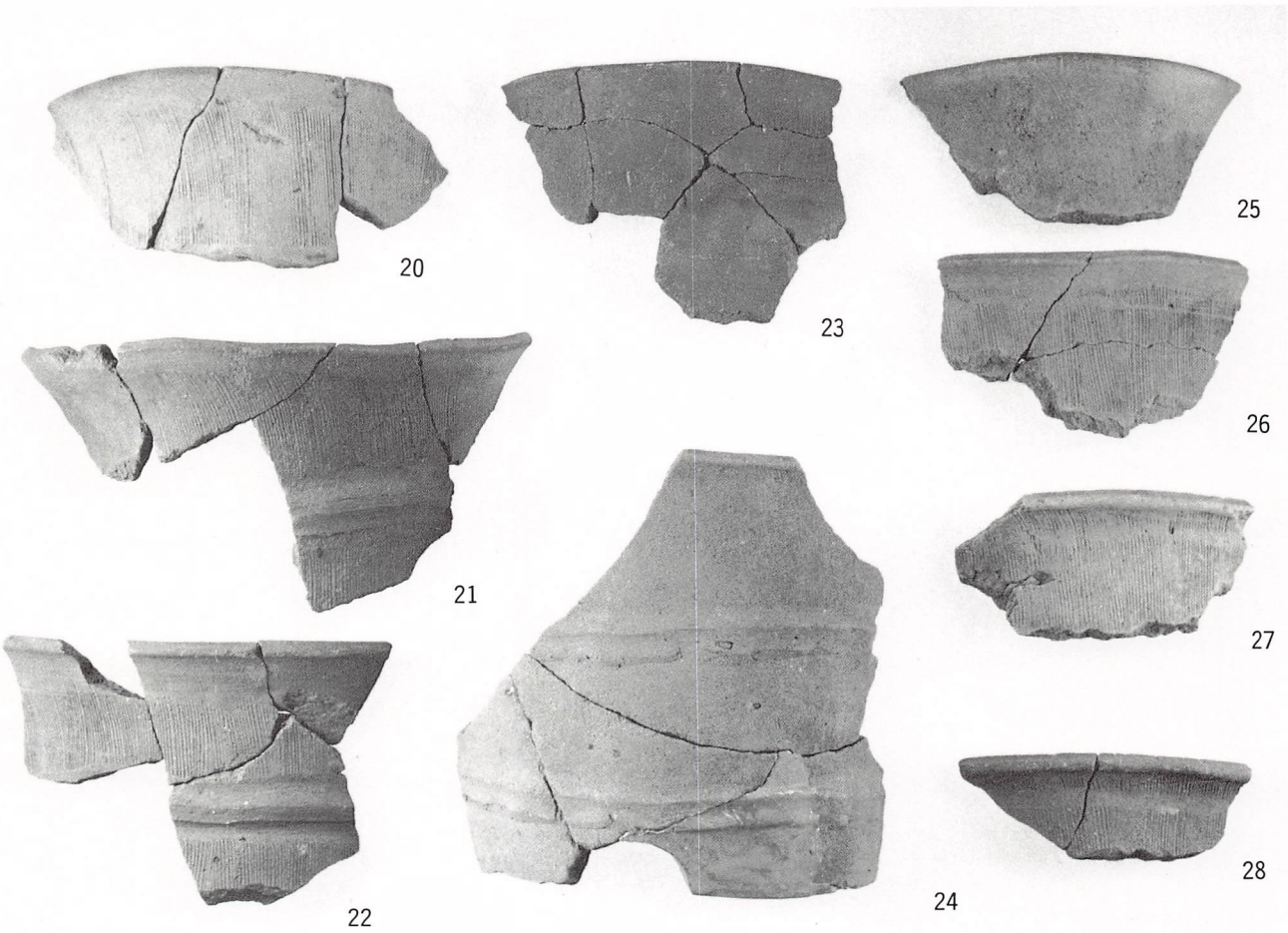




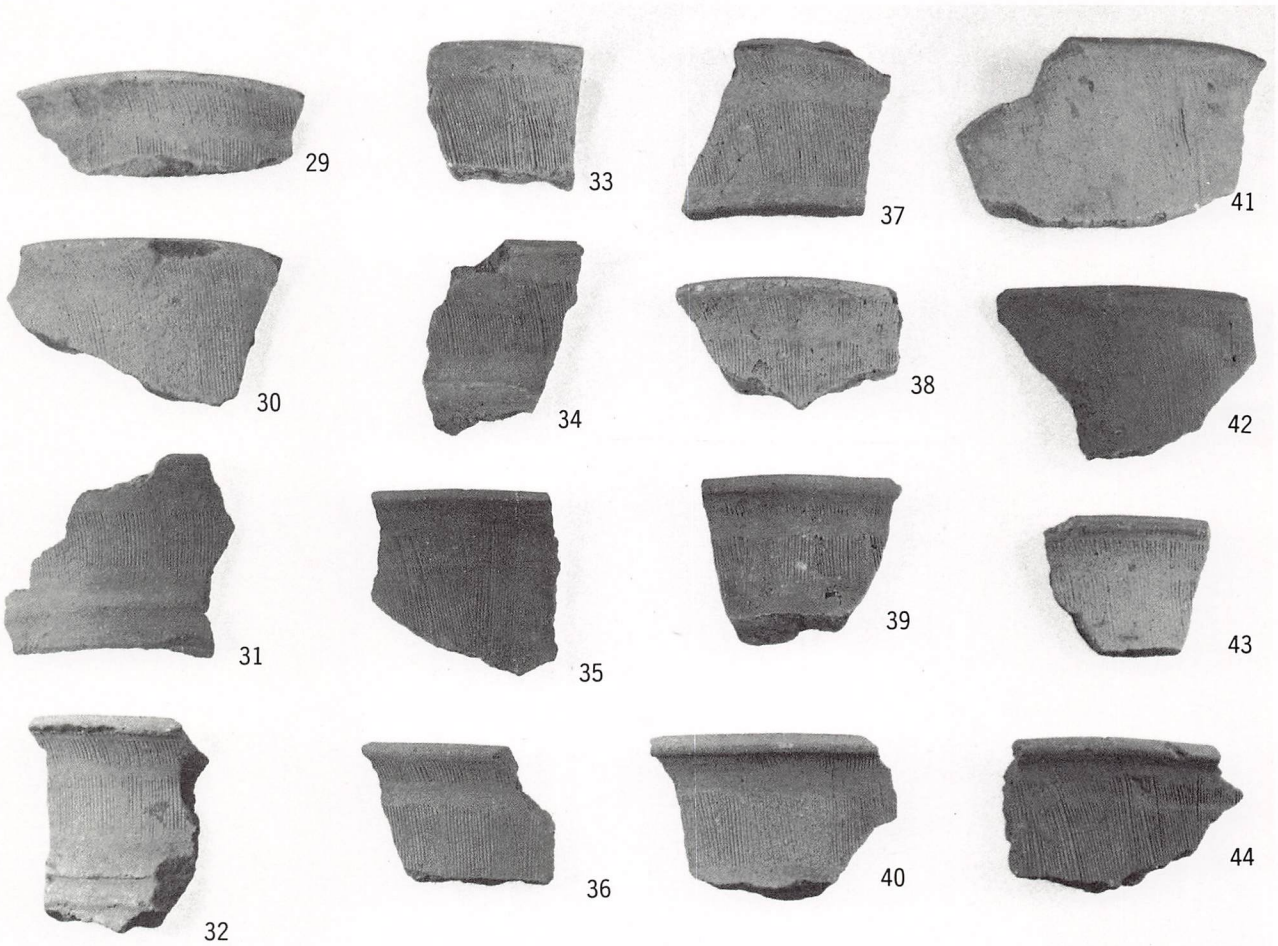
2　同　　上　　14　（14，*a*：タガ，スカシ部分　*b*：内面）



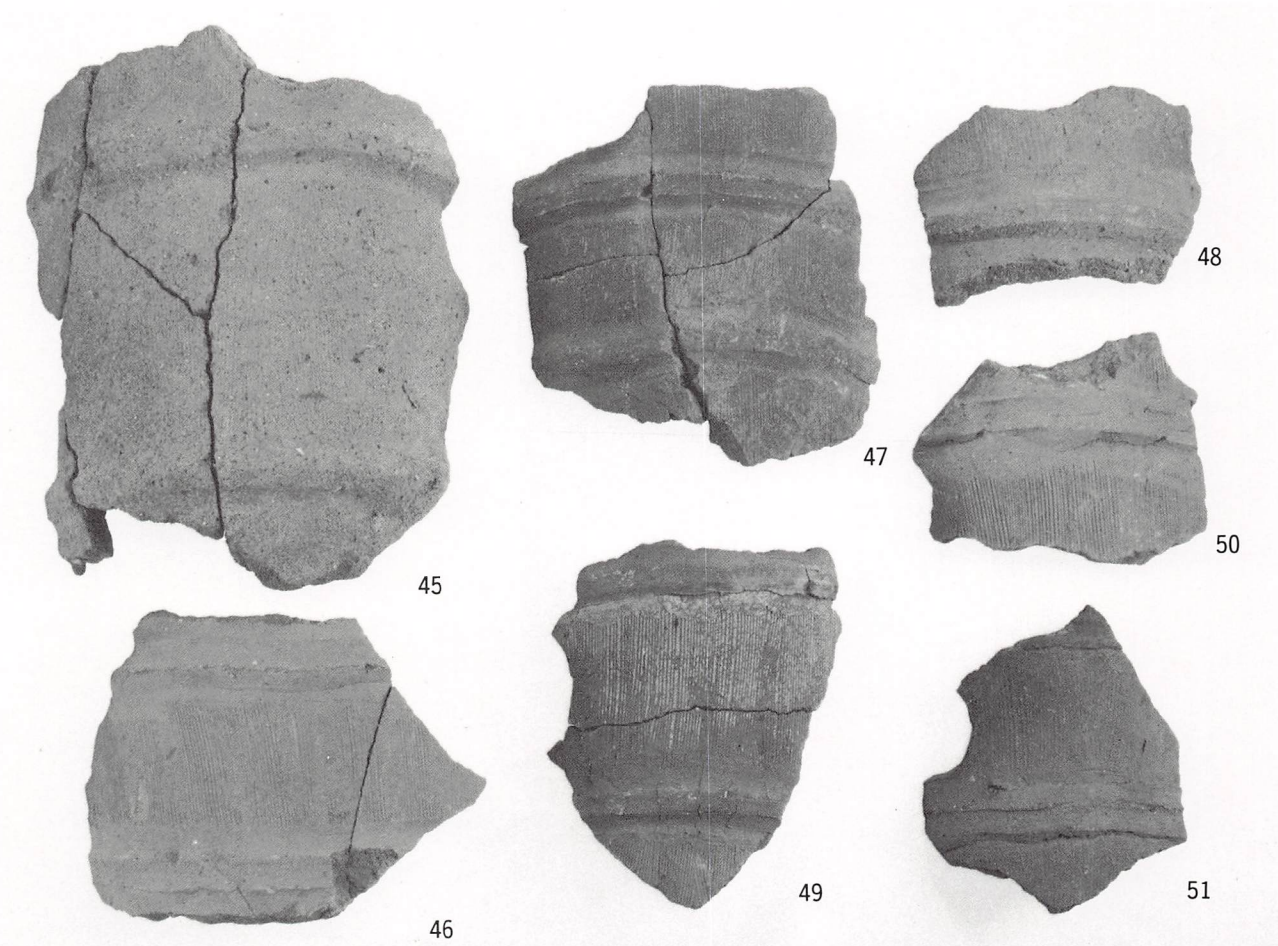
1　前方部南側調査区出土遺物　15　（15～19）



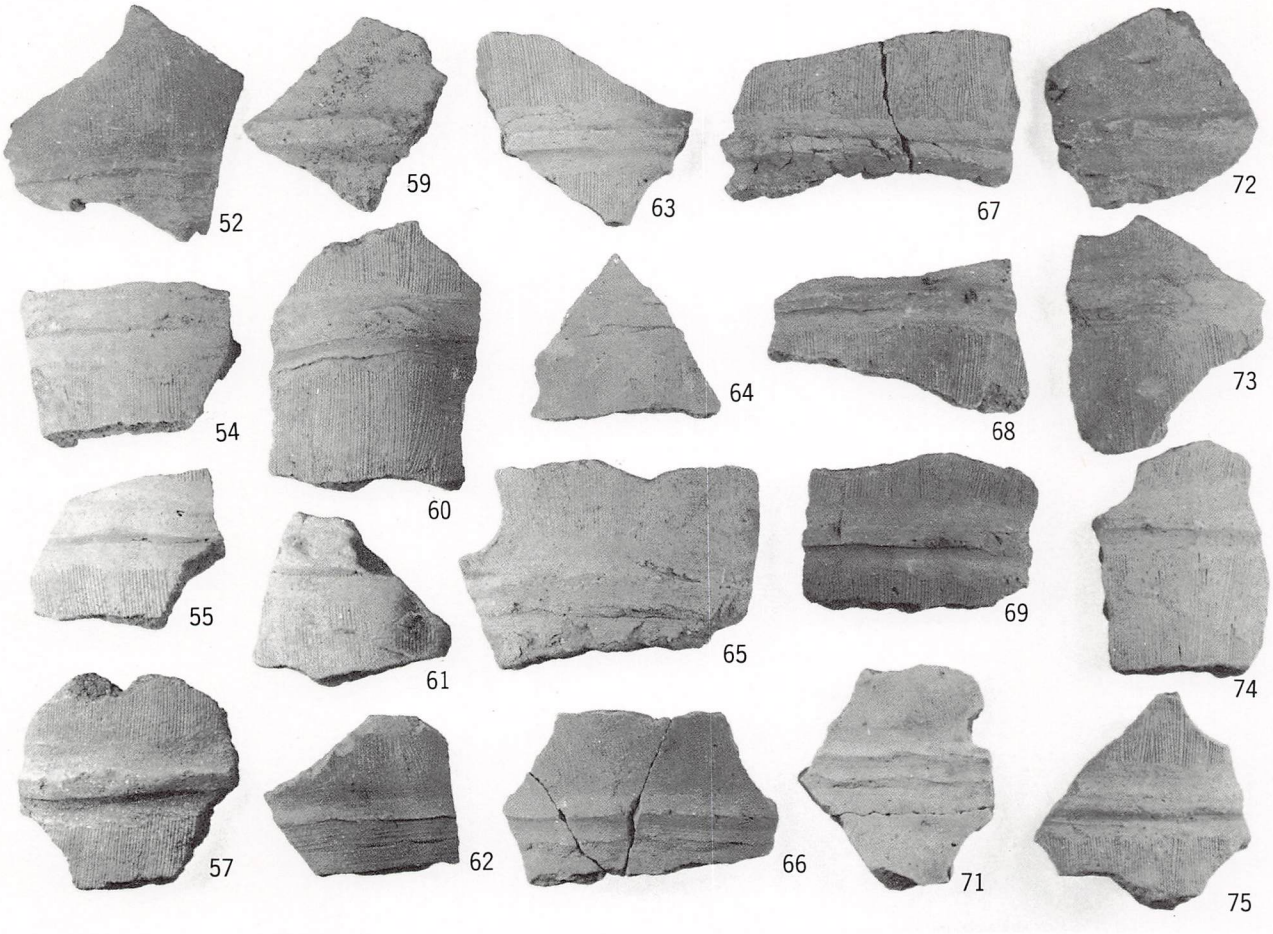
2　同　　上　　16　（20～28）



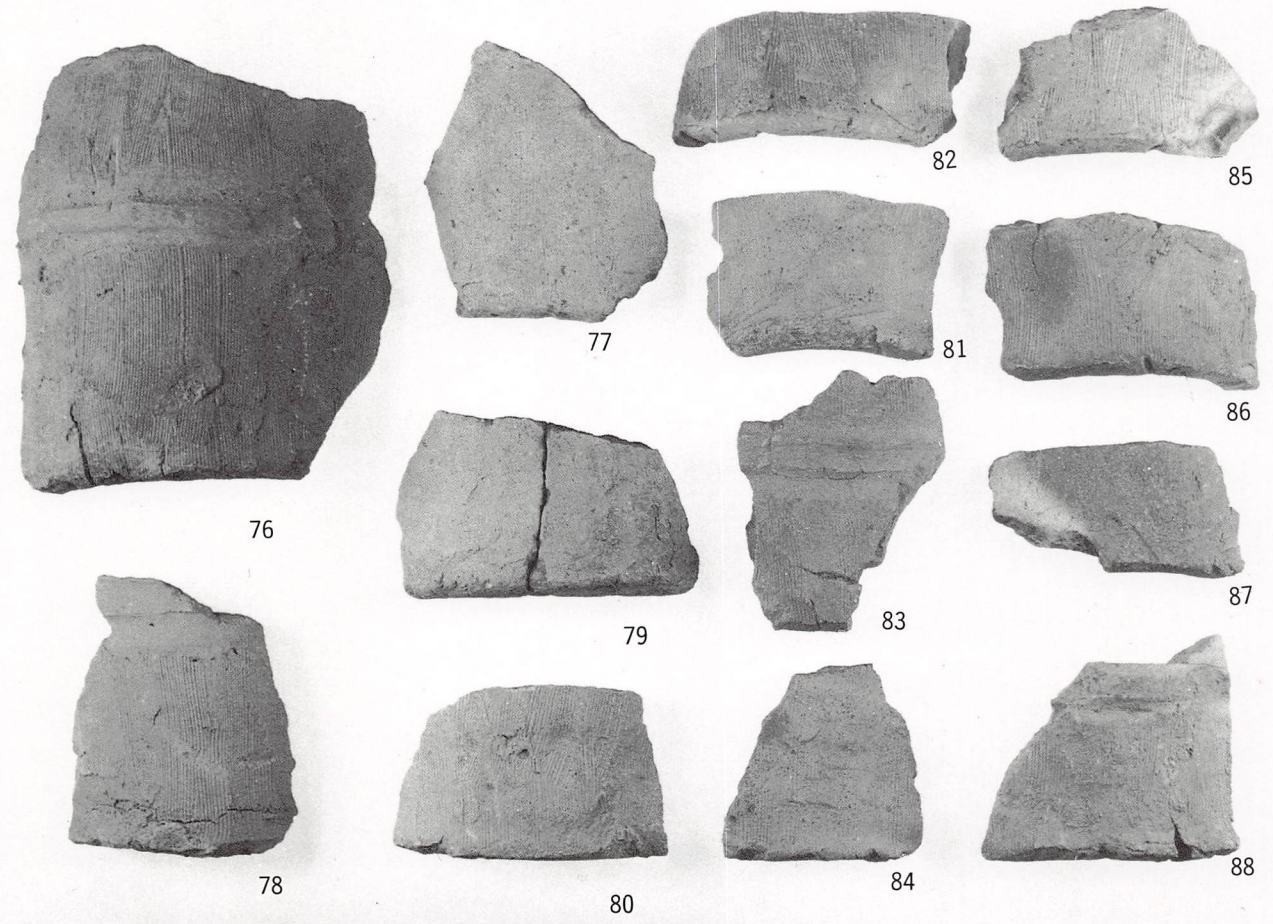
1　前方部南側調査区出土遺物　17　（29～44）



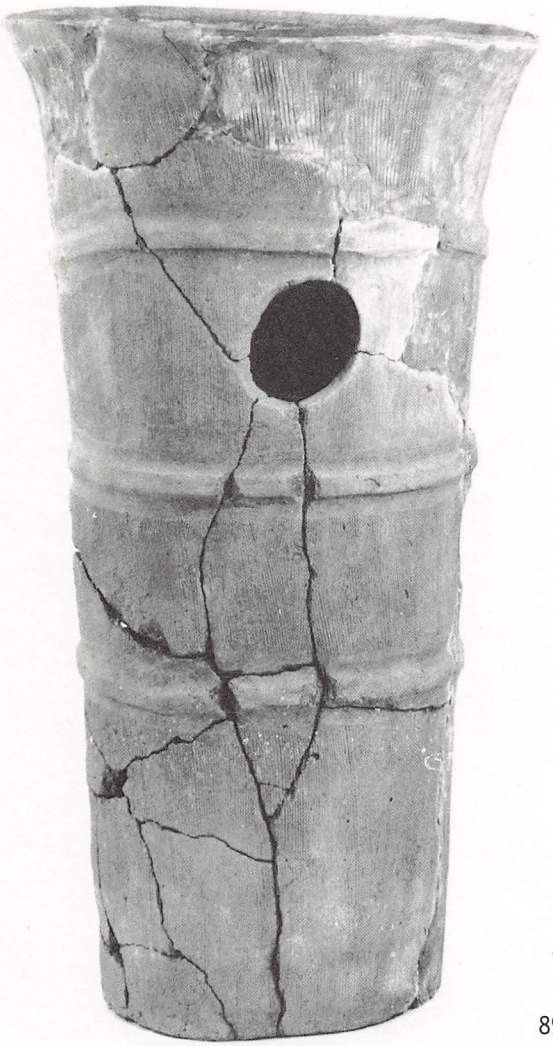
2　同　　上　　18　（45～51）

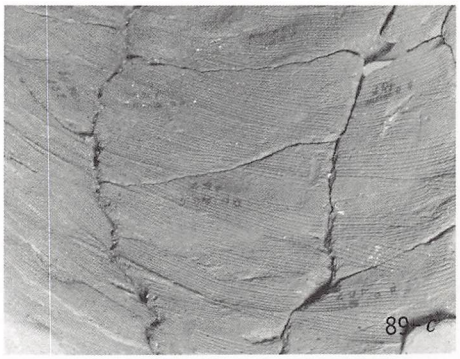


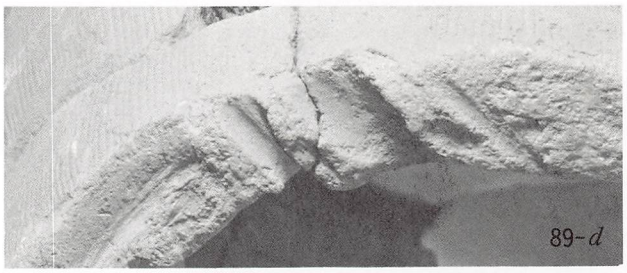
1　前方部南側調査区出土遺物　19　（52～75）



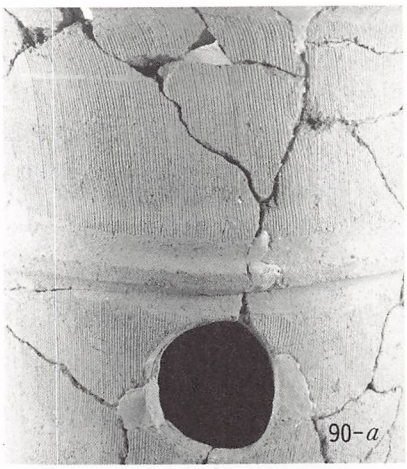
2　同　　上　　20　（76～88）



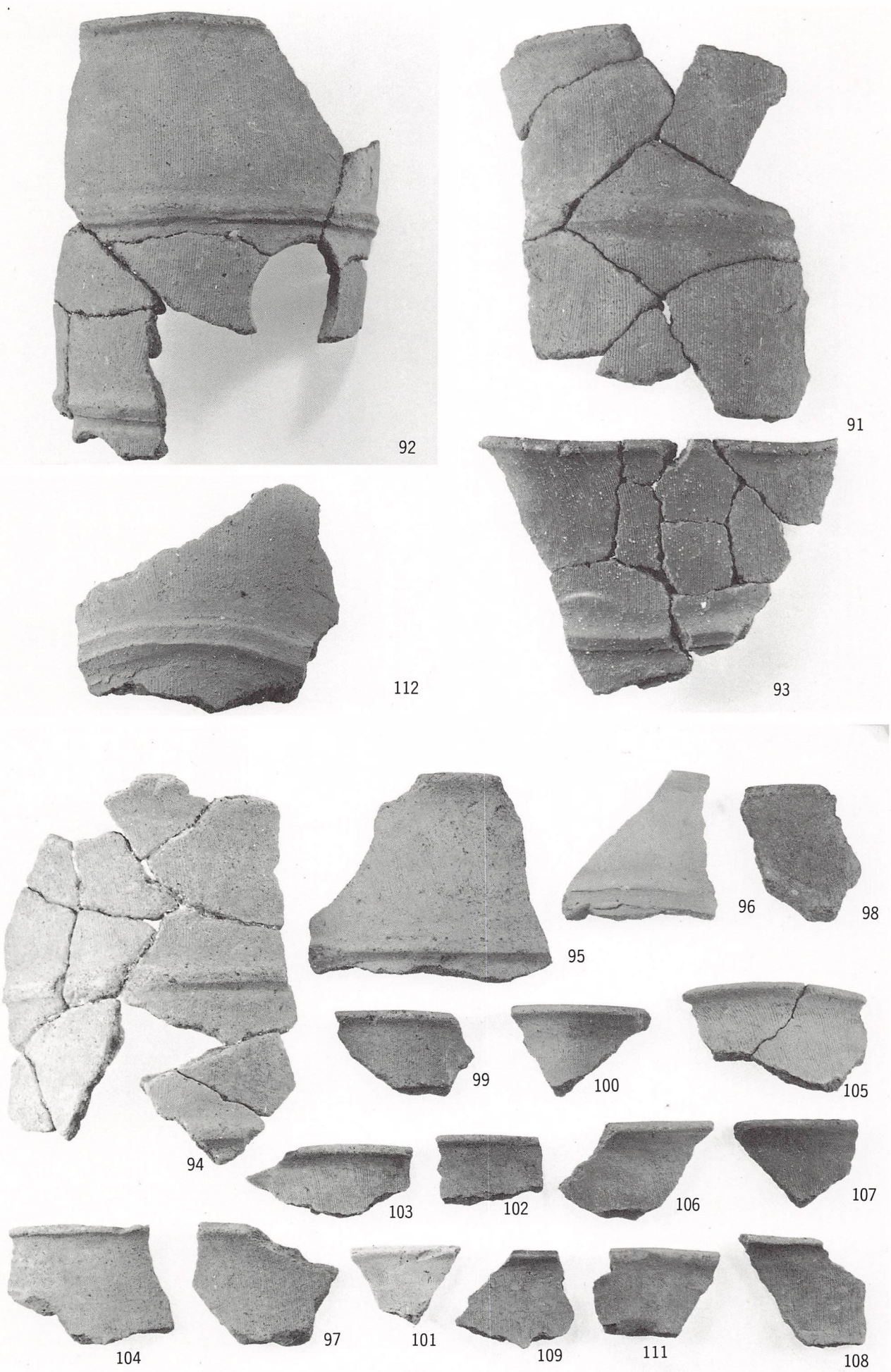




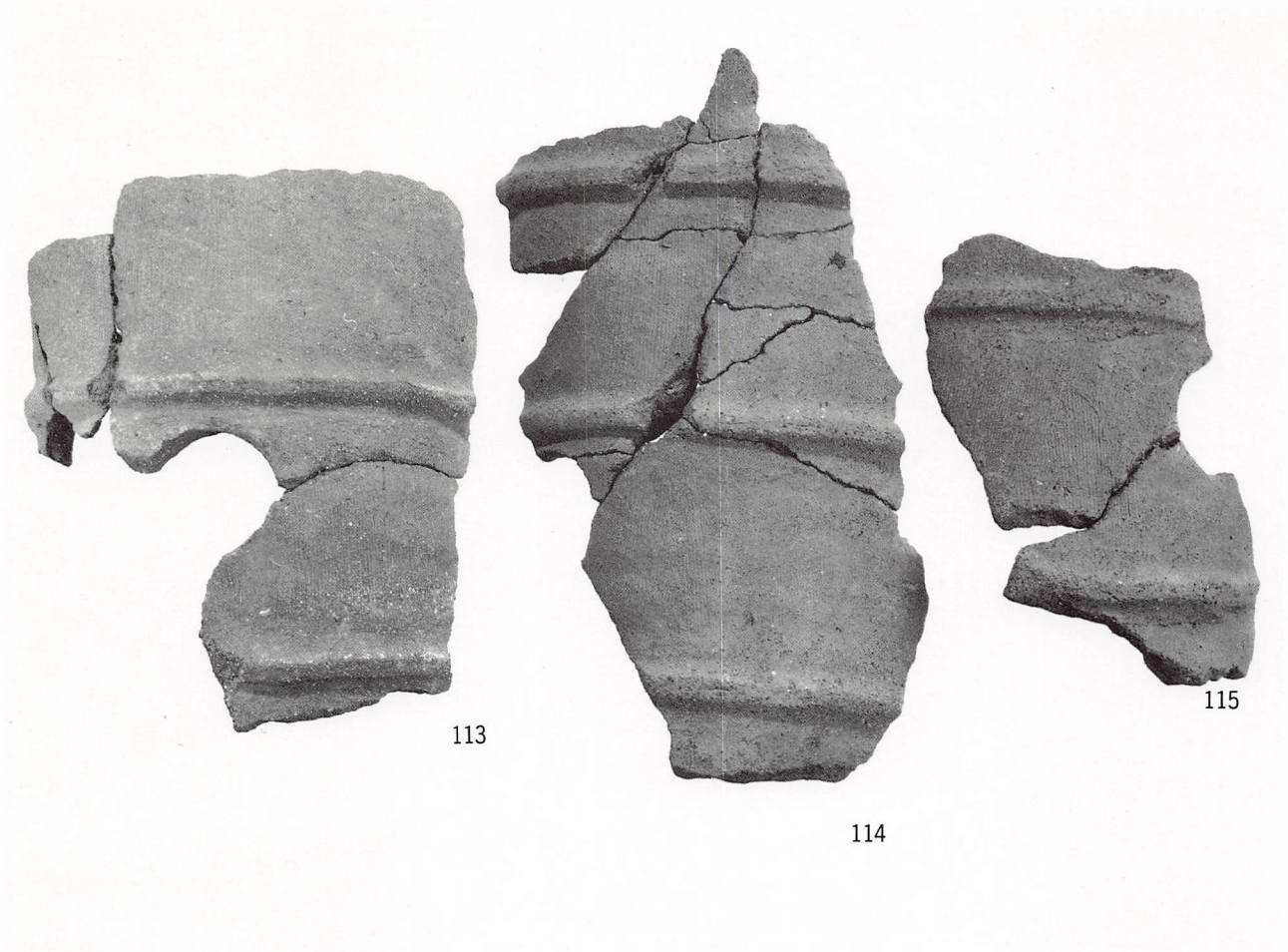
1　後円部東側調査区出土遺物　21（89，*a*：第２，３段　*b*：基底部～第２段　*c*：基底部内面　*d*：底面）



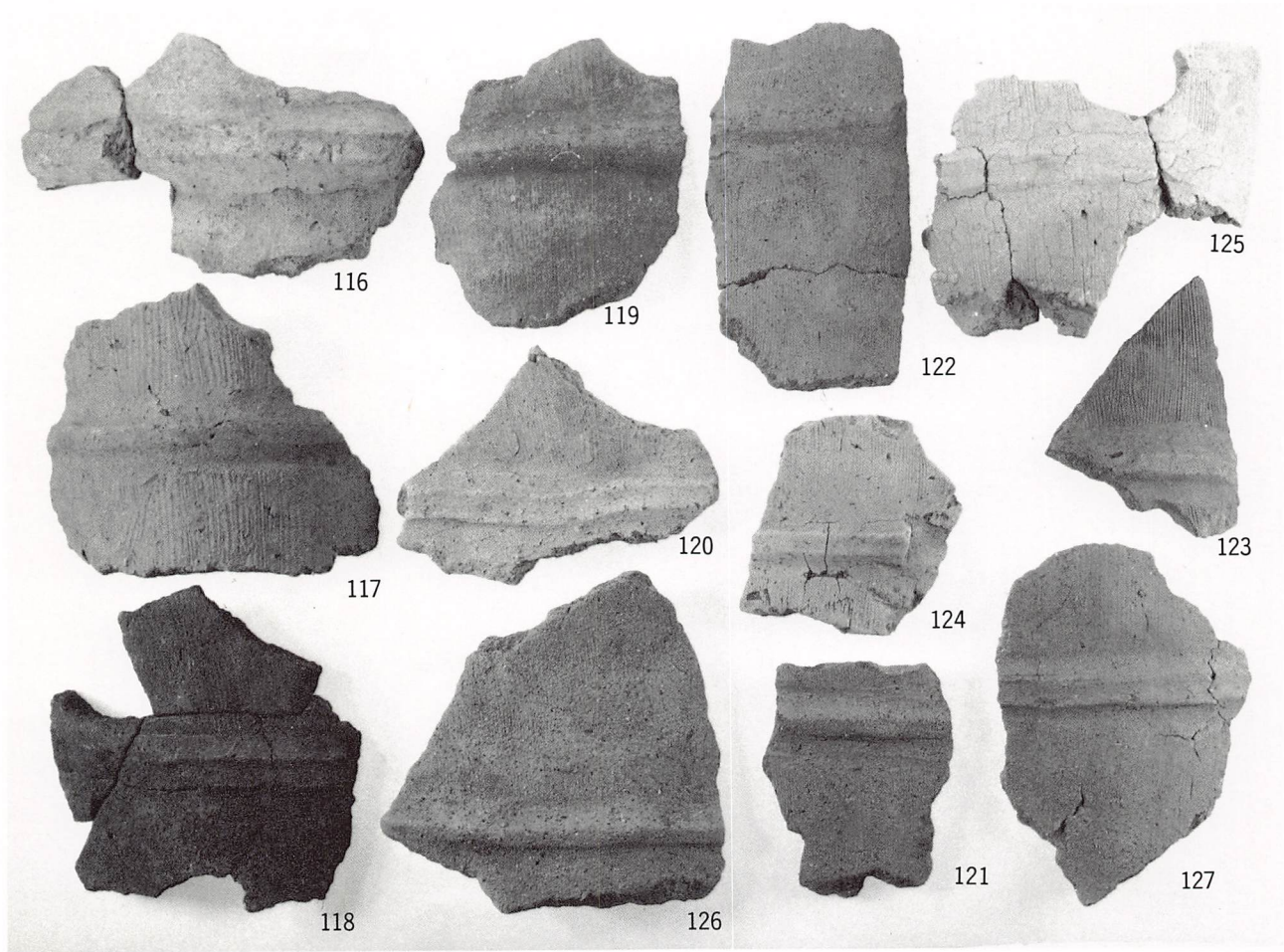
2　後円部東側調査区出土遺物　22（90，*a*：スカシ～口縁部，*b*：内面）



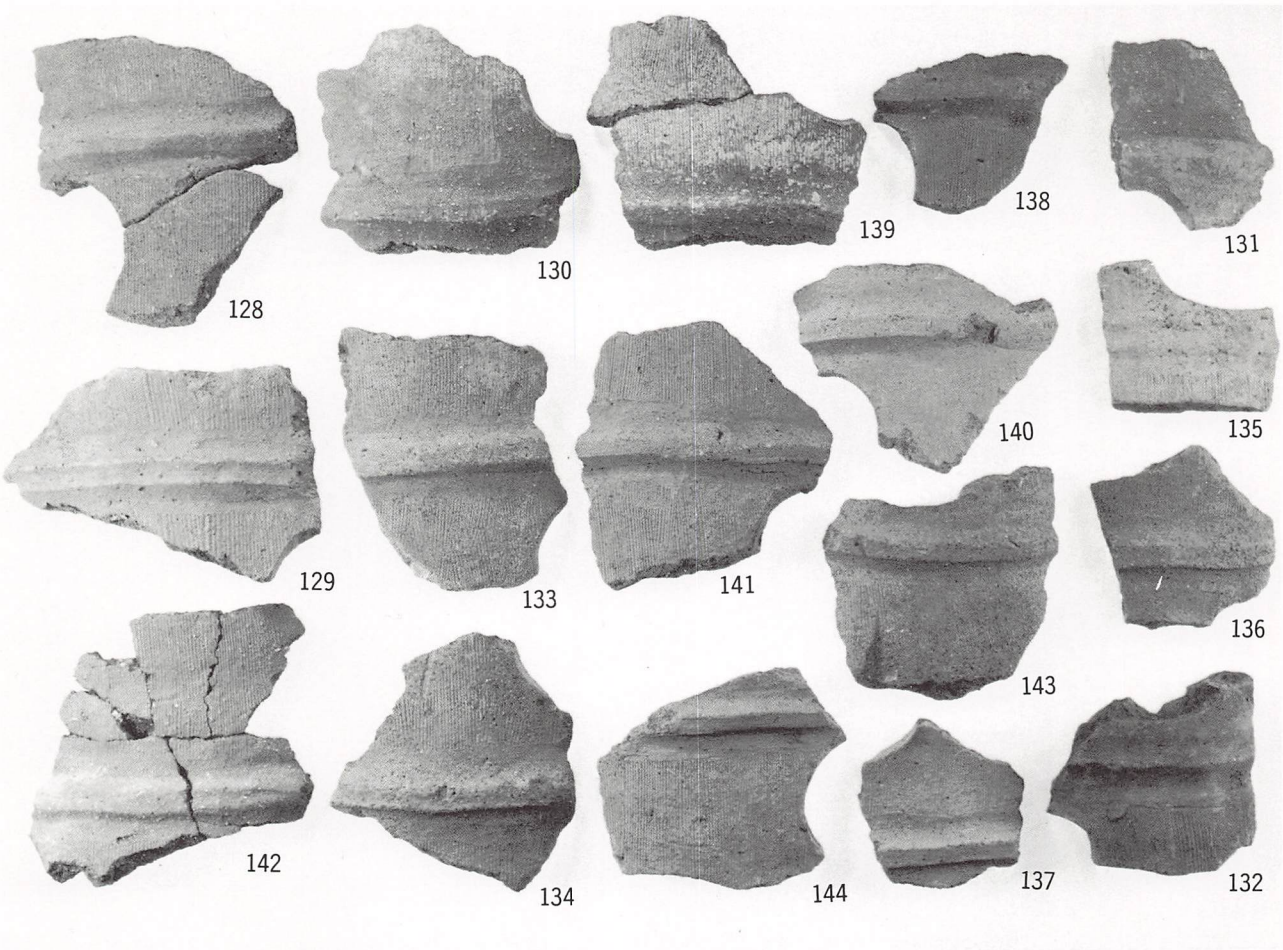
後円部調査区出土遺物　23　（91～112）



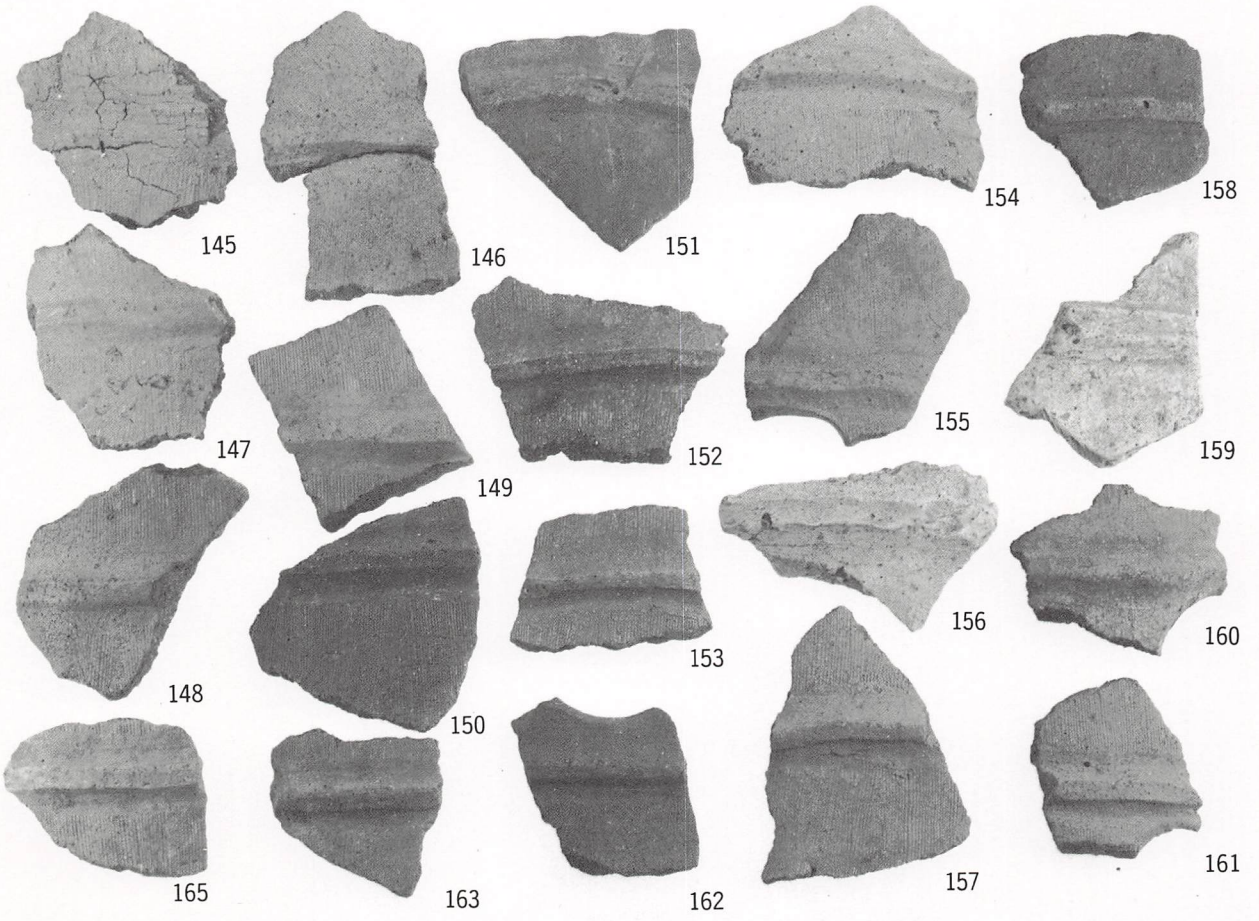
1　後円部東側調査区出土遺物　24　（113～115）



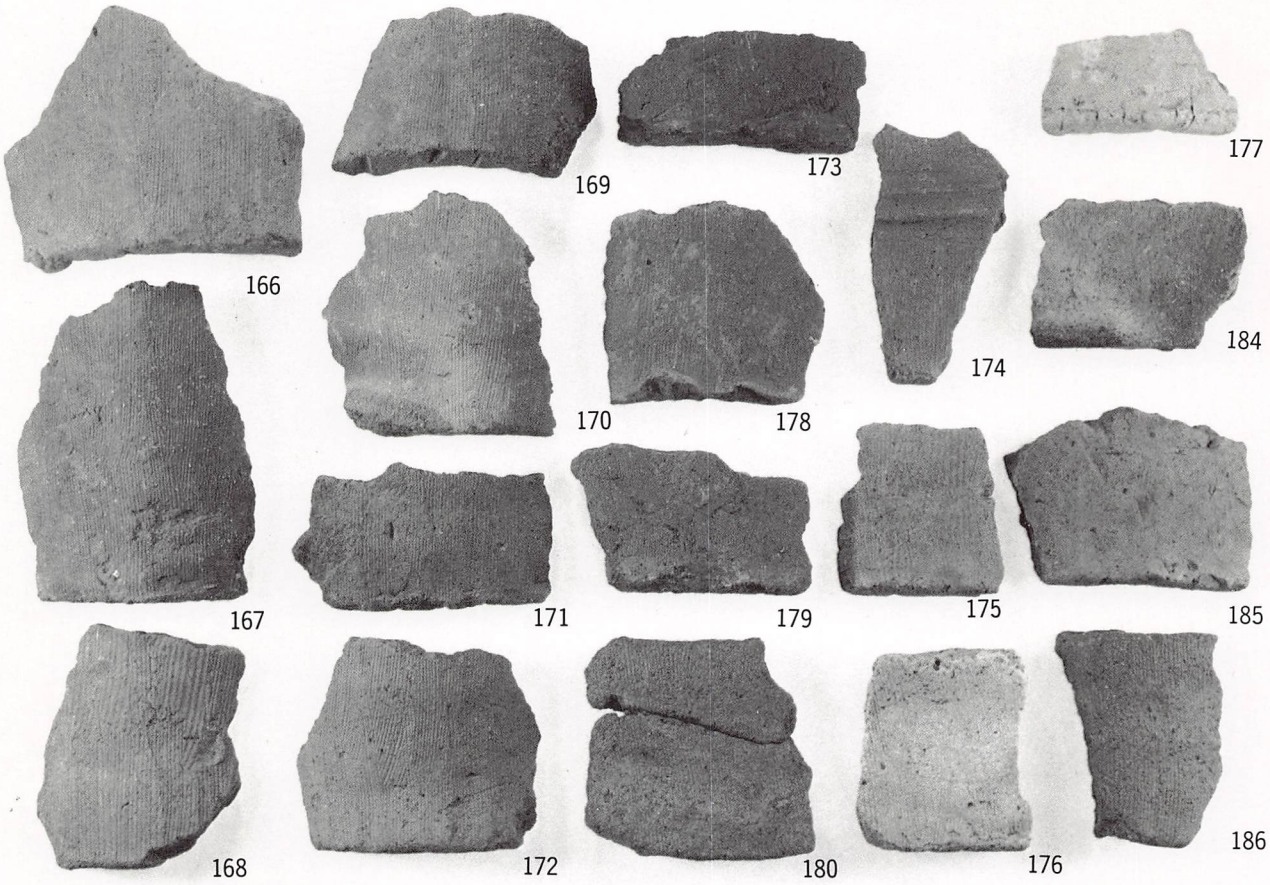
2　同　　上　　25　（116～127）



1　後円部東側調査区出土遺物　26　（128～144）

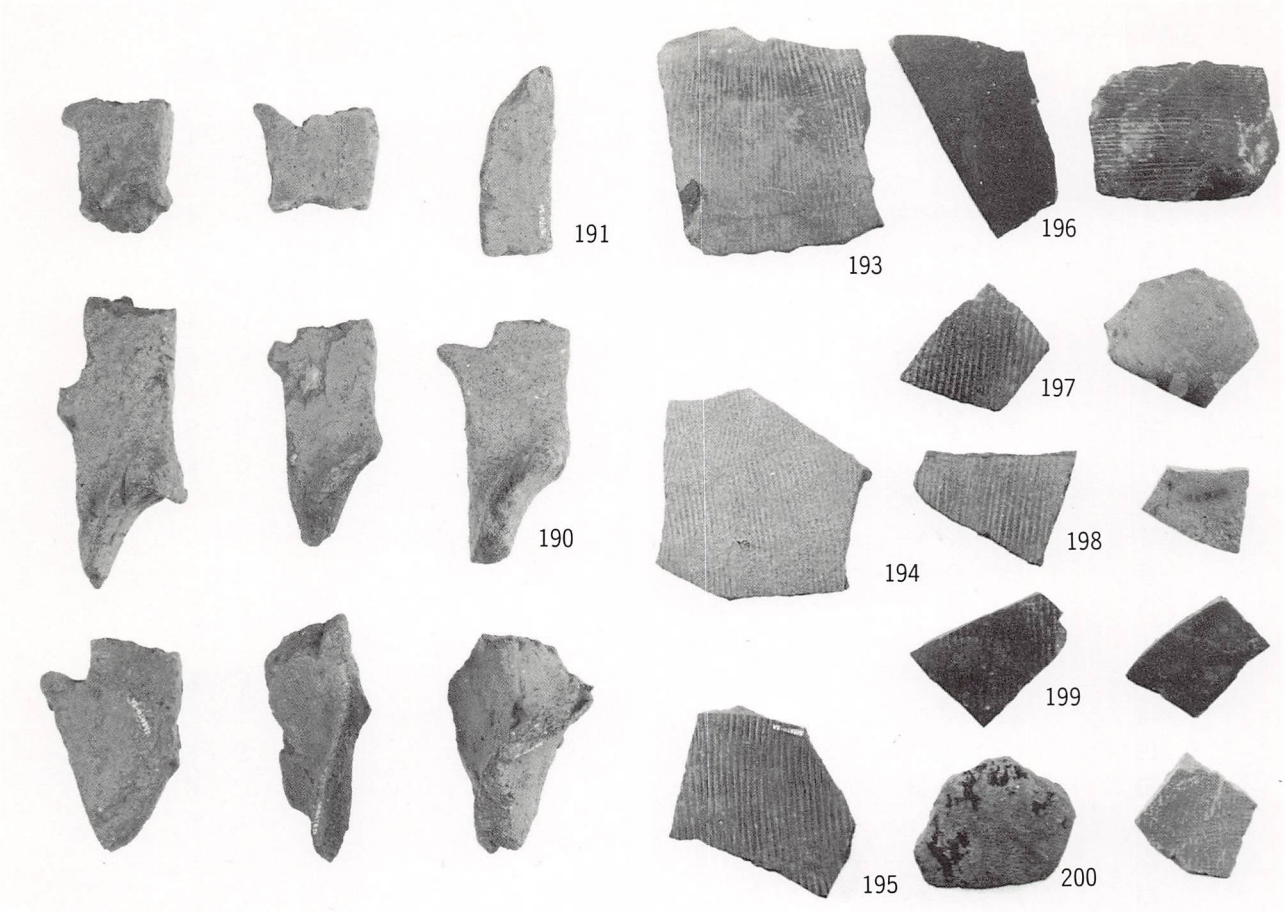


2　同　　上　　27　（145～165）

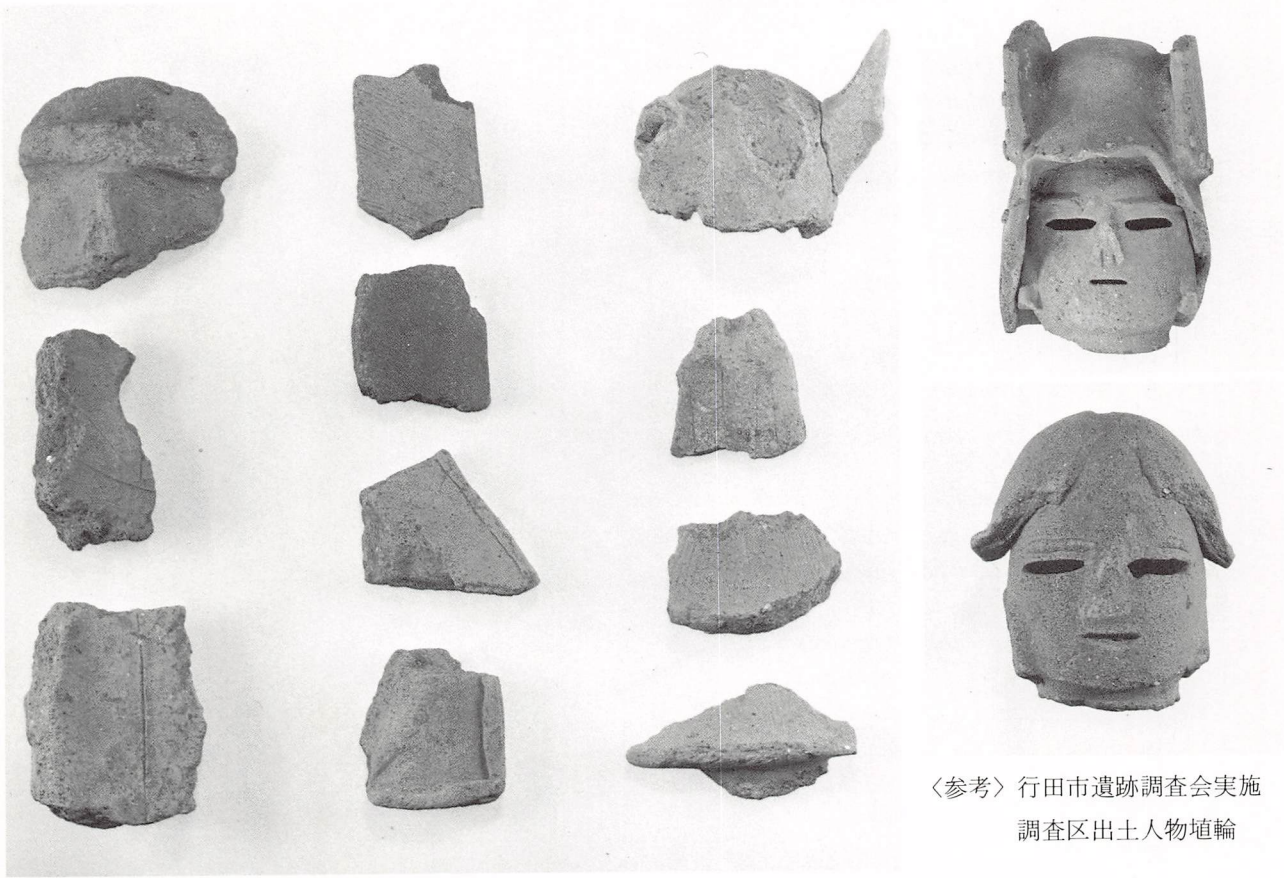


1　後円部東側調査区出土遺物　28　（166～186）

2　形象埴輪　1　（187～189，192）



1　形象埴輪　2（蓋形埴輪，190，191）　3　須恵器（193～200）



2　形象埴輪　3

〈参考〉行田市遺跡調査会実施
調査区出土人物埴輪

埼玉古墳群発掘調査報告書　第三集

愛宕山古墳

昭和六〇年三月二〇日　印刷
昭和六〇年三月三〇日　発行

編集　埼玉県立さきたま資料館
発行　埼玉県教育委員会
印刷　アサヒ印刷株式会社